
銀魂 攘夷篇

青華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 攘夷篇

【Nコード】

N4101I

【作者名】

青華

【あらすじ】

銀時の過去、桂の想い、高杉の真実、坂本の願い。。
様々な想いと事実が交差する中、「計画」は実行され、再び4人の武神は再会し、全ての真実が明らかになる。
遂に銀魂最終篇、『攘夷篇』が幕を開ける！

第零訓 始まりの始まり

4人の侍は出会い

4人の侍は誓い

4人の侍は別れ

そして、今、

再び「時間」は訪れた。

攘夷の武神と呼ばれた4人を中心に、物語は始まり、全てを巻き込み……そして、終わる。

銀時の過去。

桂の想い。

高杉の真実。

坂本の願い。

今、銀魂最終篇

『攘夷篇』

が幕を開ける。

第零訓 始まりの始まり（後書き）

第一話は明日にでも投稿いたします。

これからどうぞよろしくお願いしますm（
—
—
）m

第一訓 人の話はちゃんと聞こう

「…ふあああ…」

「銀ちゃん、腹減ったアル。…酢昆布買ってくれヨ。」

「自分で買ってこーい、もしくは採ってこーい。」

「銀ちゃん、スクーター貸してくれヨ。盗ってくるネ。」

「神楽ア、子どもはスクーターなんて危ないもん乗っちゃいけねえんだよ?」

「…すみません、なんか今ツツ込むのもめんどくさい気分なんですけど。」

万事屋銀ちゃん。

ここは名前の通り、依頼があればなんでもする店。

…しかし、今日は全く客足が無く、3人とも暇そうにしていた。

>ピンポン…<

「お…」

>ピンポン…<

2回目のチャイム。

「お客さんアル！」

それを聞いた銀時は急ぐこともなく、ダラダラと玄関へ向って行く。

何度もチャイムは鳴り響いた。

「あんだよ…うつせーな…」

銀時はだるそうに鍵を開ける。

「!?!」

銀時が扉を開けるより先に、扉が開いた。

「銀…時…!」

「な…」

…なんとそこにいたのは、傷だらけになった桂だった。

「…これから真選組が来る…」
「…は…？」

「とにかく俺を中に入れてくれ…！」
桂は銀時の腕を掴んだ。

「……。」

銀時はその桂の言葉と様子を見て、すぐに状況を察知した。

（そういうことか）

銀時は扉を閉め、鍵をかける。

「……。」

銀時は無言で後ろを振り返った。
後ろには新八と神楽がおり、2人を手招きする。

「…桂さん…！」

「ツ…ツラ…」

「…静かにしろ。こいつを奥へ運んで手当てしてやってくれ。」
銀時は桂を抱え、新八と神楽に任せた。

「…。」

2人は頷き、桂を奥へ運ぶ。

（なかなか早いお出ましだな…）

銀時は再び扉を開けた。

「はい、万事屋銀ちゃんです。」

「……………」

「あら？沖田くんと…誰だてめえただの多串君なのかそつなのか」

そこにいたのは案の定、真選組副長土方十四郎と真選組一番隊隊長
沖田総悟とその部下達だった。

隊服はいつもと違い薄汚れており、破れている者さえいる。

「どうも、旦那。」

「……………」

沖田は淡泊な無表情で軽くお辞儀した。
しかし土方は黙って何も言わない。

「何だよノリ悪いな…。…つかあんたらがウチに何の用？」

「…旦那ア。…あんた今ウチに誰がいるかい？」

「誰かア…？」

「誰がいるか教えろつつてんだよ」

土方は少しイラついているように見えた。

「ああ？…今新八と神楽と俺の幼なじみがいるけど」

「幼なじみ？」

「寺子屋の時から。」

「……その言葉…信じますぜ？旦那。」

沖田はジッと銀時の目を見つめている。

「おい総悟！」

すると土方が突然沖田に怒鳴った。

「……。」

「…万事屋…単刀直入に言う。

…俺達はさつきまで、ある攘夷志士を追っていた。

しかしこの辺りでその攘夷志士が突然いなくなったんだ。

…不自然なくらいいきなり、な。

…隊士中にいんだよ…その攘夷志士がてめえの家に入った所を見た奴が…」

土方は目を光らせた。

「はあ…？知るかよ、んなの…。」

「つーか俺まだイチゴパフェ食べてる途中なんだけどー」

「土方さん……」

「……………」

「もういいじゃないですかイ……」

（…確かに旦那が攘夷に関係がないって証拠はねえが…）
真選組と万事屋はお互い助け合った事だってあったのだ。

「…………悪かったな、万事屋……。行くぞ総悟。」

「へい。」

土方と沖田、そして真選組の隊士達はそろそろと万事屋を去っていった。

「……………」

銀時は静かに扉を閉めた。

（あー…気分悪い………１個嘘ついちゃった）

「奴らに…嘘ついちゃった……」

（イチゴパフェ買えるような金なんてねーつつんだよ）
銀時はゆっくり部屋に戻った。

「銀ちゃん！」

「桂さん、だいぶ落ち着きましたよ。」

桂はソファーに横たわっていた。

「俺としたことが……あらぬ醜態をさらしてしまったものだな……」
桂は天井を見上げたまま、力無く笑った。

「お前がそこまでやられるたあ……どういう事だ……？」

「……少々……油断した……」

「まあ土方も沖田もバカ強えからな……」

銀時は小さくため息をつく。

「……それにしても銀時お前……真選組の輩と親交があるのだな……」

「……。」

真選組、とはいわば攘夷志士の敵であるのだ。

「……ッ……ッラ、別に真選組なんてただの腐れ縁アル。……でもッラは銀ちゃんの幼なじみネ、……親友ネ。」

「……。」

（こういう気分を複雑……と言うのだな）

「…攘夷志士を排除することは真選組^{かれら}の仕事だ。致し方あるまい…。
…しかし、驚いたな…。あの銀時がまさか真選組の輩と親交を持
っているとは」

（あの…銀時、ね）

「…昔の事をいちいちほじくり返すんじゃないやねえよ、ツラ。」
「ツラじゃない桂だ」

「……。」

それ以上は何も言わなかった。

「…俺にとっては昔の事ではないんだ…。悪かったな…。」
桂は目を細める。

「とにかく…落ち着いたらとっとと帰りやがれ」
銀時はフンツと鼻をならした。

「ああ…言われなくても出て行くわ。…ただ…一つ言っておかなければならんことがある」

「？」

「…最近高杉の動向がおかしい。…気を付けろよ。」

（高杉…って…）

聞き覚えのある、決して良い響きではないその名前に、新八と神楽は少し凄んでしまう。

「…あいつ…また京に戻ったんじゃないのかよ」

「いや…戻ったのは戻ったんだが…それからの動きが不審極まりないのだ。」

桂が大きめにため息を吐く。

「？」

「高杉が京に入ってからいきなり高杉の動向に関する情報が耳に入らなくなった。」

「つまり…高杉が全く動かないか、以前より隠密に行動しているかのどちらか…または両方か。」

「まあどちらにせよ不自然なのには変わりはない。」

「……ふーん……。」

まあ忠告はありがてえが…俺にとっちゃそんなの無意味だぜ。…てめーも言っただろうが。

あいつと次会う時はあいつをたたつ斬るときだ。」

「……ああ……。…それならいいんだ。」

桂は少し間を空けた後、呟くように言った。

「……。」

桂は万事屋を出て、隠れ家への家路についたところだった。

（銀時：今回ばかりはお前の力を以てしても…）

不吉な暗雲が、立ちこめていた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第一訓 人の話はちゃんと聞こう（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました。

また次話でお会いしましょう！

第二訓 漫画は伏線があるからこそ面白い

江戸では雨が降りそうな黒い雲が出ているというのに、京は結構な快晴であつた。

そんな京の茶屋の座敷に、男女2人が並んで座っている。

…しかし、どう見ても恋人同士には見えない。

「…その後首尾は？」

「…うむ…上々…といったところでござるな。」

「了解…晋助様に伝えておくツス。」

いつもとは違い、その男、万斎は地味な着物と羽織りに身を包み、隣に座るまた子もまたいつもの派手な桃色ではなく、淡い桃色の普遍的な着物に身を包んでいた。

2人は笠を深く被っており、顔は余り見えない。

「…それにしても…良くやるツスね…。こんなつまらない仕事を…」
また子はお茶を少し啜った。

「拙者には交渉が一番向いている仕事だと自負しているでござる。」
万斎は少しだけ笑う。

「…それにしても…今回はかりはよくわからないツスよ。」

「？」

「…晋助様が何を考えてるのか…」

…確かに同志が多いに越したことはないツス。

しかし…ここまでに同志を集める必要が本当にあるツスカ？

…次は…確か大坂まで行くらしいし…。」

また子は納得のいかない様子だ。

「…まだまだ…足りないでござるよ。」

『計画』を実行し、成功させるには膨大な人員が必要…。」

「…何でツスカ…。…何で、『計画』について詳しい事は晋助様と
アンタしか知っちゃいけないんスカ？」

「…やがてまた子殿も知ることになるう。
それだけ大きすぎる計画なんでござるよ。」

「…………。」

また子は目を伏せ、またお茶をズズツと啜る。

「…しかし、やはり同志を集めるとなると邪魔になるのは桂でござる。」

「…桂？」

「あの求心力は厄介なものでな。
狂乱の貴公子・桂小太郎に心酔しているものも少なくない。」
万斎は小さめにため息を吐いた。

「なるほど…。…さすが晋助様と昔一緒に戦っていただけあるッス。」

「いや。…桂と晋助との関わりはそんなに小さいものではない」

「え…」

「いや、桂だけではない。坂田銀時…あの男も晋助と深い繋がりが
あるでござる。」

万斉は笠を更に深く被る。

「どういつ…意味ッスか？」

「また子殿は攘夷戦争を共に戦っていたところまでしか知らないの
でござるな？」

「そ、それ以上…何かあるんスか…？」

「ああ……晋助と桂と白夜叉は…小さいころからの幼なじみでござ
る。」

「え…!？」

「それは仲が良かったそうなの。」

「…幼なじみ…」
途端、また子の表情が一気に曇る。

「攘夷戦争が終わった際に3人とも離れ離れになり、そのままただ時が経ち、今のような状態になったらしい。」

「幼なじみ同士で…いがみ合ってるんすか…」

（…また子殿の境遇を考えれば……まあ正しい反応ではあるか…）

「この計画に私情は禁物。

……では、拙者はこれにて。」

「……………」

（拙者もなかなか性格が悪くなってしまったものでござるな…。）

（私は…何も知らなかったッスか…）

「^{ほなみ}保波……」

また子は一気にお茶を飲み干し、店を出た。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第二訓 漫画は伏線があるからこそ面白い（後書き）

最後の「保波」というのは、人名です。

ちなみに前の小説と名前を変更しました。

また子ちゃんとその保波という人物にどのような関係があるのかは
いずれまた分かってきます（＾ｍ＾）

では、最後までお読み頂きありがとうございました！

第三訓 自分の勘は侮らない方がいい

「土方さーん、無駄ですって。

んな血眼になって探しても更に瞳孔開くだけですぜい」

「開くかバカ！」

真選組屯所、資料保管室。

保管室、といっても、書類は棚に入りきらず山積みになっている。

その中で沖田は行儀悪く足を机に投げ出して椅子に座っていた。

一方土方は何やら大量の書類が整理された本棚を調べているらしい。

2人は先程屯所に帰ってきたところだった。

ガチャ…

「！……あ、近藤さん」

扉が開き、入って来たのは真選組局長・近藤勲だった。

「おう、トシ、総悟。」

…トシはまだ昔の記録をあさってんのか？」

「…可能性がある限りは探す」

「んなの他の隊士にやらせればいいもんをお前は…」
近藤はまったくなあ、と小さく呟く。

「大の仲良しの旦那の事ですからねィ。必死なんでさア。」

「誰が仲良しだこの馬鹿！仲良しはてめーだろーが！！」

俺は他の隊士に任せて見落としがあつたらいいからねえから自分でやつてんだよ！」

土方は怒鳴りながらも手は止めない。

「…もう少し人を信頼しやしょうぜ、あともう少し素直になるべきでさア。」

沖田は、はあゝと大袈裟にため息を吐き、椅子をくるっと一回転させた。

「お前は一生黙っとけ」

沖田の馬鹿にしたような態度に、反論する気も失せたらしい。

「あ、そうだ、近藤さん、外で山崎を見なかったか？」

「?…見なかったぞ。」

「チツ、あいつ何のんびりしてやがる…。呼び出してからもう10分は経ってるじゃねーか…」

土方はいつも以上に機嫌が悪いらしい。

「…あ、山崎なら外でミントンやってましたぜ。」
パツと思い出したように沖田が言った。

「だあああああつ!!」

いつつもいつつもアイツは何遊んでんだボケええ!!!!!!
総悟お!!!今すぐ奴を連れて来い!!!」

…もう何か爆発しちゃったらしい。

「はあ?…自分で行けよ土方ってか死ね土方」

「黙れ行つてこい100円くらいならやらんでもないってか死ね沖田」

「死ね土方」

「死ね沖田」

こんな調子で喧嘩をしながらも、何だかんだ言って沖田は出て行った。

「ふー…。やっと3分の2って所か。」

「悪いな、俺は資料だけ取り寄せて後はお前任せにして…」

近藤は土方が調べた後であろう書類の紙を何となく読み始めた。

「別にいいよ、あんたは高杉の件で忙しいからな。」

…桂と万事屋の件は俺の仕事だ。」

「それにしても、まさかあの万事屋が桂と何か関係があるとはなあ…。」

「ああ。少なからず関係はある。」

…俺と総悟は結構見てんだよ。桂を見つけた時、近くによく万事屋がいるのをな。」

「しかし、だからと言って万事屋が攘夷志士だとは決め付けられんだろう？桂とも何かで知り合ったただの友人とかかもしれないじゃないか。」

近藤も沖田と同じく、あまり銀時を攘夷と関係付けたくないらしい。

「それはどうだかな…。」

近藤さん、少し前に起こったあの高杉の事件、覚えてるか？」

近藤には、心なしか土方の目が光っているように見えた。

「あ…ああ…。あの紅桜の事件か？」

「そうだ。その時あの鬼兵隊の船に万事屋のあの3人が乗っていた事は情報からして間違いねえ。そしてその万事屋と一緒にいたのが桂だったんだよ。」

「……。それは間違いのない情報なのか？」

「ああ。まず間違いねえ。山崎を中心としたウチの監察からの情報だ。」

「そうか…。」

「それに…万事屋がもし攘夷に関係あるのなら、かなりの確率で後期攘夷戦争に参加してるはずだ。

だから俺はあんたに攘夷戦争に参加したと確認されている志士の名簿の中でも幹部のものを頼んだ。

万事屋の剣の腕なら少なからず幹部ではあるはずだからな。」

「…しかし…まだ万事屋の名前は見つけてないんだろ？」

「…いや、万事屋の名前自体は無かったが…万事屋らしき人物の名はもう既に見つけた。」

「万事屋…らしき？」

「ああ…。」

土方はニヤリと笑う。

「どういう意味だよトシ…」

「まあ詳しい話は山崎が来てからだ。
とにかく…万事屋が桂に関係がある…仮に友人だとしたら、それは
万事屋が攘夷軍の幹部だったという可能性がグンと上がってくる。
それは事実だ。」

「まあな…。桂も高杉も相当な剣豪だと聞く。
納得はできるが…」

ガチャ…

「！」

「山崎連れて来ましたぜーイ」

「…ぼほっしわけっありませ…ん…」

扉から入って来たのは先ほど出て行った沖田と、なんか…山崎？…
ぼいものだった。

「ぼいものってなんだよぼいものって！！山崎だよ！正真正銘山崎
退です！」

「てめー…なにしてやがったんだ？あ？

呼び出してから15分以上経ってんだよコラ山崎」

土方の背後から黒いオーラが出ているように見えるのは気のせいだろうか。

「すみませんすみませんすみません！！」

もう十分殴られたんです！ボッコボコなんですう！」

山崎は半泣きになっている。

「土方さん、すいやせんでした。

…ミントンじゃなくてカバディだったんでさあ。」

「んなのどうでもいいわボケええええ！！」

「まあまあいいじゃないか。とにかくザキが来たんだから…」

「チツ… まあいい山崎そこ座れ。」

「…はい…」

山崎はもう尋問を受けるような気分だった。

「…お前も大体分かってると思うが…、任務だ。」

「はあ…。旦那の事…ですか…。」

山崎は少し俯き加減に土方を見つめている。

「もう話は見えてるな？」

「ええ…。…旦那が攘夷や桂、高杉に関係あるか調べればいいんですよ。」

「ああ…頼んだぞ。できるだけ早めにな。」

「…早めにはですか…。まあ極力頑張りますけど…。」

山崎は少し難しい顔をしている。

「…なんだ？」

「紅桜の時にも俺は調査しましたけど…旦那、自分の昔の事は全く他人に喋らないみたいです。神楽ちゃんや新八くんですえ分らないって言っていましたね。」

「つまり…旦那の昔からの友人しか旦那の過去は知らないってことかイ？」

「そういう事です。」

「それは…いくら山崎でも難しいんじゃないのか？…トシ。
3人は一斉に土方の方を見る。

「…いや…それがそうでもねえ。」

「「「？」」」

「これを…見てくれ。」

そう言つて土方が持ち出してきたのは、深緑の色をした本。

「なんですかイ？…こりゃ」

「攘夷志士・行方不明者名簿…？」

これは…中間管理職以上の名簿ですね。」

山崎は一番最初のページを捲り、確認した。

「…ああ。その次の次のページを捲ってみろ。」

「はい」

山崎は言われるままページを捲った。

「このページが何か？」

「そこの右から3番目だ。」

3人はページを覗き込む。

「白夜叉…？」

3人共、どこかで聞いたことのある響きだと思った。

「お前らも聞いたことくらいあるだろ。」

「まあ…何となくなら」

「…そいっただけ年齢も出身地も何もかも書かれてねえ。ただ書いてあるのは『白夜叉』という二つ名のみ。」

土方は『白夜叉』と書かれている所を指差した。

「…確かに、変だな…。」

「…俺はこの白夜叉が万事屋だと踏んでる。」
土方の目が急にギラギラしてくる。

「？」

「どういう意味ですか？」

「お前ら、『武神四侍』ってのは聞いたことあるか？」

「ぶしんしじ…？」

「知らねえな」

これは3人共知らなかったらしい。

「白夜又つてのを調べた時に出て来たんだよ。

何でも後期攘夷戦争における伝説の4人らしい。」

土方は机の上にできた書類の山から一枚紙を抜いた。

「伝説…ですかイ。そりやまた大層なこつて…」

沖田は態度こそ悪かったが、話は真剣に聞いているようだ。

「強すぎる4人。…そう言われていたそうだ。

そこで…こつからが問題なんだが、その4人の中の2人は…桂小太郎と高杉晋助なんだよ。」

「！！…か、桂と…高杉…？」
3人とも目を見開いている。

「ああ。そしてもう一人が坂本辰馬って男だ。」

「坂本辰馬…？」

「貿易企業・快援隊の社長だ。」

「！！…快援隊…。」

これにもかなり驚いたらしい。

「あ……ちょっと待って下さい！
まさか最後のあと一人って…」
山崎がいきなり大きな声を上げる。

「ああ、そうだ。
…最後の一人が、その白夜叉。」

「!!」

「白夜又は死んだとも言われているが、そんなのは言い伝えに過ぎねえ。

生きてる可能性だって十分にあるんだ。

…些か出来すぎた話だと思わねえか？」

「…土方さんと俺は旦那と桂が一緒にいる所をよく目撃している…
そして、あの旦那の剣の腕を考えりゃ攘夷軍の幹部になるくらいワケねえだろうし…。」

「あの高杉の紅桜の事件、旦那の過去を知ってる人がほとんどいない…。」

「全部結べば白夜又という男に行き着く。

…そういうことか。」

「その通りだ。」

「なあ……しかし……」
近藤がに声を上げた。

「なんだ？」

「白夜叉が万事屋つてのはまあ間違いなさそうだが、それはトシの推測と言ってしまえば終わりじゃないか？」

「確かに、これは俺の推測でしかねえ。それにまだわからねえ事もたくさんあるし、具体的な事はまだ何も分かつちやいねえよ。……そこで、お前が出て来る訳だ。」
土方は山崎の方を見た。

「なるほど……俺が詳しく調べりゃいいんですね。」
山崎は少し笑った。

「これだけ情報があれば大丈夫だろう。お前は白夜叉〓万事屋つてのを決定付けてくれたらそれでいい。まあ余裕がありゃ白夜叉と桂、高杉、坂本の関係性まで調べといってくれ。」

「了解。」

「あ、ちょっと待って下せエ土方さん。」

「なんだ？」

「もし旦那が白夜叉だって判明したら旦那はどうなるんでイ？」

「……………」

少しの間。そして、

「しよつぴくのは間違いねえ。

現に奴は桂を困りやがった。

…もちろん必要があれば斬るさ。

桂や高杉の情報をつぶり聞き出してからな。」

…これが土方が『鬼の副長』と云われる所以だ。

「そうですかイ」

「……………」

「山崎、お前は今日からでも調査を開始しろ。もう出ていいぞ。」

「了解です。まあ出来るだけ急いではみまずでは。」

山崎は出て行った。

（俺達に出来るのか……？万事屋を斬るなんざ……）
近藤としては、信じたくなかった。

(…………。)

それからまた土方は資料を調べ始め、近藤と沖田も部屋から出て行った。

今回の一混乱は…でかすぎる気がしてならねえ…

…この胸のざわつきは気のせいだと信じるしかなかった。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第三訓 自分の勘は侮らない方がいい（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました！

第四訓 大事な話を聞きたい時は何気ない会話から入ろう（前書き）

この連載小説は一個一個の話が独立してるように見えますが、実は全部繋がってます。

気長に繋がっていくのをお待ちいただければ幸いです。

今回は短いです。

前の小説には無かったお話ですね。

銀さんと沖田くんのグダグダな会話（笑）。

第四訓 大事な話を聞きたい時は何気ない会話から入ろう

あの真選組の2人が桂を探しに万事屋に来た事件から数日。

あの日から天気も回復することなく、雲は未だに黒く、暗いままだ。

（あーあ…疲れた…。やたらと遠いしツラと辰馬にははち合わせるし…）

銀時は歌舞伎町の東にある川の側のベンチに腰掛けていた。
彼は午前中出掛けており、今はちょうど休憩中なのだ。

ドッゴーン！……！！

「！？…え」

いきなりの爆音。

（なにコレ）

ドゴンッ！…ドゴンッ！…！…！

更に爆音は続く。

（え！？え！…！？マジ何これ、何！？）

「かあつらアアア！…！！」

（！）

「ぐおおおおっー!!」

激しい足音がこちらに近づいてくる。

「ウソでしょ…」

向こうから猛スピードで走って来たのは桂だった。

「あ！銀時！お前まだ家に帰ってないのか！…きっと新八君とリーダーがしんぱい…」

桂は全て言い終わる前に銀時の前を通り過ぎてしまった。

「…何？」

「待ちやがれ桂ア……あ……」

「……………」

「……………」

「…………あれ？…追っかけていないの？」

「旦那の顔見たらやる気が萎えちいました」

「俺は沖田くんの顔見てS度が上がったよ、レベルアップだ
コノヤロー」

桂を追いかけていたであろう沖田だ。

「そりゃ光栄でさア。

つてかもっ追っかけんのしんどいいいや。サボっちゃえ。」

沖田は棒読みでそう言っつて、銀時の隣に座った。

「残念ながら可愛くないからね、子どもしさのカケラも無いからね」

もう何かグッダグダである。

「旦那、珍しいですねイ、こんな時間に一人で何やってんですかい？」

沖田は何の躊躇いもなく話をそらした。

「まあちよつとね。」

「どっかに出かけてたんで？」

「ん。まあそんなトコだね。ちよつと遠かったから一休みしてるんだよここで。」

銀時はふう、とため息を吐く。

「旦那一人で出かけたアこれまた珍しいや。どこに行ってたんでイ？」

何故か今日の沖田は執拗に色々聞いてくる。

「何だよ沖田君今日はやけにがつつくね」

銀時の頭の上にはクエスチョンマークが浮かんでいる。

「いや、何か旦那って行動パターンがよく読めねえ人だなアと思いますて。」

「はあ？」

「まあ要するに旦那ってよく考えると不思議な人だと思ったんですア。」

「……桂とも友達みたいですしねイ。」

「いや……お、お友達っていうかぁ……」
銀時の額には心なしか汗が浮かんでいる。

「別にしょっぱいこうなんて思ってたねえんでご安心下せイ」
ニヤリと何とも気に障る笑みだった。

「……。」

（もつやだよこのサド……）

完全に分かって言っているところがまた彼のドS度を表している。

「……で、どこに行かれてたんです？」

「師匠んトコだよ」

「師匠？……旦那にそんなのがいたんですかい？意外でさア。」

「まあね」

「俺も師匠なんざ大層なもんはいねエですけど、密かに尊敬してる人はいますぜ。」

沖田は小さく笑う。

「あれだろ？ゴリラだろ？んでまさかのマヨラーだろ？」

銀時は分かってますよと言わんばかりに手をひらひら振った。

「んなのは当たり前でさア。

これは俺が密かに尊敬する人の話ですからねイ。

誰にも話した事はねエんですがね、特別に旦那には教えますぜ。」

（否定しないのね）

「いや別に話さなくてもいい…」

「これかなり昔の話なんですがね…」

（おいおいおい！！！！最後まで人の話聞けやボケエエエエ！！！！！！）

こうして沖田の『昔話』、もとい尊敬する人の話は始まった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第四訓 大事な話を聞きたい時は何気ない会話から入ろう（後書き）

最後までお読み下さりありがとうございました！

次回、沖田の密かに尊敬する人とは？

【改】第五訓 初めて自転車乗れた時のことでもみんな大抵忘れてる（前書き）

総悟の過去話です。

オリキャラ……っていう程大層なものではないですが、それらしきものが登場します。

【改】第五訓 初めて自転車乗れた時のことでもみんな大抵忘れてる

（チツ…死ね土方…死ね土方死ね土方…）

江戸に比べればかなり田舎に分類されるであろう武州。

その中ではまだ栄えている町のちょうど真ん中で、最近10歳になったばかりの沖田総悟が大股かつ早足でズカズカと歩いていた。

（あいつ俺より遅く入ったクセに近藤さんにベタベタ懐きやがって…
大体近藤さんも近藤さんだ…何であんなに騙されやがんでイ！）

…どうやら土方と喧嘩した後らしい。

「あーあ…」

（面白くねエ）

総悟は小さな団子屋の長椅子にドサツと座った。

（お腹減った…けどお金持ってねエや）

総悟は土方がいる道場に戻る事もできず、ただボーっと外を眺めていた。

「……………」

（今日はヤケに人が多いじゃねーかい）

「…ん？…どうした、そのチビ助。」

「あ？」

いきなり後ろから話しかけてきたのは、団子屋の主人だった。

「金も無えのにんなどこ座ってんのか？」
主人は困ったように笑う。

「わりいか」

総悟はふてくされたようにぷいと顔を背けた。

「そこらの店じゃわりいな。だがウチの店は特別だ。ほれ、食いなチビ助。」

ただし、最初の一回限りだけだな。」

主人は二カツと気前の良い笑みを浮かべながらみたらし団子を一本総悟に差し出した。

「……………」

しかし総悟は顔を背けたまま動かない。

…ただ、目線だけは団子の方に向いているのに主人は気が付いた。

「いらねーのか？俺が食っちまうぞ。」

そう言つて主人はゆっくりと団子を自分の口へ向かつて引き寄せた。

「食べる！」

「あつはつはつ！食いな食いな！」

総悟がすごく不機嫌そうに、しかし恥ずかしそうに言ったので、主人も笑い出してしまったらしい。

「フン！」

総悟はお礼どころか顔も合わせずに団子を受け取り、口いっぱいに頬張った。

「チビ助、それ食い終わつたらとつと家に戻んな。」

「？」

総悟は体を直つ直ぐ戻して、主人の顔を見た。

「ほれ、外見渡してみろ。」
主人は外を指差した。

「……………」

総悟は主人に言われるがまま、外を見渡す。

（武士…？）

辺りには陣羽織や戦用の袴を履いた剣士たちが歩いていたり、また草村に座り込んだりしていた。

しかし武士というほど立派なものではなく、ほとんどが一本差しであつたし、羽織も袴もボロボロで、破れていたり血がついているものだつてあつた。

「ありやあな、攘夷志士つちゅう野蛮な連中よ。
チビ助、今攘夷戦争つてのが各地で起こつてんのは知ってるな？」

「ああ。近々武州の方にも来るつて姉上が言つてた」

（気を付けろ…とも言つてたっけねイ）

「今ちようど来やがつたんだよ。ここいらは天人が少なから戦は起こらねえだろうが…」。

奴ら、気性が荒いのが多いらしいからな。気を付けろよ。」
主人は総悟の頭の上にポン、と手を乗せた。

「あんな輩俺が蹴散らしてやらア」

「はっはっはっ！その腰の木刀でか？

口が達者なチビ助だこつてえ。

さあもう団子は食っちまったんだし、サッサと帰りな。」

主人は総悟の言葉を冗談半分に受け取って、彼の背中をポンポンと叩いた。

「フン、俺アヘタな大人よりよっぽど強エぜ。」

総悟は主人の対応が少し気に障ったようで、主人を軽く睨みつけた。

「そつか、そりゃあすげえや。」

チャキ…

「？」

キラ、と、一瞬の光。

「俺達が…誰か分かるな？」

「！」

「何ですかい？ここはただの団子屋だがね。」

いきなり主人に向けて刀を突き出してきた男と、その後ろには3人ほど、合わせて4人の同じような格好をした男が狼のような目でこちらを睨み付けてくる。

「俺達は攘夷志士だ。お国の為に奉仕している身。食料を頂こう。」
彼らは一々刀をちらつかせてくる。

「いえ、しかしね、ここは一般のお客様方に団子をお出しするところなんで……」

「つべこべ言うなああ！！！！俺達はお前ら愚民を守る為に命懸けで戦っているのだぞ！！」
ものすごい剣幕で怒鳴るものだから、道行く人や団子屋の中にいる人々の視線が一点に集まった。

「……悪いがね、あんた達にやる食いもんなんざこれっぽっちもねえよ。」

お国守るつつつてそのお国の民から食料巻き上げるような輩にやる食いもんなんざねえ！！」
主人も遂にキレてしまったらしい。

「なっ!!」

攘夷志士達の血管の切れる音が総悟には聞こえた気がした。

「斬れ! 斬っちまええ!!」

途端に全員が抜刀、そして既に抜刀していた1人が主人に向かって刀を振りかざした。

ドシュッ…!

「ぐあ……あ……」

ドサッ…

静まり返る店内。

「てめエら…今すぐその刀（侍の魂）捨てやがれイ！！
丸腰のオヤジ１人に４人で斬りかかるたあ、相当腕に自信がねエと
みえるぜ…」

総悟の右手には、小さめの木刀が握りしめられていた。

「チ…チビ助…」

主人は目を見開いて総悟を見つめている。

床には総悟に打撃され、気を失った男が無惨に倒れていた。

「なっ…なんだこいつ！っつーか４人で斬りかかってねーよー！！」

「んなの知るかボケ！今度は…」

チャキ

「ひっ…」

「本^{マシ}気で殺してほしいのかイ？」

総悟は、床で伸せている男から刀を奪い取った。

「チビ助やめろー!!」

（眼が…）

目が、子どもの目ではなくなっていた。

「……………」。

ジリ、ジリと、近づいていく。

（何でイ…この…変な気分は…）

ただ怒りに任せて真剣を握りしめ、自分は人を斬ろうと…いや、殺そうとしているのか…。

変な高揚感のようなものが体中を駆け巡る。

「ぐっ！」

遂に総悟は剣を振りかざした。

ビュッ！！

ガキイイイン！！

「……っ！！！」

（な…）

総悟の真剣は止まった…というより止められた。

総悟はハッと自分の剣先を見た。
彼の真剣を止めているのは、やはり、真剣。

一点に集まるその視線。

「そんな太刀筋で…人間が殺せると思ったか小僧？」

「阿呆ですかお前は！お前も十分小僧です。」

「……」

（侍…）

侍。

何故そう思ったのかは分からない。

でも、侍だった。

2人の、若い侍。

「小僧じゃない大人だ。後一年で成人だぞ。俺が小僧ならお前も小僧だ。」

「何を言うんですか、私はもう成人わたくしになっておるんですよ。」

「先日なつたばかりではないか。俺と一つ違うだけだろう。」

「お…おい…」

3人の男の中の1人が、いきなり現れた2人に話しかける。

その2人も4人の男と同じような服装をしていたが、とにかく若い。会話内容からして髪は長く黒い方が19、軽い癖っ毛のクリーム色の方が20らしい。

「お、あまりにも情けなさ過ぎて忘れておりましたな。あなた方のこと。」

癖っ毛の方の男は小さく後ろで束ねた髪を小さく揺らし、笑った。

「なに!!」

「攘夷志士の……いや、侍……でもないな……人間の、いやもう生物の風上にも置けんな貴様ら。」

今すぐその剣を捨て金も謝金として置いていけ。消えろ。」

「黙ってきいてりゃいい気に……ぐあっ!!」

バタッ！バタ、ドサッ！！

全て言い終わる前に3人の男は崩れ去った。

「峰打ちなんで大丈夫です。」

私みたいな弱いのに峰打ち仕掛けられるようでおってはいけません

な。」

「てめえらも…攘夷志士なのかイ？」

「！」

2人の男が振り向いた先には、刀を構え直した総悟がいた。

「……………」。

主人を含め、彼らの取り巻き達はこの場のいきさつを黙って見ているしかなかった。

「てめえらが攘夷志士なら、斬るぜ！」

「待て…俺達は確かに攘夷志士…」

「…！」

瞬間、肉眼では見えないくらいの速さで総悟は髪の高い男に斬りかかる。

ガキイイイン！！！！

「な…！」

（確かに今入ったはず…！）

総悟の刀は、髪の高い男の刀によって受け止められた。

「躊躇なく人を初めて斬ろうとするような人間がこの世にいたのだな。」

…それにしても人の話を最後まで聞かんとは…困った神童だ。」

「あんた…私より強いすな。…神童くん。」
癖っ毛の方は額に汗を滲ませている。

「あたりめえだ。
もちろんそのうざってえ長髪の方より強いぜい」

「いや…それは無理では…」

ガキイン！！ガキツ！！ガキツ！！ガキツ！！…

「！」

目にも留まらぬ速さで撃ち込まれる剣戟。

しかし、総悟の剣はその長髪の男にかすりもしない。

（はい…！！完全に太刀筋が読まれて…）

ドゴッ

「ガハアッ！」

総悟は簡単にふっ飛ばされた。

「だっ大丈夫ですかっ！？

ヅラ！お前子ども相手に大人気ないでしょうが！

というかいつも自分の強さを自覚しろと言っておるでしょう！」

「ヅラじゃない桂だ！

峰で軽く打っただけだ。

これくらいでくたばるほどお前も柔じゃなからう、小僧。」

長髪の男はそう言って刀を鞘にしまった。

「ぐ…」

総悟は悔しそうに長髪の男を睨む。

「お前は確かに強い。」

「いや…その歳でその強さは異常だと言ってもいい。」

「……。」

総悟もそれは自負していた。
道場でも3番目に強かった。

「だがな…だからといって人の命を軽く見るな。
見たところ…お前には『才』がある。」

ただの剣術の才ではないぞ。

お前の目を見ればわかる。

その才をどう生かすかはお前次第。

そしてそれを殺すかどうかもお前次第。

「

「…才って…なんでイ…」

「…自らの心を自由に殺せる才、だな。」

「心…?」

「後は自分で考えろ。
とにかく、お前に真剣^{これ}はまだ早すぎる。」

長髪の男は総悟に近づき、総悟の持っていた剣を返すように促し、
総悟もそれに従った。

「……………」

「さてと、玄雅、お前も手伝え。」
「ん？」

長髪の男は床に伸せている男4人の懐を探り出した。
癖っ毛の男もあなるほど、というようにそれに習って探り出す。

二人は男達の懐から財布らしきものを取り出し、はい、と団子屋の
主人に手渡した。

「い、いいよ兄ちゃん達…こんな…」

「いや、こいつらは俺達と同じ攘夷志士。こいつらの代わりに謝罪
する。」

偉く迷惑を掛けてしまって、本当に申し訳なかった。」
二人は礼儀正しくお辞儀した。

「まあまあ…しっかりした兄ちゃんだこつてえ」

「ツラァー、くさかどこにおるんじゃあ！もう飯の時間じゃぞ」

「お、もう行かねばなりませんな。」

「ああ。…では失礼する。」

そう言つて2人は外に出て行く。

「あ、そうだ、小僧。」

長髪の男が不意に立ち止まった。

「……………」

「また、会えるといいな。」

「…まあ俺が生きていればの話だが。」

「…」

にっこりとその男は笑った。

「生きとけよ。次はそのうぎつてえ髪ごと斬つてやる！」

総悟が威勢良く叫ぶと、男はきよとした後、再び笑った。

そして2人は角を曲がり、遂に見えなくなった。

「おい辰馬アアア！！ヅラじゃない桂だと言っているだろうがアアア！！！！！！」

「辰馬アア！！くさか、じゃないです！！くさか、だと何度言えはわかるのですか！！発音も違うんですよ！！！！何か臭いみたいではないですか！！」

ギャーギャー騒いでいる声もやがては消えて、静かになった。

（何でイありや…）

総悟は何か納得いかなかったが、やっぱりもう道場に戻ろうと思った。

(それで、稽古でもするか)

(何でかねエ)

あの時の、あの男の言葉と笑顔だけは忘れられない。

(けど今ならぜってー奴には負けねえぜイ)

(旦那話の途中で寝てたが、ありゃあ最後まで聞いてたな、うん。)

総悟は腰に差した剣をチャカチャカいわせながら、屯所に戻った。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

【改】第五訓 初めて自転車乗れた時のことでもみんな大抵忘れてる（後書き）

最後までお読みくださりありがとうございます。

オリキャラの元ネタはみなさんもうわかりですよね

次回、山崎捜査網。（笑）

天才監察方・山崎退が色々調べて、舞い戻ってきます。

【改】第六訓 転校生ってなんか響きが良いけど、実際そんな良いもんじゃない

山崎が真選組に舞い戻ってきます。

私の書くザキと近藤さんはなんか原作と別人だ…

ごめんなさい、これが私の精一杯です…

っていうか攘夷中心小説なのにあんまりJOY4の皆さんってか高杉&坂本書いてない！（今更）

でももうすぐしたら書き放題になるので、彼らが出ずっぱりになるまで頑張って連載します（笑）（^m^）

すみません、長くなりました…

それではどうぞ！

【改】第六訓 転校生ってなんか響きが良いいけど、実際そんな良いもんじゃない

「『白く気高き夜叉』 白夜叉。

『狂い舞う華』 狂乱の貴公子・桂小太郎。

『黒き獣』 修羅・高杉晋助。

『伯仲の二神』 龍虎・坂本辰馬。

…これが、彼ら、武神四侍の謳い文句です。」

「…で？」

（…で？…って言われましてもね…）

「お前、中間報告でもしに来たのか？」

「まあそれはついでです。

…一番は調べて欲しい事があつたんですよ。
電話でも良かったんですが、結構報告も要件も長いんで…。」

山崎は先ほど、細心の注意を払い屯所まで戻って来たところだった。

（良いなあ、副長室は広くて…。）

その広い副長室には土方と、沖田もいる。

「つかなんで土方がいんの？お前いらなくねー？もうなんか俺いるだけで良くねー？」

沖田は半目を開き、あぐらをかいて座っている。

「てめえが副長室にいる事がまずおかしいんだよ！出てけ！」

「こんなに仕事を楽しいのは始めてでさア。

…何しろ旦那が白夜叉？
めっちゃめっちゃおもしろーや」

表情が一転、真剣な面持ちで、声色まで変わる。

「まあ要するに、沖田なりの、山崎の話を聞きたいという思いの表現なのだろう。」

「チツ、もういい、山崎、とりあえず分かったことを教える。」

土方も別に沖田がいて困る事はない。

とにかく本題に入らせた。

（全くしょうがない人達だよな…）

山崎は少し間を置いて、話し始めた。

「…へい。まず白夜叉って男の話ですが、若い攘夷志士の中では完全に伝説化されてます。

死んだと思っている奴がほとんどでした。中には宗教みたいに崇拜してる奴までいましたよ。」

山崎は手元のメモをちらちら見ながら、まるでアナウンサーみたいにスラスラ喋る。

「しかし、攘夷戦争に参加した事があり、攘夷軍でも結構上の役職にいた年配者は白夜叉の生死はわからないって言った人がほとんどでしたから、生存してる可能性は十分にあると思います。」

「ほう…。」

「で、その白夜又って二つ名の事なんですが、どうやら攘夷戦争時、その白夜又は本名を名乗らなかったらしいです。」

「本名を…名乗らなかった？」

「ええ。彼が活躍するようになって『白夜叉』と呼ばれるようになってからは、本名を捨て、自らも『白夜叉』と名乗ったそうですよ。」

「捨てた…ねイ」

「それが何故かはわからねえのか」

「そこまでは流石に無理でしたが…、本名を知っているであろう人はわかりました。」

山崎は似合わない不敵さで笑う。

「……。」

「本当か」

土方は少し驚く素振りを見せた。
一方の沖田は無表情を崩さない。

「まずは他の武神四侍である、桂小太郎、高杉晋助、坂本辰馬の三名。

そして、後の二人は、久坂玄雅^{げんが}、入江八二^{はちじ}。」

「久坂……入江……？」
土方は目を細めた。

武神四侍の他の3人が白夜叉の本名を知っているというのも意外だったが、更に意外だったのは、久坂玄雅、入江八二という新たな2人の男の存在。

「そうです。…その2人が問題なんですよ。」

「何故この二名が白夜叉の本名を知っていると思った？」

「…ええ。実はその2人、桂と高杉と同じ私塾に行っていたらしいんですよ。」

「私塾……？」

「個人で経営してる、いわば学習塾みたいなもんだろイ？」

「ええ。でもそこは私塾っていうより寺子屋に近かったみたいで、主に子どもがそこで学習してたみたいですよ。」

「っつーか…桂と高杉と…ってことは…」

「白夜叉と桂と高杉は幼少の頃からの幼なじみだそうです。」

「！」「」

ここで始めて、沖田が驚く素振りを見せた。

「それは初耳だな…」

「ええ。つまり、その久坂と入江という男は白夜叉や桂や高杉の幼なじみだということです。」
山崎は目を光らせる。

「で、調べて欲しいことってのがそれか…。」

「ええ。久坂と入江という男が現在生存している可能性があるのか。…お願いします。」

「いいだろう。すぐに調べさせる。」

恐らく小一時間くらいはかかるが…どうする?」
もちろん捜査に出るか、結果を待つか、だ。

「待ちます。その内に話しておきたいこともあるんで。」

「そうか…。わかった。」

ちよつと待ってる。今から空いてる6番隊に行ってくる」

そう言つて土方は出て行つた。

(また長い話しなきゃならないな…。)

山崎は監察の大変さを噛み締めながら、副長が出て行つて少し緩ん

だ体を引き締めた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

【改】第六訓 転校生ってなんか響きが良いけど、実際そんな良いもんじゃない

最後までお読み頂き、ありがとうございました！

あと一話、真選組4人にお付き合います（^-^）

真選組のお話が終われば、もうそろそろ坂本さんが出てきます（笑）

第七訓 周りの人間関係はよく分かつとけ（前書き）

さて、前回に続き、真選組4人です。

因みに前回名前だけですが初めて登場した入江八二という人物は、元ネタ入江九二さんです。

久坂玄瑞さんと同じように、松下村塾で吉田松陰に教えをこいていた人。

そのまんま使わせていただきました（笑）

あと今回の小説に出て来る攘夷4人の年齢は私の捏造ですので、ご注意ください……

ではお楽しみ下さい！

第七訓 周りの人間関係はよく分かつた

土方が副長室を出たその後、沖田と山崎はそれとなくくつろいでいた。

「ふー…。ニコ中が出てってくれて空気がキレイになったぜい」
沖田は大袈裟にため息を吐く。

「あはははは…」

（ヒドい言いようだな…）

「あ、そうだ山崎、俺そのくさか玄雅って知ってるぜい多分」

「え…ええええ！！？ど、どういことですか！…！あと、くさかじゃなくて久坂です！」

「なんか聞いたことあんだよなア…。
なんだったつけ」

「って覚えてないんですかアンタ！」

「でも絶対知ってるのは確かなんでイ」

「でも沖田さんとその久坂って男にとっても接点があるとは思えませんがねえ…」

「お前ら何ギヤアギヤア騒いでやがる。うるせーぞ。」
「よう、総悟、ザキ。」

「「！」「」

襖が開き、入って来たのは土方と近藤だった。

「え…エラく早かったですね…。っていつか局長までどうしたんですか」

「俺が早かったのはこっから出たらすぐそこに6番隊の隊士がいたからだ。」

近藤さんはいいでに連れてきた。」
土方はいつ吸い始めたのか、まだ長めのタバコをくわえながら言った。

「俺もお前の話、一応聞いた方が良さそうと思ってな。
お前の報告の内容も軽くトシから聞いたぞ。」
近藤は微笑した。

「そうですか。」

「じゃ、本題に入るか。」
土方と近藤が座布団の上に座った。

「はい。」
で、その話してきた事って言うのが、桂や高杉、坂本の3人の事についてです。」

「武神四侍の他の3人か…。
何か分かったのか？」

「ええまあある程度は、ですけど。
この3人と白夜叉は至極仲が良かったそうです。いつも一緒にいたらしく、周りは結構避けたりしていたみたいですよ。」

「避ける？…どういう意味だ？」

「まあ単純に仲が良すぎるっていうのもありますけど、強すぎたんですよ…まず全員が…。そして、特に白夜叉はその風貌から、味方からも夜叉そのもののように恐れられていたそうです。」

「味方から…ねイ」

「もしかしたら…それが理由じゃねえのか？」
近藤が手で顎をさすりながら言った。

「…？」「…」

「ザキ、お前言ってよな、白夜叉は名を捨てていたと。」

「ええ。」

「奴は周りから避けられ恐れられたんだろ。」

だから武神四侍の他の3人以外には白夜叉と名乗って心を閉ざしていたんじゃないか？

…というか、閉ざすしかなかったんじゃないか？

まあこの理由だけかはわからんが…。」

「寂しい男でさア」

何故かここで、沖田の頭の中には銀時が浮かんだ。

「まあ奴にはその桂や高杉、坂本がいたんだ。ただその3人に理解されていれば良かったんじゃないか」
土方はタバコの煙を吐き出した。

「で、恐れられる原因の1つにもなったその風貌のことなんですが、もう全身が真っ白だったそうですよ。
まるで、死に装束のようだったらいいです。」

「死に装束…ねイ」

「まあその話に万事屋の風貌を当てはめたら確かに異様な感じはするな…」

土方はフツと笑った。

「確かに、あの白銀の頭に赤い目だ…。奴が死に装束みたいな真っ白い服装してたら白夜叉と呼びたくなるのも頷ける。」
近藤はなるほど、と小さく呟く。

「白夜叉の情報はこれ位ですね。」

あと桂と高杉についてですが、最近怪しいのは高杉です。」

「高杉の件はこつちでも調べてるぞ。」

「どうやら今は京にいるらしいな。」

近藤は高杉の事を担当しているため、高杉の事に関しては結構詳しくかった。

「しかし…動きがなさすぎて逆に怪しいんだよねあ…」

「ええ。桂一派の中でも専らの噂でしたよ。」

高杉の様子がおかしい…」と。

ただ、すごい情報入手したんですが、何やら高杉は人を集めているみたいです。」

「人集め…?」

「しかし鬼兵隊と春雨を合わせればかなりの数がいるはずじゃあ…」

「

「はい、それがよくわからないんですよ…」。

でも人集めをしている訳ですから、またどこかに移動する可能性も高いと思います。」

「なるほど…」

近藤は静かにため息を吐いた。

「それに…高杉はどうも桂が邪魔みたいです。」

「？」

「あの桂の求心力と、攘夷党の規模のでかさには高杉も手を妬いてみたいですよ。」

高杉は人集めをしてる訳ですから。」

「ほう。」

幼なじみ同士で対立してるってか…」
土方はまたタバコの煙を吐いた。

「さあ後は坂本辰馬っていう人物なんですが…貿易企業の社長ってのは知ってますよね。」

「ああ。だが…それだけではどうも異質だな…」

「ええ。社長、ですからね…。」

確かに、武神四侍と貿易企業の社長、ではどうにも結びつけられない。

「大物だつてのは分かるが…。」

近藤ももやもやした感じが離れないらしかった。

「つてか桂も高杉も26、7だろイ？」

坂本つてのはそんな若さで貿易企業の社長なんてやってんのかイ？」

「坂本は28歳です。会社を立ち上げたのは21の時だったそうですよ。」

「ほー。お偉い実業家だこつてエ」

沖田はそこまで興味もなさそうに答えた。

「あ、あと歳まで言つとくと桂は27、高杉26です。」

（旦那27だから歳までぴつたりなんだよな…）

「トシとおんなじ年頃か」

近藤が変なところに親近感を覚えたのか、土方を見て少し笑った。

「フン…」

「…んでまあその坂本なんですが、攘夷戦争を戦い抜いてないんですよ。」

「何…？」

「戦い抜いてないって言っても、攘夷戦争が終わる結構ギリギリまで戦ってたみたいですがね…。」

途中で坂本だけ戦争をやめて、それからすぐに貿易企業を立ち上げています。

その企業である快援隊もかなり調べたんですが、全く攘夷とは関係ない企業でした。」

「桂や高杉とはエライ違いだな。」

今の坂本に攘夷の思想はねえってことか…。

それとも表立ってはそういうことになっているか、だな。」

「…坂本に関してはそういう可能性は低いと思いますよ。少しでも裏で何かやってると結構アラが出るもんですし。」

「まあな。」

「まあ武神四侍に関してはそんなところですかね。」

…まだ、久坂と入江のことは調べられてないですか…？」
土方に向かって、恐る恐る聞いた。

「ああ…。まだ少しかかるかもしれねえな。
どうする？それくらいの結果報告なら電話でもできるが」

「じゃ、電話でお願いします。

僕はもう行きます。あんまり長居も良くないんで。」

「そうか、わかった。

人が少なくなつたの見計らつてすぐに行け。

近藤さん、総悟、俺達は解散して各自の仕事につく。
誰か何か言うことは？」

「……………」。

「ねえな。

じゃあ解散だ。」

「ふー、やっとこのタバコ臭エ部屋から解放されるぜい」

「てめえは一生くんなボケ」

各々仕事に戻って行き、山崎は再び外へ出掛けていった。

（最近ホント天気悪いよな…）

ポツリポツリと降り出した雨に、足を早めた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第七訓 周りの人間関係はよく分かつとけ（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございました！

次回は万事屋に戻ります。

待望の坂本さんはその次くらいに登場する予定です（笑）

第八訓 見ざる言わざる聞かざる、これ基本（前書き）

この異様な更新率の高さは、私が新型インフルエンザにかかったのですごく暇だからです（笑）

今回はフラッシュバックしてしまった桂さん。

それではどうぞお楽しみ下さい！

第八訓 見ざる言わざる聞かざる、これ基本

真選組でまさか銀時の事が問題になっているとはいざ知らず、万事屋銀ちゃんでは新八と神楽が何やらワイワイ騒いでいた。

「ネー新八いー！暇ヨウ！暇アルよう！！」

神楽はソファに仰け反りかえり、腕と足を大きく開いている。

「もー…、神楽ちゃん、女の子がそんな格好しちゃダメだろ？」
まるでどこかのお母さんみたいに新八が注意した。

「何で銀ちゃん帰って来ないネ！
…あれか！朝帰りの不良息子アルか！
お母さんそんなの許しません！」

銀時が今朝買い物に行ってから、昼になっても帰って来ないのだ。

「…お母さん？何でお母さん？
しかも朝帰りじゃないだろ普通に今朝買い物に出て行って昼になっても帰って来ないだけ…って普通ではないか」
何か色々ツツ込み、それからうーん、と考えてみる。

「買い物に行ってもう3時間は経ってるアル！小一時間どころじゃないネ。」

「確におかしいよね…」

「もうあんな不良息子ほっとくヨ。
新八、定春あそば。」

「銀さんの心配してるんじゃないの？ただ単に遊び相手の心配してたの？」

「あ、やっぱりいいや。私棚の奥に酢昆布隠してあったの忘れてたネ！そっちのがいいアル」

酢昆布がへソクリ状態の神楽である。

「え…何、僕と定春酢昆布以下なの？ねえそうなの！？」

定春はクウーンと鳴いて、顔を掻いている。

「ほいじゃ取ってくるネー！」

神楽は素知らぬ顔でスキップしながら棚の方へ消えていった。

「全くしょうがないなあ、銀さんも神楽ちゃんも…」

新八はハア、と溜め息を吐き、机に散乱したジャンプを纏めて床に置いた。

「換気でもするか」

新八は窓を順々に開けていく。

「しんぱちいー！！…ちょっと来るネ！」

すると、奥の方から神楽の声がした。

新八はゆっくりと神楽のいる棚の方へ歩く。

「どうしたの？ 酢昆布取れた？」

新八が神楽の元へ行くと、神楽が半泣きになりながらピョンピョンとジャンプしていた。

「…新八い…酢昆布があつ…」

「ああ…」

（背が届かないのか）

「うつ…うつ…絶対新八よりデカくなってやるネ…牛乳めっちゃ飲

んでやるアル。」

新八はまたしょうがないなあ、と呟いて、棚の最上段を見上げる。

「い……いやちよつと待てよ……」

そういえば神楽ちゃん……どうやってこんな高いところに酢昆布隠したの？」

「投げたアル。」

「もう！後の事考えなよ！
まったく……」

「もうつべこべ言わずに早く取るネ」

「はいはい」

新八はよっ、と背伸びをし、手を伸ばした。

「……う……奥まで……届かないんだけど……」
予想外に棚の奥は深かったらしい。

「何い！？マジでか……」

神楽はカクンと首を垂れて、うなだれている。

「…い…いや！届くかも！指先に何か当たった！ただ隣の大きい箱が邪魔だな…。」

もう一緒に出しちゃおうか。

神楽ちゃん手伝って。」

「おうネ！」

神楽はさつきとは一転、新八が出してきた大きな木箱を出した。

「…お、…取れた！取れたよほら」

「おう！私の酢昆布ネ！ありがとな新八！」
神楽はピョンピョン跳ねて喜んでいる。

「…よし、この箱直そうか。」

「…ん…？…なあ新八い、何か変な臭いしないアルか？」
突然神楽は顔をしかめた。

「変な臭い…？」

「…んー…ああ…確かにするかも…」

「……これ、じゃないアルか？」

神楽が指差したのは、先ほど出した木箱だった。

「……これ、だね。」

確かににおいの発生源はこれらしい。

「ま、まさか!!」

「!？」

「この中に銀ちゃんがああああ!!」

「わあっ!! い、いきなり驚かすなよ!!
っていうかこの殺人事件だよ!!」

神楽がいきなり大きな声を出したので、驚いてしまったらしい。

「よしっ、早速開けてみるネ!」

「ええ!？ダメだよ勝手に開けちゃあ……」

それに異臭を放っている箱だ。

正直言っただけに開けたくない。

…だが、もう新八が言った時には遅かった。

「……な、何アルかこれ…」

その木箱に入っていたのは…

「布…？…いや…羽織かなあ？」

白っぽい羽織で、破けているところもある。
かなりボロボロで年季が入っているように見えた。

「趣味悪い羽織アルな…。白地に茶色い模様ネ…」

「！…いや…まさかこれ……」。

か、神楽ちゃん！ちよつと貸してそれ！」

何故だか新八の顔は青ざめていた。

彼は箱から羽織を取り出し、広げる。

真っ白い布に、無数の茶色い染み。

「……………模様じゃないアル……」
神楽の顔もみるみる内に青ざめていった。

「…血…」

「…この変なにおい…血だったアルか…」

「血って…時間が経っても臭うんだ…。」

その羽織に付いた血は、もう赤かった面影もなく、黒々としており
おぞましく発色している。

「あ…新八、袴みたいなものもあるネ。」

羽織りの下には、着物や袴や籠手、胸甲などが綺麗にたたまれ、整
理されて入っていた。

「…全部血が付いてるヨ…」

「しかも真っ白だ…。」

（まるで…死に装束みたいナ…）

見てはいけないものを見てしまった気がして、2人の心の中に何か罪悪感のような嫌な感情が生まれていた。

「きっとこれ全部戦用の着物だよ…」

「いくさ…」

「そんな暗い顔してどうしたのだ…？
リーダー、新八くん」
すると桂が心配そうに2人の肩に手をそつと乗せた。

「…いや…この棚にあった箱の中から着物が見つかって。
血が…いっぱい付いてるネ…。」

つて、え？

「……………つてうわあああああつっ！！！！！」

「ななな何アルかああ！！誰アルか！！長髪の亡霊っ！！悪霊退散っ！！悪霊退散アルううう！！！！！」

「ハッハッハッ、そんなに驚いてどうしたんだリーダー、新八くん。」

「どうしたのはテメエの頭だツラあ！！ナレーションまで騙してんじゃねえ！！」
「つていうかシリアスな雰囲気ぶち壊してんじゃねえぞボケえええっ！！！」
「神楽のキックとパンチが桂に炸裂した。」

「ぶっ…ぐおほっ!!」
桂は見事に吹っ飛ぶ。

「どっから入って来たんですかアンタ!!」
もう2人とも心臓バクバクである。

「窓が俺を迎えていたのだな!」

「迎えてねーよ!いや確かに今窓全開だけど!」

新八は換気なんかするんじゃないかと、と激しく後悔した。

「本当に迎えてくれて助かったぞ!真選組に追われていたのだ。」

(そういうことか…)

桂が真選組に追われて、ここに逃げ込んで来たのは初めての事ではなかった。

「で、何をしているのだ?」

「あ…いや…」

はつきり言って、説明のしようがない。

「ん…?…それは…」

桂は新八の持っていた着物や、箱に気付いたらしい。

「……………」

桂はジッとその白い羽織を見つめている。

「桂さん…？」

「…しろやしゃ…」

「え」

「あ、いや…。…これをどこで見つけたんだ？」

「この棚の最上段ですけど…」

「そうか…。」

そう言って、彼は少し笑った。

「…ツラ、何か知ってるアルか…？」

「ツラじゃない、桂だ。」

まだ、銀時は帰っていないよな、もちろん」

「え？」

何故そんなことを桂が知っているのか。

「…2人共気付いているだろうが、それは銀時のだ。」

「！

…銀ちゃん、こんなの着てたアルか…？」

「……。」

新八も、薄々気付いていた。

「…攘夷戦争の時に着ていたものだ。」

「やっぱり…」

銀時が攘夷戦争に参加していた事は、何となく知っていた。

…だが、

「実感が、湧かなくて」

「？」

「銀さんが攘夷戦争に出てたって…一応分かってたけど、あの銀さんが…そんな…想像できないじゃないですか。」

白夜叉とか云われても…そんなのよく分からないし」
新八は少し俯いていた。

「…銀時は確かに、戦に出ていた。…だが、別に銀時は天人を殺す為に戦に出たのではないぞ。」

「…護りたいものがあつたから、戦つたんだ。」

（…一番強かつた想いは……あるいは違つたのかもしれないが…）

「なあッラ、銀ちゃんって…昔どんな事してたアルか？」

「…銀ちゃん私達の過去知ってるネ。暗いところも明るいところも知ってるヨ。」

「…でも私達銀ちゃんの昔の事何にも知らないアル。」

「……。」

神楽も新八も、ジッと桂を見つめている。
2人共想いは同じだった。

「…まだ、早い」

「え…」

「まだ…君たちが知るには時期が早い。」

「ど、どういう意味ですか！」
新八が問うても、

「しかし、もうすぐ…その時が来てしまうやもしれん。」
桂は、答えない。

「…？」

（来て…しまう？）

「というか…良いんだがな…話してしまっても。
…だが、銀時の意志に逆らうことはできんだ。」

「……じゃあまたいつか、僕らは知ってもいいんですか？」

「ああ。きつとな。」

「……。」

神楽も新八もいつもの元気さは微塵も見せないで、俯いている。

「まあそつ気を落とすな。」

…銀時は、ああ見えて色々考えているんだ。

…アイツは…優しい男だ。

新八くんもリーダーも知っているだろう？

…奴を信じてやってくれ。」

桂の声色はいつもより優しい感じがした。

「…言われなくても、銀ちゃん、銀ちゃんは銀ちゃんネ。私天人だけど銀ちゃん、私のこと大好きヨ。」

神楽は膨れっ面をしている。

「そういうことです。」

新八はそう言って、優しく笑った。

桂は少しキョトンとしてから、

「…そうか」

とだけ言った。

「もうすぐ銀時が帰ってくるだろうし、もうそろそろ俺は行くところだよ。」

そう言うなり、桂は玄関に向かって歩き出した。

「桂さん、…何か…今日はありがとうございました。」

新八は玄関で草履を履く桂に、何気なく礼を言う。

「ん？何のことだ？」

やっぱり天然な人だなあ、と新八は思った。

「いや…まあ、ね。」

大ざっぱにはぐらかし、ハハハ、と笑う。

「ヅラあ、もう侵入すんじゃないぞ。」

「それで次来る時は酢昆布買ってくるネ。」

「ああ、分かった。…また来させてもらおう。
今日は来てみて良かった。」

「…銀時がいないのを2人共心配しているんじゃないかと思っていたのだ。」

「え…」

「では失礼するぞ。銀時によろしくな。」

「おうネ！」

そうして桂は出て行った。

（“来てみて良かった”…？
…“銀時がないのを”…？）

「うーん…」

「どうしたアルか、新八？」

「いや…何でも…」

何かすごくモヤモヤしたが、あれこれ思っても仕方ないと思い直し、新八はリビングに向かった。

（お前は幸せ者だな…。あんなにお前を思ってくれる家族がいて…。
）

さっきも会った幼なじみを羨みながら、桂は歩いていった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第八訓 見ざる言わざる聞かざる、これ基本（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございました！

また次回会いましょう*+（^m^）

第九訓 噂されてたらくしゃみが出るとか現実にはありえないよね（前書き）

坂本&陸奥ついに登場です！

初登場でこのドシリアスはなんだって感じなんです、そこは曇坂仕様です（笑）

ちなみに私の短編小説、『至純にして散る』と、かなりリンクさせています。

『至純にして散る』を読んでいなくても全然話はわかりますが、読んでからの方が面白いかもしれません。

ではどうぞ！

第九訓 噂されてたらくしゃみが出るとか現実にはありえないよね

風が、吹いている。

（生温い…気持ちの良い風ではないのう…）

快援隊の船は、物の買い取りに向かうため、地球を出ようと空を飛んでいた。

その船の端に、陸奥は立っている。
そこはただ風の音しかなかった。

「陸奥、こげなとこで何しちよる」

突然、後ろから聞こえた聞き慣れた声。
無論、坂本辰馬である。

「風に当たつとるんじゃ」

「こげな風に当たつても気持ち良くもなかるう？」

「まあな。生温くて、気持ちの良い風ではない。」

「…?」

「何となくな、こつこつ風に吹かれないと思う気分の時もあるんじゃない。」

「…あ…ああ！なるほど、あん時に似とるからか！」

「？」

「わしらが再会したあの日じゃ。」

（ああ…。そういうことか…）

「そんな昔のこと覚えとらんわ。」

「アッハッハ！」

わしははつきり覚えとるぞ。

この空色もそっくりぜよ。

思い出してしまうのー。

今では懐かしい思い出じゃな。」

（懐かしい思い出…か。
…フン、丸々嘘じゃな。）

陸奥は、はぁ、とため息を吐き、目を伏せた。

「ところで頭はさっきどこへ行つとつたんじゃ？

いつもみたいに風俗店に行った様子でもなかったき。」

いつものように彼がキャバクラに行つていれば、夜になるまで帰つてこないし、泥酔して帰つて来るはずだ。

「風俗店でのうておりようちゃんのとこじゃ。

まあ確かに今日は違うがの。アツハツハ！」

「で、結局どこへ行つとつたんじゃ？」

「おんしにも一度話したことがあつたかのー？

吉田松陽つちゅう偉い先生のところに行つとつたんじゃ。

詳しく言えば…その松陽先生のお墓じゃな。今日が命日じゃき。」

「吉田松陽…ちゅうのは確か…」

「おう。金時とヅラと高杉のお師匠さんぜよ。」

「その先生に頭はお世話になつたんか？」

わざわざお墓参りをする位だ。

生前、何かお世話になつたんだろうと思つたのだ。

「いんや。お世話どころか顔すら知らん。」

「え…。じゃあ何故…」

予想外の答えに、いつも無表情な陸奥が少し驚くような表情をする。

「陸奥、おんし、攘夷戦争が終わった時のこと覚えちよるか？」
どうしてか坂本の声色が妙に大人っぽく聞こえた。

「…ああ、覚えちよるが…」

「あの晩にな、その松陽先生がわしの夢に出てきたんじゃ。」

「ゆ…夢…」

「ああ。夢ぜよ。」

わしゃあ一度見た夢なんていつもすぐに忘れてしまふんじやが、何故かその夢だけははつきり覚えとる。」

坂本は空を見上げた。

「どんな夢じゃ？」

「いきなり自ら吉田松陽っちゅう名乗る男の声がしての、わしに銀時と小太郎と晋助をお願いしますーっちゅうて消えおったんじや。まっこと面白い男じやろ？アッハッハ！」

「ほう。」

その理由だけで墓参りする坂本の方がよっぽど面白い、と言いつつになったが、寸前のところで呑み込んだ。

「高杉にはその話はしとらんが、さつき金時とヅラに話したら笑われてしまったわ。」

酷いとは思わんねー？

出てきたのは松陽先生のほうじゃというに……」
坂本は頭をポリポリと掻いた。

「当たり前じゃ。」

そげな話すれば誰でも笑う。」

「笑わんのはおまんくらいじゃな。」

「わしは元々笑うのが苦手な性格じゃき。」

「アッハッハ！そうじゃったな。」

ほんにおまんはまっこと昔から変わらんのう。」

「おまんに言われたくないわ。」

頭が武神四侍と恐れられていたなど全く想像もつかんき。」

陸奥は珍しく少し笑ったが、またすぐにいつもの無表情に変わってしまう。

「アッハッハ！最近剣を握つとらんからのう。きつと腕が鈍つとるわ。」

何となくずれている坂本の返事に、陸奥は少し遠い目をした。

（やはり変わってしまったかの…。

…しかしわしは、今の頭の方が好きじゃき…このまま頭は変わらんでええ。

あの事も…忘れるべきなんじゃ…。）

「…わしはそろそろ指令室に戻る。頭はどうする？」

「わしも今この風に吹かれない気分になったき、もう少しここにいろぜよ。」

「…そうか、なら伝えておく。」

陸奥は船内に消えていった。

（ああやって風に吹かれて…今でもあの人達の事を想っとるんじやろうな…。

…しかし、今となってはもう遅い…。）

坂本と陸奥の、『あの日』。

この2人の心に深く刻み付いた時間が知れることになるのは、また先の話。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
. . .

第十訓 札を偶然拾うような奴に悪い奴はいない神様がそう決めてんだよ

（久坂玄雅、入江八二共に行方不明者リスト…。でも所属部隊や状況を考えると、生存率的には入江の方がかなり高いかな。

久坂の方は所属部隊から考えて絶望的だろう…。）

頭の中でさっきの電話の内容を整理し、いつものように頭の中に刻み付けて記憶した。

紙に書いては万が一落としてしまうといけないため、念には念を、絶対に紙に書かないようにしているのだ。

「まずはやっぱり、入江八二さん探しだな。」
もちろん生存率の高い方からだ。

（さて…どうするべきだ…？）

今一番知りたいことと言えば、入江八二が生きているのか、そうではないのか。

一番情報が手に入りそうなのは桂のいる攘夷党か、もしくは高杉のいる鬼兵隊、後は年配者が多い穏健派攘夷集団・蔓紳党^{まんしん}だろう。

（ここは消去法で蔓神党だな。情報は…或いは攘夷党や鬼兵隊の方が多いかもしれないけど…）

最近高杉の様子がおかしい為桂一派は警戒を強めているし、何より鬼兵隊は分からないことも多く、移動手段も船で潜入しにくく、か

なりの過激派であるので危険だ。

「蔓神党の拠点調べなきゃな…」

攘夷集団の拠点を調べるのはなかなか至難の業だ。

「ぶえつくしっ…!」

(うう…。絶対風邪引いちゃったよ…)

さっきの通り雨に打たれ、着物はしっとりと濡れている。日が出て
いる訳でもなく、北風まで吹き始めている為、かなり寒い。

山崎は鼻をズーズーいわせながら、情報を集めるべく歩き出した。

それから数時間後。

日もかなり傾いて、もう薄暗くなってきた。

（もう大体拠点の位置は掴んだ。後は具体的な場所を調べなきゃな…。

また他の攘夷志士を当たってみよう。

まあでも拠点が掴めても潜入は明日だな。

もう日も落ちるし…）

「ぶえつくしっ！！…ぶえくしっ！！！！」

（ヤバイ…。本格的だよこの風邪…）

日が傾いてきたせいもあってか、寒気がさつきよりも少し強くなった気がした。

「とにかく情報集まったし歌舞伎町を出よう…。」

山崎は少し足を早めた。

ぐわん

（え）

「ここ…旦那の家じゃん！」

彼は情報を集める内に、いつの間にか万事屋の前まで来ていたらしい。

（駄目だああああ！ここで倒れたら絶対駄目だ！！監察として最低じゃん！！）仕事中にターゲットに会ってしまつなど言語道断である。

（とにかく蔓神党の方に向かおう…。ここから離れよう！）

山崎は重い体を奮い立たせ、走り出した。

「ちょ…はあ…はあ…ちょ…これ…はあ、はあ…マジで…ヤバくね？…はあ…はあ…はあ…」

歌舞伎町からかなり離れた。
もう江戸の端まで来ている。

山崎は顔を真っ赤にして歩いていった。

（歌舞伎町辺りに比べたら結構田舎だな…。）
まずホテルが無い。

…宿屋もあるかどうか疑問だ。

「もう…病院に行こう…！」

もう限界だった。

（っっていうか…病院どこ！？）

「…やっぱ…もう…無理……」

バ
タ
ッ

それから彼が起きてくる事はなかったという。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

いやいやいやいや!!

なにが『To be continued...』だよ!!

俺死んでないからね!?

確かに倒れたけど死んでないから!!
戻ってくるから!

じゃ、のが本物ですから!

To be continued...

第十訓 札を偶然拾うような奴に悪い奴はいない神様がそう決めてんだよ（後書

オールシリアスじゃあ銀魂じゃないですよね（笑

私ギャグがなかなか書けない体質なので、一回攘夷4人でギャグ話を書いてみたいな（^m^）
すごくたのしそうですよ

ではまた次回お会いしましょう*+

第十一訓 漫画とかでやたらとキャラが出てくるようになったらそれはきつと終

最初にすみません、
かなり短いです。

そして短いのに二部構成です。

今回はなんと、まさかの新たに4人キャラが登場です！

キャラ多すぎてごめんなさい；；

もうそろそろ話が大きく動き始めると思います。

第十一訓 漫画とかでやたらとキャラが出てくるようになったらそれはきつと終

「なーんでお前と鉢合わせするかねえ…。」

鉢合わせするんならもつと良い女が良かったぜ。」

「ありがとうあなたに悪い女って言われるのは最上の褒め言葉よブスッ娘クラブの常連さん。でも褒め言葉なんてなんの刺激もないわ増してやあなたに言われてもなんとも嬉しくないんだけど？」

歌舞伎町にある、ある茶屋。

「はいはいそりゃ悪かったね…。」

…っていうか…お前もやっぱり任務か？」

「も…ってことはあなたも任務なのね。」

外の座椅子には服部全蔵と猿飛あやめが座っていた。

「最近忍が極端に動いてるな…。」

「しかも雇い先は攘夷志士からばっかりだし…。」

任務先は幕府ばかり…。」

「「何が…起こる…」」

「「あ」」

「なあに私とハモってんの!？」

私とハモっていいのは銀さんだけよ!!」

「それはこっちのセリフだボケえ」

「何ですって!あなたにそんな趣味があるとは知らなかったわ!!
銀さんは渡さないんだからああ!!!!!!」

「違うだろ!意味履き違えるにも程があるだろ!!」
忍にあるまじき大声である。

「ハア…ハア…ハア…、フン、もういいわ。
とにかく何が起ころうと銀さんは私が守るもの。
私達の愛は永遠だわ!」

「何でもいいが、好きにしろ。
俺は雇われなきや何もしねーけど。」

「別にあなたの事なんか知らないわ。
もう私は任務に行かなきゃならないの。」

まあ精々くたばらないように頑張ることね。」

「フン、良く言うぜ……。」

そりゃお互い様だろーがよ」

「」「」さようなら」

……ふと気が付くとその茶屋に2人の姿はなかった。

ただ、置いてあったのはこの店のお茶代分の小銭だけ。

「団長」。さつき吉原に連絡しといたぜ。」

「ふーん。ありがと阿伏兔。」

これでまあいいかな。」

（百華には天人何人かいるみたいだし…
日輪も月詠も無茶しちやいそうだからなあ。
一度高杉としてみたいしね、殺し合い）

春雨の船。

さっちゃんと全蔵が茶屋にいる頃、神威と阿伏兔はその船の第七師団長室にいた。

「しかし元老うえは高杉の言いなりだねえ。
高杉はどう思ってたんだか」

「高杉もわかってるでしょ。
…ある程度はね」

「そりゃそうだろうが…」

団長はどうするんだ？…計画が始まったら。」

「弱い奴に用はない。」

…ただ、強い奴を殺すだけさ。」

そう言って、いつもの優しい笑みを浮かべる。

（妹をどうすんのかが見どころかね）

阿伏兔はわしゃわしゃと頭を掻いた。

「阿伏兔は？」

「ん？」

「阿伏兔はどうすんの？」

「…俺は…」

（そりゃ）

「団長に従っただけさ」

「……………ま、好きにすれば良いけどね」

「ははっ…それを言われると困っちゃまうぜ。」

（俺のすることは…観戦かねえ…）

銀色の侍と、最強種族・夜鬼に生まれるべくして生まれたこの男。

近い未来、彼らがその剣と傘を交える日は来るのだろうか。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第十一訓 漫画とかでやたらとキャラが出てくるようになったらそれはきつと終

最後までお読みいただきありがとうございます！
評価や感想などいただけると嬉しいです。

次回はまたまた山崎です（笑）
大きく物語が動き出します！

第十二訓 ベタな展開は面白いからベタになったんであってそついつのもたまに

倒れた山崎はどうなったんでしょうか…？

第十二訓 ベタな展開は面白いからベタになったんであってそういつのまに

「う…」

頭が、痛い。

「もし…」

(……?)

「…もし、お若い御仁。」

「……………」

山崎はゆっくりと目を開けた。

意識が、徐々にはつきりしてくる。

「お…、目を覚ましたようすな。」

（どこだ…ここ…ってか…誰…？）

「あ…あのー…」

「ああ、まだ安静にしておった方がいいですよ。熱があるようすから。」

男は優しい声色で言った。

見た目からすると、20代後半くらいだろうか。

「はい、水ですよ。自分で飲めますか？」

男は側のテーブルに置いてあった一杯の水を山崎に差し出した。

「あ、はい…。すみません…。」

「あなた、道で倒れておったそうすな。

ここいらに住んでおられる方が運んで来て下さったのですよ。」
その男はニコリと笑う。

「すみません本当に…。」

「……ここは病院ですか…？」

「ええ。ただの小さな町病院ですがね。私は医院長です。今日は休診日ですから、ゆっくりしておって下さいね。」

「ありがとうございます…。」

あの…俺は山崎退といいます。」

「どうも。」

…なら、あなたは真選組の監察さんで？」

「は…？」

一瞬の思考停止。

（何で知って…）

「これ、一緒に落としておりましたよ。」
その男が手に持っていたのは、山崎の携帯だった。

「え」

「さっき着信がありましたよ。」
ご家族の方かなと思い、発信先だけ見せて頂いたんですよ。
それが土方と表示されておったんですね。」

男はまたニコリと笑った。

「よく分かりましたね…。それだけで。」
（なんだこの人…？）

「いやいや、昔は私も攘夷志士だったものですから。」

「はあ……」

（よく真選組の隊士の前でそんなことが言えるな……）
ただ、変わった人だなと思った。

「あなた、ここいらに密偵にでも来られたんですか？
蔓神党が近くにいますからなあ。」

「！」

「いや、本当に私は今はただの町医者ですから……。」
山崎に少し睨まれても、男はその笑顔を崩さず手をひらひらと振った。

（ただの……町医者？）

「じゃあ何故……俺が監察だってわかったんですか？」
山崎は更に鋭い眼光で男を見つめた。

「いえ……今は全く関わりがありませんが、私には友人にたくさん攘夷軍の幹部がおりまして。」

「……………」

「私も幹部と同じような扱いを受けておったので、攘夷戦争が終わってから一年位はそういう幕府側の情報が入って来たんですよ。だから隊長・監察クラスの名前くらいは分かります。」
男はやはり笑顔を崩すことはない。

「…そうなんですか。」

（まあ記憶力の良いこって…）

「蔓神党に密偵ということはきつと昔の情報を集めておるんでしょっ？」

「ええ…まあ。」

（絶対頭良いよな…この人。）

「じゃあやはり攘夷戦争のこととか？
理由は知りませんが…」

男はお構いなしに山崎に話しかける。

「……まあ……そうですね……」

（っていうか……）

この人攘夷軍の幹部と友達なんだよな……？

何か、重要な情報が聞き出せるかもしれない。

（……でも……この人には俺が真選組の監察って事がバレてる……。）

聞き出せる情報が重要だとしても、聞き出すこと自体のリスクが大きい。

（しかし……ここでのこのこ帰る訳には絶対いかない！！）

ここはとりあえず有名な武神四侍の名を出すのは避けよう。（

山崎は決心して、小さく溜め息を吐いた。

「あの、もし俺があなたから情報を聞き出そうとしたら……あなたは話してくれますか？」

「！」

「お察しの通り今俺は攘夷戦争時代のことについて情報を集めています。

だから、幹部の友人であつたあなたから情報がほしいんです。」

山崎はまっすぐに男を見つめる。

「それは…その話の内容にもよりますな。」
この時初めて、男が無表情になった。

「そうですか…。」

でも、とりあえず質問はさせてもらいます。」

「ええ。」

「攘夷軍にいた…入江八二と久坂玄雅という男をご存じですか？」

「……………」

「…？」

男は答えなかった。

…というよりは…答えられない感じだった。

男はただ口をポカンと開けて山崎を見ている。

「あの…どうしたんですか？」

「…久坂とは…私…ですが…」

「え？」

「…私の名は、久坂玄雅。
この病院は…久坂医院です…。」

「え
え
ええええ
ええええええ！！！！！」

山崎の絶叫が病院に響き渡った。

To be continued . . .

【改】第一三訓 第一印象でその人の性格を決め付けるもんじゃない（前書き）

A H A P P Y N E W Y E A R !

2010年、これからも曇坂陽向と共に、この『銀魂 攘夷篇』
をよろしくお願いします！

最近タイトル考えるのが最近めんどくさくなってきました。
でもやっと物語が動き出してワクワクしてます（笑）

【改】第一三訓 第一印象でその人の性格を決め付けるもんじゃない

「…あなたが…久坂玄雅…？」

「…そう…ですが…。何故私なんかを…」

久坂は本当に驚いているらしく、目を見開き、口をポカンと開けている。

（些か、偶然が過ぎるな…。

よっぽど日頃の行いが良いのか…それともこれからよっぽど悪いことが起こるのか…。）

「…すみません…なんか…いきなりすぎてね…」

「…？」

（これはもう全て正直に話すしかないよな）

「もう…全部話します…俺の、密偵内容について。」
山崎は久坂の目を真っ直ぐに見た。

「はあ…。」

久坂はやはり戸惑いの表情を浮かべている。彼が困惑するのも無理はないだろう。

そして山崎は話し始めた。

武神四侍のこと、久坂と入江のこと。

白夜叉の存在について。

「その、武神四侍や白夜叉とやらの調査で密偵を？」

久坂は複雑そうな表情で山崎を見た。

「ええ。」

山崎は罰が悪そうに少し俯く。

「なるほど。まあ、何というか、真選組の監察は優秀ですね。私の名を割り出すとは」

久坂はあまり感情の読めない無表情をしていた。

「い、いや…」

（監察対象に正体バレた時点で監察失格なんですけどおおお！！副長に殺される…！！）

「私は、何も知りませんよ」

「…は？」

急に久坂が少し鋭い目をして言ったものだから、山崎は驚いた。

「…というか、知っていても言いません」

久坂が言っているのは、きっと白夜叉のことだろう。

「……………」

（最悪だ）

山崎としては、非常にまずい。

一番話を聞きたかった人物に正体がバレた上に、情報提供も拒絶されてしまった（当たり前だが）。

しかし！

何としても話を聞き出さねばならない。

目の前に探していた久坂玄雅がいるのだ。バレてしまった今、逆に考えれば情報を大量に聞き出すチャンスなのである。

ここでノコノコと帰ることなど何があってもできない。

（さて、どうしよう）

山崎は頭をぐるぐると回転させる。

（もう、バレちゃったんだから、大胆に行くっきゃないよな。揺さぶるしかない）

「久坂さん。あなた、坂田銀時って…知ってますか…？」

山崎は賭けに出た。

「……………」ですから、私は何も言いませんと言っておるでしょう」
久坂は少し押し黙った後、困ったようにそう呟いた。

（この可笑しい間は……この人、絶対“坂田銀時”に反応した！）
山崎はその事実素直に喜べないが、監察としてなかなか上手い
っているはずだ。

「……………」

久坂は遠くを見つめて、押し黙っている。

（この人は…今何を思ってるんだ…？）

山崎は考えに考え抜いた。
残念ながら久坂の頭の中を一瞬で見透かせるような勘は持ち合わせ
ていないのだ。それならば。考えるしかない。

（旦那が白夜叉だと仮定して…、桂と高杉は旦那の幼なじみ。つま
り旦那と久坂さんは幼なじみなんだよな。白夜叉＝攘夷志士、真選
組は攘夷志士の敵…）

山崎はごく簡単に結論に辿り着く。

（普通に考えれば、旦那を庇ってるんだよな…。なら、真選組は旦
那の敵じゃないって事をわかってもらえれば！）

敵…では決して無いはずだと山崎は自分に言い聞かせた。

「久坂さん。実は、僕ら真選組は旦那と…いや坂田銀時と、何て言
うか、知り合いなんですよ」
山崎は慎重に言葉を選んだ。

「……？」

久坂はやはり、困ったような、焦っているような表情をしている。

「坂田銀時は……」

山崎が喋りだしたその時。

「その……坂田銀時という男が白夜叉の本当の名だと思っておられるのですか？」

「！」

久坂がいきなり話し出した。

（この人は……やっぱり）

「……まあ、真選組としてはそう思っています」
山崎は“としては”を強調して言った。

「真選組……としては？」

「ええ。」

…坂田銀時は…いや、旦那は…なんていうか、腐れ縁というかね…。
友だちなんていうとかなり照れちゃいますけど…。」

「！…友だち…？」

あなたが、ですか？」

「いや、俺だけじゃないですよ。」

副長の土方さんなんかいつつも旦那と子どもみたいに喧嘩してるような仲だし、沖田さんだって相当旦那のこと慕ってるし、局長の近藤さんも旦那のことかなり高くかってますし。

他のみんなも、俺みたいに『旦那』って呼んで慕ってます。」

「…なのに、その彼を白夜叉だと疑っておるのですか？」

白夜叉は真選組にとっては完全に敵でしょう？」

久坂は先ほどから少し眉をしかめている。

「ええ。」

だから…みんな口には出さないけど、絶対、旦那が白夜叉であってほしくないって願ってます。

旦那とは助け合ったこともありましたがね。

それに旦那には血も繋がってはいないけど…家族がいますし。」

「…では、もしその彼が本当に白夜叉だったとしたらあなた方はどうするおつもりで？」

「…はつきり言つて俺も分かりません。

多分、真選組の誰も分かってないでしょう。

…ただ、旦那をしょっぱいて高杉の過激な行動や桂の大人数による攘夷を止めさせることが少しでもできるなら、俺たち真選組は迷わず旦那をしょっぱきますよ。」

（これは…俺たちの本当の気持ちだ…。）

坂田銀時は、自分達にとって紛れもなく大切な存在であるのだ。

「……………」

「え……？」

「す……すみま……せん……っ……！」
「いけませんね……やはり私は、いつまでも半人前だ……」

久坂は、泣いていた。

「……………」。
山崎は、この時言葉という言葉が出てこなかった。
ただ驚いた。

「本当は…もつとあなたを疑わなければならぬのに…。我慢は、できませんね。私は…銀時が、生きて…おると、銀時が…幸せに…、暮らしておると…聞いただけで……」

久坂は胸がいっぱいなのと嗚咽で途切れ途切れに話す。

「……久坂…さん…。」

山崎はそんな久坂を見て思わず目頭が熱くなってしまった。

「あなたの目は…本物でした。ですから、私はあなたを信じましよう」

そう言つて久坂は涙を拭き、再び山崎に鋭い目を向ける。

「銀時を、悪いようにしないのなら、情報を差し上げても良いでしょう。間違つても幕府に引き渡すような真似はしないと、誓えますか？」

久坂は山崎をまっすぐ見た。

確かに、白夜叉と知れた銀時を幕府へ引き渡せば死罪にもなる可能性は十分にある。

「はい。必ず。必ず旦那を悪いようにはしません。させません」

（土方副長はあんな風に言うけど…あの人はど素直じゃない人はいないんだから。近藤局長も、沖田隊長も、真選組はみんな、旦那を罪人になんてしない）

山崎には確信があつた。何よりも信じられる仲間だから、久坂の頼みにも即答できた。

「…あなたは、随分素直な方でおられますね。…お話ししましょう。あなたが全て話したように、私も全て。

…武神四侍の事も、白夜叉…いや、銀時の事も。」

久坂は穏やかに微笑んだ。

「…ありがとうございます。」

山崎は胸が熱くなるのを感じた。

「もう…彼らが苦しむ姿は見たくないのです。

そして…私自身の過去を清算するために…。

真選組の監察のあなたにこのようなことを話す事が正しいのかは分かりません…。

しかし…あなたなら信じられそうな気がします」

久坂は目を細め、小さく笑った。

「…本当に…ありがとうございます」

そうして、久坂は一度目を閉じ、次に目を開けた時、そこに現^{いま}在の彼はいなかった。

彼が齎す情報。

それは、酷く奥深い、
穏やかな記憶。

T o b e c o n t i n u e d . . .

【改】第一三訓 第一印象でその人の性格を決め付けるもんじゃない（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました*+

次回は場面変わってあの人です（^m^）

焦らして焦らしてババーン！と出すのが俺流だぜ！

すみません本当にこれからもよろしく願いしますっ！！

【改】第十四訓 視聴者の興味を引くような予告を最初に流して結局内容は最後

タイトル今までで最長ですねw w

そしてこの異様な更新率はお正月だからです。

でも明日から私のお正月は終わるので、更新いつも通りの亀になる
と思います（泣）

そして予告で言っていた”あの人”。

：実は1人しか出さないつもりだったんですが、予定変更で、”あ
の人”が2人になりました！

1人は再び登場のあの人、もう1人は…？（^^）

ではどうぞ！

【改】第十四訓 視聴者の興味を引くような予告を最初に流して結局内容は最後

《最近高杉の動向がおかしいのだ。》

「……………」

先ほど合った旧友に言われた言葉。

坂本は、快援隊の船の中にある自分専用の部屋にいた。
彼は、うーん、と唸りながら、足を組んで座っている。

「まさか…そげな状態になっちよったとはのう」

吉田松陽の墓に行った時、銀時や桂から高杉の話聞いた。
祭の時のことや、紅桜のこと。

（…そういえば奴とも久しく会つとらんなあ）

「……………」

坂本は何を思ったのか、立ち上がって部屋の電話機の横にある、分厚いファイルを手にとった。

彼はそのファイルを開き、指でなぞっている。

「……えーっと……力行の……どこじゃったかえ……」

「お、有った有った」

すると坂本は電話の受話器をとり、ボタンを押した。

カチャ

『はい、どちら様ですか。ご用件をお願いします。』
高めの男の声が応答する。

「ああ、ここの総督は今おりますかの？
わしは友人じゃ。ちよいと話がありましたな。
辰馬ち言えば分かるき、代わってくれんか？」
どうやら相手は目当ての人物自身ではなかったらしい。

『わかりました。少々お待ち下さい。』

(電話に出るかのう、あいつ…)

『…なんの用だ、辰馬ア？快援隊の社長様がよ…』

すると突然、聞き慣れてはいるが、かなり懐かしい低い声がした。

「！おうおう！久しぶりじゃの高杉く！何年振りかのう！」
坂本はあまり期待はしていなかったので、少し感動してしまったらしい。

『んなこたアどうでも良い。

…てめえ何故鬼兵隊（こへいだい）の連絡先を知ってる？』

声色が昔より数段と冷たくなってしまった気がした。

「あつはつは！快援隊の情報部は優秀じゃからな。」
坂本は逆に声色が柔らかくなっているかもしれない。

『…………。で、なんの用だ？』

高杉は久しぶりに話した旧友に、冷たく、素っ気ない態度を取り続ける。

（第二段階目、じゃな）

「おまん、今日の夜は空いとるね？」

『…………。』

「おお、空いとるんか。」

無言（イコール）肯定。坂本は知っていた。

（昔っからバカ正直じゃきなあ、晋助は。
嘘が付けん体質じゃ。）

「なら今夜久々に飲みに行かんか？」

『は？』

高杉が間の抜けた声を出す。

（こいつ何を考えてやがる……？）

…高杉がそう思つのも無理はないだろう。

「わしも今回の取引はかなり近場じゃき、夜にはまた地球そちちに戻れるんじゃ。

…ちつくとおまんと話がしたいき、どうじゃ？」

『……行くか阿呆が……』

「あつはつは！まあ来たくなかつたら来んでもええ。京の居酒屋・寺田にいるきな。」

『……用件はそれだけか？』

「おう、いきなり電話して悪かったの。」

では失礼するぜよ。じゃあな晋助。」

「！……もっかけて来るんじゃないえ。」

プツンッ

「来るかのう、晋助の奴……」

（気紛れな所があるきなあ）

全否定するような口振りではなかったものの、些か不安である。

（…奴らを繋ぐ存在は最早わししかおらんくなってしもつたき）

今あの3人を結んでいるものがあるとしたら、それはきつと自分と、
彼らの心に一生根強く生きるであろう人。

時々、銀時と桂には高杉が必要だと思つ事がある。

大切な者同士は離れてはならない。

それは、自分が一番よく知っているから。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

【改】第十四訓 視聴者の興味を引くような予告を最初に流して結局内容は最後

最後までお読み頂きありがとうございます！

高杉がやつと書いて嬉しいです。

あと私の書く坂本さんは真面目すぎますね……

第十五訓 同窓会をする時はメンバーと人数をよく考える（前書き）

今回は、前回に引き続き坂本です。

唐突ですが坂本の土佐弁が分かりません…orz
めちやくちや何となくで書いてます

私は関西圏在住なので、今回出て来る女将さんの関西弁は本物です
（笑）

ただ昔の京都弁っぽくしたので若干間違ってるかもしれないですが、
暖かく見守ってやって下さいね…；；

ではどうぞ！

第十五訓 同窓会をする時はメンバーと人数をよく考える

「ふああーああ……。今日も疲れたぜよ……」

「坂本はん、最近仕事忙しいみたいやねえ。
最近全然お店来はらへんから、寂しかったんですえ？」

京の、居酒屋・寺田。

いかにも居酒屋、と言った感じの店である。
店内には客が3、4人と、少ない。
従業員は多くが若い女性であつた。

「あつはつは！女将さんみたいな綺麗な人にそげなと言われると
照れるぜよ」

「もう、「冗談言わんでええわ。ふふふ……」

「……冗談じゃないき……」

坂本は女将に軽く流され、首をカクンと垂れている。

坂本は調理台とくつついているカウンターに座っていた。

「今日はお客さんが少ないわあ…。」

坂本はん、今日誰か取引先の人とか来うへんのですか？

お一人で？」

「いんや、わしの古い友人が来るはずじゃけんど……まだ来ないみたいじゃな。」

「あら、坂本はん、陸奥さん以外のお友だちはったんですねえ。」

「どんな人？」

女将はものすごい事を言いながらおしとやかに笑った。

「アツハツハ！泣いていい？」

わしにもいっぱい友だちいるぜよ。」

…銀時とか、桂とかだろうきつと。

「そうなんですか？」

でも今日来はるお友だちはお一人なんでしょ？」

「おう。しっかし今日来る奴はわしの知っちゅう人間の中で一番厄介な人種じゃな。」

しかし昔はあいつも可愛いもんじゃったがのう。

からかったら過剰反応してくるき、面白うてしゃあないんじゃ。

しかし今じゃギャグパートには100%登場できんような陰湿な性格になってしもつたぜよ。
アッハッハ！」

……

……

「ん？」

いきなり、長あい沈黙。

「あ…坂本はん…後ろ…」

女将が少し困惑したような表情で、坂本の後ろを指差した。

「シリアスパートには100%登場できねえ阿呆が俺に何のようだ…？」

「あ…アツハツハ！」

おう！久しぶりじゃー！

おまん遅かったのう おぼほへっ！！」

坂本は高杉に頭を掴まれ、それは物凄い勢いでカウンターに顔を叩きつけられた。

「ひっ…、さ、坂本はん！」

「アッハッハ！大丈夫じゃ大丈夫！」

「やっぱりおまんは陰湿じゃのうぼはへっ！！」

…更に叩き付けられる。

「ククッ…頭カラな癖にモジャモジャしてんじゃねえぞ、辰馬ア。」

「頭カラでもモジャモジャは関係ないぜよ」

「坂本はん、頭カラは否定しはらへんのですね。ふふふ…。」
「女将はやっぱりおしとやかに笑う。」

「あ、女将さん、こいつ、わしの旧友の高す…ぶぼっ」

「旧友でもねえ、名前も言う必要はねえ。」

現在の世いまの中、高杉晋助、という名前を知らない人のほうが恐らく少ないだろう。

…なんせ、超過激派テロリスト…指名手配犯なのである。

「すまんすまん！」

おまんはヅラほど阿呆じゃないきの〜」

高杉にめちゃくちゃされ、辰馬はボロボロだ。

「ヅラもてめえにやあ言われたかないだろうぜ…」

(…あの口癖か)

いつからかは覚えていないが、桂のあの口癖は銀時と自分によるものだと自覚している。

「ま、ここに座ったらいいき」

辰馬は自分の隣の席を指差した。

「……………」

高杉は何も言わずに座る。

「坂本はんのお友達言うからどんな人かと思ったけど、やっぱり何ていうか…普通の人と違う感じがするわあ。」

坂本はんも面白い御人やからねえ。」

女将は変わらずゆっくりとした口調である。

「わしの友はの、まっこと面白い奴ばかりじゃ。
のう晋助。」

「……………」

「アッハッハ！ほら、こういう時に無視なんかしよるような面白い奴ばかりじゃ！アッハッハ…」

坂本は打ちのめされ過ぎたのか、若干涙目になっている。

「…まあ後はお二人でごゆっくりしてくださいねえ。」

お客さんのお話聞くのもうちの仕事やけど、聞かんのもうちの仕事なんですえ？…ふふふ…。」

なかなかできた女将であると2人は思った。

「すまんの。ま、取りあえず晋助の分の酒を頼もうかの。」

「はい、少々お待ちくださいねえ。」

女将は後ろの棚にブラツと並んでいる酒を一本手に取り、準備し始めた。

「のう晋助」

「何だ」

高杉は目も合わせない。

「おまんよう来てくれたのう。もう来んか思っちよったぜよ。アッハッハ！」

坂本は盛大に笑う。

「……ただの気紛れだア」

「ま、結果オーライじゃ！

酒でも飲みながら昔話でもするかの〜。」

…昔。

この2人にとって、『昔』とは何とも複雑なものであるのだ。

「…昔話は嫌いだ」

高杉はさほど興味も無さそうに、女将が注いだ酒を受け取りながら言った。

「まあまあそう言わんことじゃ、たまにはええぜよ、そついうのも。」

「てめえも昔話は嫌いなはずだ…。
…俺以上にな。」

高杉はニヤリと、破壊的な笑みを浮かべる。

「いんや、嫌いではないのう。

なかなか面白かったことも多いきな。」

坂本はただ、いつもの陽気な笑みを浮かべる。

「てめえは嘘を付くのも上手くなつたかア？」

「嘘なんか付いちやらん。

ただ、昔話は大切っちゅうもんじゃ。

楽しい事も、辛かった事も振り返ってみるとこんな面白いことはないぜよ。」

「……。」

高杉は応えず、ただ無表情に酒を飲んだ。

「ま、たまにはええじゃろ。

おんしは確か…銀時やヅラと幼なじみじゃったのう」

「……………」

高杉は、微かに顔をしかめた。

松下村塾の3人の出会いと、その関係。
久坂玄雅と入江八二。

…彼らの時間は、少しずつ、しかし、確実に動き出していた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第十五訓 同窓会をする時はメンバーと人数をよく考える（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます！

次回は松下村塾生達の出会い、そして詳しい関係性が明らかに…？

第十六訓 出会いはいくつになっても良いもんだ―その1（前書き）

山崎side&坂本sideから空想中です。

ヅラを美化しすぎな久坂さん（笑）

それにしても久坂喋りまくりですねww

「その1」なんで続きます（＾・＾）／

それではどうぞ

第十六訓 出会いはいくつになっても良いもんだ―その1

私は、今でも彼らと出会えたことを心から嬉しく思っております。

私たちが…特に、銀時、ゾラ、晋助、辰馬のような者たちが出会ったのは、少し運が良かったただけで奇跡などではありません。

全てはそう、あの人が。

あの人が、存在したからなのです

「……………」

「…玄雅。」

「……………」

「玄雅。」

「…先生、やっぱり私は…ここにはおれません…。
帰りたいです…先生…。」

「お友だちもいないのに、ここにはおれませんっ…。」

「私はこの時、泣いていたように思います。」

「玄雅、そんなこと言わないで。」

「みんなとちゃんと話ししなければ、友だちにはなれませんよ。
また、新しい子も入ってきましたしね。」

「松陽先生は、とても優しい方でした。」

「新しい子？」

「ええ。知らないのですか？」

私は、こくりと頷きました。

「この前の授業の時から、1人新しく入った子がいたでしょう？ 今日もいたはずなんですが…」

「わかりません…」

私は幼い頃、それは引つ込み思案な子どもでしたから、あまり周りを見ていなかったんでしょう。

『あの、先生。
入ってもいいですか？』

「「！」「」

すると突然、障子の向こうから高い凜とした声が聞こえました。

「おや、どうしましたか？」

『はい、今日の授業の質問があるんです。』

「丁度良いところへ来ましたね。
入りなさい。」

『はい、失礼します。』

そこへ入って来たのは、真っ直ぐな目をした、私とそう年も変わらない子どもでした。

一瞬女の子かとも思いましたが、服装で男の子だと分かりました。顔立ちが整っていて、立派な着物を着て、黒くて長い髪は綺麗に上の方で結ってあって…。

多分私と正反対過ぎたんですよ。本当に衝撃的な出会いでした。

…そう、彼が桂小太郎。

7歳の私と、6歳のヅラの出会いです。

今思えば少々ヅラを美化し過ぎておりますが、まあこういう素敵な

出会いだった訳です。

「小太郎、質問の前に、この子に自己紹介してあげなさい。」

「?…はい。」

俺は桂小太郎、6歳だ。

桂の家の長男で、一昨日ここへ入塾した。

「

彼は、自分の予想に反してなかなか男らしい口振りでした。

「6歳…」

自分より年下であることに、少し負い目を感じたのです。

「玄雅、あなたも自己紹介しなさい。」

「はっ、はい！」

「…わ、私は久坂玄雅、7歳です。」

「…久坂の家の長男で、半年前に入塾しました。」

「そうか、よろしくな。玄雅。」

「！」

玄雅、などと名前を呼び捨てにされたのは初めてで、とても嬉しかったのを覚えております。

「君たちは家柄も同じで年も近いですから、きっと仲良くできますよ。」

「…同じ家柄？」

「まさか…久坂とは、御殿医の久坂家か！」

「じゃ、じゃあ桂つてあの桂家の…」

桂家は地元でも有名な、先祖代々長州の御殿医を勤めている名家中の名家でした。

私の家も御殿医をやっている家ではありませんでしたが、御殿医の中でも新参者で、桂の家とは比べ物になりませんでした。

「そうです。」

あなた達は志も家柄も同じ。

剣の腕も均衡していると思いますが。」

この時はよく分かりませんでした。この後またヅラと自分の差に負い目を感じるようになります。

成長の度合いが彼と私では全く違いましたから。

しかも志の方向は同じでも、強さは全く違いましたし、家柄だって先程言ったように久坂と桂では比べ物にならないんです。

松陽先生はどうやら話をそれらしく言うのが得意でおっいたらしいですな。

「はい、松陽先生！」

入塾したばかりで慣れなかったんです。

良いお友だちを紹介していただいて、ありがとうございます！」

「いえいえ。

玄雅、小太郎。2人とも仲良くするんですよ。」

「はい！」

「…はい…。」

まさに何でもできる優等生のヅラと仲良くしなければいけないと言う事が決まり、私は正直言って気が滅入っておりました。

「さ、小太郎、質問を聞きましょう。」

「はい。」

私は静かに、失礼します、と呟くように言って、部屋を出ました。

…それから、数分後。

私はまだ、その『小太郎くん』を待つておりました。
先生に仲良くしろと言われた以上、それを実行しないわけにはいき
ませんでしたから。

「おい、玄雅か？」

「わっ！」

ボーッと黄昏ていたせいか、突然背後から話し掛けられ、私は驚い
てしまいました。

「お前は綺麗な髪の色をしているからな。すぐわかったぞ。」

「は……い……」

さらさらの真つ黒なストレートのヅラに言われても、何も嬉しくありませんでした。

何分私は濁った栗色の髪に、中途半端なくせつ毛ですから。

「一緒に帰るか。」

「はい……!」

この日を境に、私とヅラは仲良くなりました。

ヅラはよく私に話し掛けてくれて、友だちのいなかった私はヅラと出会ってから毎日が楽しく思えました。

最初はただ松陽先生に言われて仲良くしていただけでしたが、やがて私たちの間には友情が生まれました。

先生に言われたとはいえ、それからずっと仲良くできたということ、きつと気が合ったんでしょうね。

やがて私は彼のおかげで自我を表に出す事ができるようになりました

た。

今まではヅラの方がお兄さんだったのが、私の方がお兄さんらしく振る舞えるようになったんです。

彼と共に御殿医になるのだと、この頃はただただ、夢を見ておりました。

…夢は夢で終わってしまいましたが、ただ、彼と出会えたからこそ今の自分がいると言っても過言ではありません。

ヅラとの出会い…。

こんなところですかね。私の最初の出会い、です。

さあ、次の出会いについてもお話しするのでしょうか。

…次に『松下村塾』に入塾してきた、彼、について。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第十六訓 出会いはいくつになっても良いもんだ―その1（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました*+

久坂さん視点でした。

山崎にベラベラと昔話してます^^

しかしヅラがしっかりし過ぎですね（笑）；
ボケかます暇がなかった…（え

松下村塾生の中では、久坂さんが一番古参です。
次に入って来たのがヅラ。

さて、その次は…？

【改】第十七訓 出会いはいくつになっても良いもんだ―その2（前書き）

今回長いです。

次にやってきた入塾生とは…？

【改】第十七訓 出会いはいくつになっても良いもんだ―その2

「おはよう玄雅！」

「あ、おはよう小太郎。」

ヅラが入塾してから約半年程。

私たちは変わらず平和に過ごしておりました。

この頃になると私の引っ込み思案は無くなってきたおり、塾にもとても楽しく通っておりました。

「今日の授業は漢詩に入るな。」

「はい！楽しみですね。」

彼とは家の方向が同じなので、時々一緒に塾へ行く事がありました。

「あ、そうだ、お前に言っておかなければならん事があるのだ。」

「？」

「俺の1つ年下の友だちが今日入塾してくる。

また明日からは3人で登校する事になるかもしれないが、よろしくな。

」

「へえ、私より2つ年下ですか。

どのような子なんですか？」

「男の子だが結構な甘えん坊だぞ。

しかし人見知りが激しいから、仲良くなるには少し時間が掛かるかもしれないな。

」

この時は軽く聞き流していましたが、ツラがかなり話を小さくして話していたのだと後々思い知らされることになります。

なんせ『彼』はツラにべったり、また後々は松陽先生にもべったりでしたから。

「その子は何故今日私たちと一緒に行かないんですか？」

「ああ、今日は親と一緒に来るらしいぞ。」

「へえ、そうなんですか。」

やがて私たちは村塾に到着しました。

松陽先生はいつも門の所で掃き掃除をしていらっやいます。

「おはようございます松陽先生！」

「おはようございます！」

「おはよう。」

2人とも元気ですね。」

こうやって優しく笑う松陽先生が私たちは大好きでした。

「あ、そうだ、あいつはもう来ていますか？」

「…ええ、来てますよ。」

お母様はもう帰られましたか。」

「あ…そうですか。」

えっと、玄雅に紹介したいので会いたいんですが…」

「ええ。おそらくもう教室にいると思いますよ。」

「ありがとうございます。」

では失礼します！」

「あ、小太郎！失礼します！」

勢い良く走って行ったツラを、私は焦って追いかけました。

「……いるかなあいつ……」

教室に着いたツラは、教室の中を見回しておりました。

「……………」

それを私も一緒になって探しました。

「……あ、いた！」

ツラが手をブンブン振ると、1人の見覚えのない男の子が笑顔で駆け寄ってきました。

「小太郎！」

小さくて、紫がかった髪の色をした男の子でした。

とてもかわいい印象を受けましたが、ただ目がとても澄んでいてきれいだと思ったのを覚えております。

「よく来たな。」

「うん！……。」

彼は元氣良くツラに返事した後、隣にいる私に気が付きました。

「…あ、こんにちは。

はじめまして、私は久坂玄雅といいます。

小太郎の友だちです。」

「……………」

彼はいきなり話し掛けられて驚いてしまったようで、サッとツラの後ろに隠れました。

「こら！ちゃんとあいさつと自己紹介くらいしろ。」

ツラに言われ、彼は少し眉をしかめました。

でも少しの沈黙の後、

「……………高杉晋助だ。

誰だお前。」

ぼそりと、そう呟きました。

…高杉晋助。

彼との出会いは、ツラの時のように決して良いものではありませんでした。

「阿呆かお前は！さっき玄雅が自己紹介しただろう！」

「うるさいっ！小太郎は黙ってる！」

「なんだと！お前が黙ってる晋助！」

「お前が黙ってる！」

「いやお前が……」

「小太郎、晋助。」

優しく響いた低い声。

「……」

2人は同時に振り返りました。

「2人とも、授業が始まりますよ。
喧嘩していないで席につきなさい。」

それと、2人して玄雅を困らせてはいけませんよ。」

松陽先生は優しく彼らの頭を撫でていて、私は少しうらやましかったのを覚えております。

「はい……申し訳ありません。」

「……。」

ヅラは本当に申し訳なさそうに言って席につき、晋助は無言のまま席につきました。

…そして授業後。

「玄雅、帰るぞ。」

「え」

いつもなら私たちは遊んだり復習したりして村塾に入り浸っているというのに、
今日は何かヅラが授業が終わった途端にそんな事を言ったので、驚いておりました。

「行くぞ早く！」

「い、いや小太郎！
あの晋助って子は…」

「今日もいい。」

お前に晋助の話もしてやりたいしな。」

「はあ…。」

私はよく分からぬままヅラに連れられて帰路につきました。

…そして、塾から家までの道にある廃業して寂れた元茶屋の長椅子に腰掛け、私たちは話してありました。

「不快だっ たらう?」

「え?」

「晋助のことだ。」

「ああ…。」

不快じゃありませんけど、少し驚きました。」

「お前は優しいな、やっぱり。」

「？」

ツラが素っ頓狂なことを言うので、私は返答に困りました。

「あいつは、俺と会おうまですっと1人だったんだ。」

「……？」

「あいつの家は立派な武士の家なんだが、奴は高杉家の養子でな。高杉家の夫婦には子どもがいなくて、前の家の末っ子だった晋助は高杉家に養子に行ったんだ。」

「でも、晋助が養子に行ったすぐ後、高杉家の夫婦に子どもが生まれ、またそれが男の子だったんだ……。」

「そんな……。」

その先の話も、大体の予想はつききました。

「そりゃあ高杉家の夫婦だって自分の子どもを跡継ぎにしたいだろう？」

「……だから晋助、今高杉家で酷く扱われてるみたいなんだ。」

当時の私は彼の境遇を思い、子どもながらに胸を痛めておりました。

「それに前の家でも晋助にはお兄さんやお姉さんがたくさんいたのに、母親が歳をとってから生まれた子だったから、こんな歳で子どもを産むなんて恥ずかしいと母親に言われたらしいのだ。」

まだ天人が幕府にまで手を出していないお堅い時代でしたから、何人も子どもを産んでおきながら、年老いてから子どもを産むことは恥ずかしいことだったんです。

…つまり、晋助はどちらの家でも望まれない子として育てられた訳です。

「そう…ですか。」

「…だから、この塾を紹介したんだ。」

「え？」

「友だちがいたら毎日が楽しいだろう？」

それに松陽先生は俺達を本当の子どもみたいに扱ってくれる。

晋助が毎日楽しく過ごせる場所はここしかない、そう思ったのだ。」

「ええ、私も晋助と頑張って打ち解けたいと思います。」

ただ、彼をもつとよく知りたいと思ったんです。

「本当か!？」

「もちろん。」

「あいつ根は良い奴だから、きっとお前とも仲良くなれるはずだ。
…よろしくな。」

「はい！」

明日からは3人で帰りましょう。」

「ああ。」

私達はにっこりと笑い合いました。

それから私はヅラを挟んで晋助と喋っている内に、晋助と仲良くな
っていききました。

元々はヅラにべったりでした、今まで受けなかった親の愛情の反

動からか、次第にお優しい松陽先生にべつたりになりました。
晋助とツラはいつも喧嘩ばかりしていたのを覚えております。
…とても微笑ましい類のものでしたが。

ただ、今でもわからないのはツラと晋助の出会いです。
彼らがどのようにして出会い、仲良くなったのかは私も聞きそびれてしまいました。

これが、晋助との出会いです。

これの更に一年半ほどして、立て続けに3人の入塾生がやってきます。

では、またお話をいたしますがお疲れになったでしょう。

少し休憩してからまた再開しようか。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
. . .

【改】第十七訓 出会いはいくつになっても良いもんだ―その2（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます！

高杉が私のイメージすぎてごめんなさい；；

自分のイメージと合わなかった方には本当に申し訳ないです。

そこは脳内補充ということをお願いします（^ー^；）

出会い編、あと3人です。

1人は名前しか分かってないあの人、もう1人は銀髪のあの人（おい
実はもう1人ちよつとだけ重要人物がいらっしやいます。
キャラ多すぎですみません><；

ではまた次回お会いしましょう！*+

【改】第十八訓 毎日同じ様なもんを食べるな栄養が偏って体に悪いからね（前

今回は歌舞伎町に戻ります。

出合い篇は次からまた再開します！

やっぱりギャグシーンはかなり苦手です（^ー^；）

シリアスしか書けない私にとって銀魂書くのは大変ですね……

下手なギャグシーンでも温かく見守ってやって下さいませm（――

ー）m

ではどうぞ！

【改】第十八訓 毎日同じ様なもんを食べるな栄養が偏って体に悪いからね

（静かだな）

気が付いたら夜になっていた。
最近では昼間でも薄暗い日が続いており、感覚が鈍っているのかもしれない。

「毎日毎日暗すぎるんだ」

梅雨でも無いのに、最近ずっと天気が悪くずぶっている。

一気にザアッと降ってくれば次の日に晴れになるだろうに、いつも黒い雲が悶々と泳いでいるだけで、降ってもポツリポツリと降る小雨である。

「いささか気持ちの悪い天気だな…」

仕事に戻る気も失せ、長い髪を揺らしながら桂は目を伏せた。

彼は松陽先生の墓へ行つた後、疲れて隠れ家のすぐそこにあるブランコさえ無い小さな公園のベンチで酒を飲んでいた。

何故か、今日はそういう気分だったのだ。

「……………」

ただ酒をちびちびと飲みながら、湿っぽい風に吹かれていた。

「そなた、桂小太郎殿とお見受けする。
…狂乱の貴公子・桂小太郎じゃろう？」

すると突然、笠を被つた髪の長い者が話しかけてきた。

「！…貴様何者だ……」
桂は自らの剣に手を掛けた。

「待て、そう早まるな。
ワシは怪しいもんじゃないき。」

「？」
ふと、色々なことに気付く。
よくよく聞くと、声が女であり、しかもいつもはあの馬鹿から発せられる土佐弁である。

「……驚かせて悪かったのう」
女は笠をパツと取った。

「！……お前は……」

「……。」

「……。」

「……。」

「……誰だっけ？」

プチンッ

「ぶぼはっ!!」

ズザザアアアッ!!!!!!

何かが切れた音の後、凄まじい鉄拳により、桂はものすごい勢いで吹っ飛んだ。

「阿呆は頭^{かしら}だけで十分じゃ。

…武神四侍ゆうのは伝説の阿呆が4人集まった集団やったがか。」

「伝説の阿呆じゃない桂だ。本当に誰だ貴様…。」

「快援隊の陸奥じゃ。

おまん坂本辰馬を知つとるじゃろつ。

その側近じゃ。」

「辰馬の…?」

桂はよく話が読めないらしい。

「話があるきい、来たぜよ。」

「話？」

「ああ、話じゃ。頭についてのな。」

陸奥は起き上がる桂を真っ直ぐに見ながら言った。

「…あの馬鹿について何を話せと？」

「馬鹿にも色々あるんじゃ。」

とにかく立ち話もなんじゃ、おまんの隠れ家にでも入れてたもうせ。

「

「…な…何を言っている！

何故身元の知れんような奴を俺の隠れ家に入れなければならないんだ！」

「…だから快援隊の者だと、頭の側近だと言っておろうが。」

「知るかそんなの、お前が辰馬の側近という証拠はお前が辰馬が阿呆だと知っていたことくらいだ。」

…なんか阿呆とか馬鹿とか言われまくってる坂本が段々不憫に思え

てくる。

「はあ…。」

まあ奴ももう来るき、それで信用してもらえろじやろつ。」

「奴？」

ザッザッザッ…

公園の土を踏み締める音。

「！」

「お、やっぱここにいたか、ヅラ。」

「ヅラじゃない桂だ。…なんだ銀時。」

そこに現れたのは、自分の幼なじみである坂田銀時。

「そう睨むなや。」

「俺もお客さんの為には全力で尽くすぜ。お金もらってんだからな。」

「客…だと？」

「ワシがおまんの居場所と一緒に探してほしいと依頼したんじゃ。そうしたら奴はこの公園にいるかもしれんと教えてもらったもんな。」

「ヅラア…こいつは本当に辰馬の部下で、陸奥ってんだ。」

「…まあ良い、銀時がそういうなら信用してやる。隠れ家もどうせもうすぐ場所を移そうと思っていたところだ。知られてもなんの損もしない。」

「…恩に着る。」

「…つちだ。来い。」

そうして3人は桂の隠れ家へ移動した。

「で、なんだ、話とは。」

3人は薄暗い部屋の真ん中に胡座をかいて座っている。

「…単刀直入に言う。」

「…おまんら、頭に何を吹き込んだ？」

「…は…？」

陸奥の突飛な質問に、2人は眉を寄せる。

「おまんら、今日吉田松陽とかいうおまんらの恩師の墓に行ったそうじゃな。」

そんな時、おまんらと頭の他にもう1人の武神四侍の話を頭にせんかったか？」

「……。」

…武神四侍。

この2人にとっては懐かしく、何とも複雑な響きの単語である。

「一度潰れた鬼兵隊を立て直し、今や最強の攘夷集団になった鬼兵隊の総督、高杉晋助。」

確か二つ名は、修羅…言ったかのう」

「…確かに奴に関する話はしたな。」

桂がぼそりと呟くように言った。

「内容を、聞かせてはくれんか？」

「…ただ、奴の近況を話した。それだけだ。」

「そうか…。」

おまんらと高杉の関係が決して良いもんでも無いことはワシもしっ

ちよる。

…鬼兵隊に関する事件を調べたんじゃが、一番最近の事件の中に桂一派と鬼兵隊が騒ぎを起こしたつちゅう記事が出てきたぜよ。しかしワシも頭もニュースや新聞の類は余り見んし、その事件は大々的に取り上げられた訳ではなかったき、当時は知らなかった。」

銀時も桂も、陸奥の聞きたい事が段々と見えてきた。

「俺たちと高杉が袂を別つた事件だな…。」

「その事件になら俺も関わってる。」

2人の表情は心なしか暗く見えた。

「…！？」

…ちよつと…待て…。今何と言ったんじゃ？
袂を…別つた…？」

陸奥にしては珍しく、額から汗を流し眉をひそめている。

「…？…ああ。」

桂が戸惑うようにして答えた。

「それを頭に話したか？」

陸奥はまた無表情に戻る。

「…ああ。」

「その他には？」

「最近高杉の動向がおかしい、と…。」

銀時と桂は陸奥の質問攻めに戸惑っている様子だ。

「そうじゃったか…。」

…高杉は何かを企んどるんか？」

「ああ。何かを企んでいるのには違いない。

その計画のデカさも内容も分からないが…。」

しかし奴らが今までにないくらい慎重なのも事実。

…俺には事が大きすぎる気がしてならん。」

「だから…か…。」

陸奥は小さくため息をつく。

「「？」「」

「まさか袂を別つまでになっていたとは思わなかったぜよ。」

陸奥は少しだけ目を伏せた。

「何だ？言っていることがよく分からのだが…」

「…今日の夜は地球に帰ってくる日でな、頭もいつものように出掛けていったんじゃが、頭はいつもなら地球に帰ってきたら歌舞伎町の風俗店へ行くんじゃ。」

「しかし、今日は違った。
京へ行きおったぜよ。」

「京…」

桂は、京、という地名に少し胸がざわつくのを感じた。

「不振に思ってな、電話の履歴を調べちよったら、一番新しい履歴に『鬼兵隊』ち載ったんじゃ。」

「『鬼兵隊…！？』」

銀時も桂も目を見開き、驚いている。

「…高杉と会っているというのか？」

「そうじゃ。」

「…辰馬が…高杉とねえ」

「ああ。」

「頭はよう言っとな。」

また4人で酒でも飲みたい、ち」

「…そうか」

「……。」

「それを伝えておきたかったんじゃ。」

それにおまんらや高杉のことも知っておきたかったしのう。

頭はほとんど自分の事を言わんき、自分で調べにや分かんぜよ。」

陸奥は微かに笑った。

「しかしわざわざ俺たちの所まで来るとは…陸奥殿は心配性だな。」

「頭に死なれては困るんでな。」

鬼兵隊は超過激派攘夷集団と聞く。

そりゃあワシが動くしかなかるうて…。

それにおまんらとは前から話をしたいと思うちよったきな。」

「前から…？」

「ああ。実はまだ話があるんじゃ。

…本当は今話すつもりなど更々なかったんじゃが、高杉の事を色々聞いて気が変わった。」

いつもキリツとしている目が、更に眼光を放つ。

「「？」「」

「おまんら、頭の家族の話は知つとるか？」

「辰馬の家族？」

銀時は首を傾げる。

「たしか…両親と姉が1人いたか？」

「ああ。母親は頭が10歳の時に、父親は20歳の時に死んだがな。」

「あああの時か…。」

やっと銀時が思い出したらしい。

「攘夷戦争中だったからな、奴の父親が亡くなったのは。あの時のことはよく覚えているよ。」

「…些か衝撃が強かったのだな。」
桂は少しだけ笑った。

「その、頭の家族の話を聞いてほしいんじゃ。」

「「？」」

「あんまりお節介だとは思わんでくれ。これでも幼なじみじゃ。」
「少しくらい心配しても罰^{はち}は当たらんろ。」

「「え」」

「…非常に衝撃的な事実を知ってしまった気がした。」

「ウ、ウソお…」

「陸奥殿ってお節介だったのか！
人はやはり見かけと中身はちがぶぼっ！」

桂の頭に銀時の拳骨が炸裂した。

「お前やっぱシリアスモード駄目だわ!!」

お前は紅桜篇で燃え尽きた!

お願いだから消えてくれ!」

「銀時冗談やめてくれ高杉がギャグパートに登場するよりは全然イケるよ俺、高杉よりは絶対上手くやれるよオールマイティーなキャラにもなれる!」

「うつぜえ!!」

オールマイティーは俺じゃボケえ!

それに奴だって多分空気はくらいは読める!...あ、やっぱ無理かな」

「...おいおまんら、今頭が頑張ってシリアスモードかましとるんじや、奴の境遇を考えれば何のこっちゃないじゃろつ。」

「...!」

すると2人はカッと目を見開いた。

「そ...そうだ...!そうだぞ銀時!

あの馬鹿が!あの馬鹿がシリアスをやっているんだ!!」

「...そ、そうだな、あの馬鹿がシリアス出来たらヅラのシリアスや

高杉のギャグの一つや二つ全然チヨロいじゃねーか…あれ、ていうか話それまくりじゃね」

「そうだぞ銀時、陸奥殿がお節介だぶぼっ!!」

銀時が、それは華麗に回し蹴りを決めた。

「…おめーらがまさか幼なじみだったとはな…。初耳だ。」

「知らんかったがな。」

「…と、というか何故家族の話の聞かなければいかんのだ?」
すると伸せていた桂がゆっくりと起き上がってきた。

「今の奴の境遇を知ってほしいんじゃ。」

まあ一番言いたい事は話を聞いてもらえればそれで分かると思うき。

「

「…?」

「まあいい、話せよ。夜は長えんだ。」

「ああ。聞かせてもらおう。」

「すまん。」

（あの日、）

そう、2人の心に深く刻み付いた、あの日。

（奴らには話しておくべきなんじゃ……。）

「覚えちゆうか？」

頭の父親が亡くなった時の事を……」

「ああ……。よく、覚えている」

「……。」

（昔話は嫌いだ…。
だけど、）

どれくらい『過去』というものが大切なのか、
彼らは身にしみて知
っているから。

T o b e c o n t i n u e d . . .

【改】第十八訓 毎日同じ様なもんを食べるな栄養が偏って体に悪いからね（後

最後までお読み頂きありがとうございました！

桂ボコボコですねww

それにしてもやっぱり土佐弁分かりません（orz

次はまた出会い篇に戻ります。

よろしければ感想などお待ちしております！

第十九訓 出会いはいくつになっても良いもんだ―その3（前書き）

出会い篇に舞い戻って来ました！

なんか最近自分の文章力の無さに泣けてきます。

銀魂を書いていると尚更私の文章力と想像力の無さが際立ちますね（泣）

…次はギャグシーンを書ける！…かもしれない運転。

第十九訓 出会いはいくつになっても良いもんだ―その3

さあ、休憩はもうそろそろ終わりにして、次の出会いについてお話ししよう。

晋助が入塾して、早一年以上の月日が流れておりました。

私も彼と仲良くなり、よく3人で遊んでいたものです。

そんなある日、また新たに入塾者が1人やってきます。

「おい、あの子…新しく入って来た子じゃねえか？」

「本当だ、初めて見た顔だな。」

「話し掛けてみましょうか？」

授業が終わった後、私達は柱の陰に隠れて教室を覗いておりました。

教室の真ん中には、1人の男の子が座っています。

その子はヅラよりも真っ黒な髪の毛で瞳も黒々としており、目の下には濃い隈があり、がたいが良く、服装は少し質素に見えました。更によく見ると、右手には包帯のようなものがぐるぐると巻いてあります。

「すみません、あなたは今日から入塾して来た人ですか？」

私は1人駆け寄って、彼に話し掛けました。

「あ…うん。」

そうその子が言った途端、ヅラと晋助も駆け寄って来ました。

「やっぱりそうなんですか、よろしくお願いします。」

「俺もよろしく。」

「俺もよろしくな。」

「…うん！俺もよろしく！」

その子は話し掛けられたのがよほど嬉しかったのか、白い歯を見せニコツと笑いました。

彼は髪が少し長く、前髪を全部上げて、髪は結わずに下ろしておりました。

「おや、皆さん早速彼を見つけましたか。」

すると突然、後ろから私達の大好きな声が聞こえました。

「あ、松陽先生！」

やはり晋助が一番に満面の笑みで振り向きます。

「お互いに自己紹介はしたんですか？」

そう松陽先生が晋助の頭を撫でながら言いました。

「あ、まだです。」

「そうですね、ならあなた達が先に自己紹介してあげなさい。」

「はい！」

俺は高杉晋助、6歳だ。」

「私は久坂玄雅といいます。
8歳です。」

「俺は桂小太郎だ。
7歳になる。」

「俺は入江八二、8歳だ。
よろしくな。」

そう、彼が入江八二。
彼は人懐っこく、とても気っ風の良い人柄です。

「彼は最近すごく遠い所からこの萩に引っ越して来た子なんです。
ここいらの事もよく分からないですから、案内してあげて下さいね。」

「「「はい！」」」

そうして、早速私達は萩の町へ繰り出しました。

「なあ、八二はそんなに遠くから越して来たのか？」

「ああ、飛行機に乗ってきたんだ。」

「マジでか！すげーな！」

飛行機って天人が持ってきたあの機械からくりだろ？」

「うん、俺も初めて乗ったからすげえビックリしたぜ。」

「じゃあ八二、その目の下の黒いのは何なんだ？あんまり寝てないのか？」

先ほども言った通り、八二にはとても濃い隈くまがありました。それはまるで化粧のようにも見えます。

「これは生まれつきだ。」

でも前に俺が住んでた所には隈くまがある人いっぱいいたぜ。」

「へえ。じゃあ遺伝か。」

最近は少ないですが、昔は親戚が地元に集まって住む事が結構多かったです。

「じゃあその右手の包帯は？」

「えっとこれは…」

このように八二は私達からどんどん来る質問を一つ一つ丁寧に答えていきました。

八二は本当に人なつこく、まるで昔からの知己のように思えて、楽しかったのを覚えております。

その後、八二は私達と気が合い、彼もよく一緒に遊ぶようになりました。

特に私とは本当に気が合って、いつも一緒にいるくらいでした。剣の腕も私と八二では均衡していましたね。

「じゃあみな、また明日！」

そうして私達は一通り萩の町を散策した後、各々の家に帰りました。

これが、入江八二との出会いです。

一見普通の出会いに見えますが、
私はこの20年程も後になって
この出会いの中に彼の運命がどれほど重いものであったのかを示す
ヒントがたくさんあったことや、
この出会い自体がどれほど運命的なものだったのかを知ることにな
ります。

…そして、今思えば何故か晋助も知っていたようです。
入江八二の、その残酷とも言える運命を…。

しかし、八二は強かった。
…そう、強かったんです。

…彼、入江八二のお話はこれで終わりにしましょう。

それでは、遂にあの男の話をする時がきましたね…。

そう、攘夷戦争の後期から末期にかけて、最も恐れられ、最も活躍し、今や伝説となっている男です。

…ではお話ししましょう。

桂や高杉と、“彼”の出会いを。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第十九訓 出会いはいくつになっても良いもんだ―その3（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました！

次は遂に…です*+（^m^）

【改】第二十訓 出会いはいくつになっても良いもんだ―その4

「くおおおら!!!!!!晋助え!八二い!

隠れてないで出てこい!

だから貴様らは頭パーなんだ!!」

「晋助!八二!

昨日授業が終わったら復習すると言っておったのはどのどいつですか!!」

八二が入って来て、もうすぐ2ヶ月が経とうとしていました。

私とヅラが何故こうやって叫びまくっているかというと...

「クソ!あいつらどこにいきゃあがったんだ...」

出てきたら絶対シメてやる...」

「小太郎、キャラ違くない?」

「そつちこそ」

晋助と八二が授業後に授業の復習をすると私達に約束していたにも関わらず、どこかに隠れておるのです。

「全く、奴らには困ったものだ…。
隠れている暇があれば勉強をしる勉強を！」

ヅラは村塾の生徒の中でも、一番頭の良い生徒でした。

…一応私も御殿医を目指しておりましたから、晋助や八二よりは勉強ができましたがね。

「私達がこれだけ探しても見つからないこの能力…勉強の方に生かして欲しいですね。」

「全くだ」

そうして私達はキョロキョロと塾中を探し回っておりまして。

「一周回ったな…。」

「もう放っておいて帰りましょうか…。」

私達は最初に探し始めた松陽先生の部屋の前まで来ておりました。

……っ

「……!? 誰だ!」

「! ……ど、どうしたんですか小太郎……?」

「いや、今誰か……」

「! …?」

急にヅラが振り向いたので、私もそれに従い振り返りました。

そして、そこには小さく、ひょろりとした少年がいたのです。

「……………」。

「……っ」

彼を目にした瞬間、私は息を吞みました。

「……。」

私達と年の変わらないくらいの男の子でした。
ただ、その風貌は全く子どものそれではなかったんです。

白っぽいボロボロの着物に、刀。

しかし一番私達の目を引いたのは、その白銀の髪、赤い目、その小さい体から発せられる雰囲気、オーラ。

「…お、おい、その刀は松陽先生のものではないか」

さすがヅラ、と云った所でしょうか。彼は声を振り絞りました。

「……………」

しかし、彼は少し眉間にシワを寄せただけで、ピクリとも動きません。

「貴様何者だ？」

ツラは負けじと彼に話し掛けます。

「…………知らない」

その子は困惑したような表情を浮かべ、彼は彼で声を振り絞っているように思えました。

「知らないって……」

ツラも何も言えなくなってしまいました。

「……………」

「……？」

彼は何も言わず、スウッと刀を鞘から抜きました。

余りに綺麗に刀を抜くので見入ってしまいました。が、直後、それは恐怖に変わります。

「…………ふた、り」

彼は刃先で私達の後ろの柱を指しておりました。

「……え」

（まさか）

「……チッ、何でわかんだよ」

「……。」

その柱の陰には晋助と八二が隠れていたんです。
きっと、私達が晋助たちを探し回っている時も後ろから私達をつけていたんでしょう。

「誰だよお前……」

気持ち悪い髪の色と目の色しやがって」

子どもの晋助がそういうのも無理はなかったのかもしれない。

なんせ彼は、白銀色の髪のに赤い瞳。

人間とは思えないような風貌でしたから。

そう言われた小さな子は、目を少し見開き、
「やっぱりお前も」
と呟くように言いました。

すると彼は刀を構えました。

ぞくり、と背筋に悪寒が走ります。

初めて味わう、この究極に張り詰めた空気。

…私は今にも泣き出しそうになっておりました。

「待ちなさい!!」

「「「「「「「「「「「「」

どっしりと、体の芯にまで響く、その声。

「松陽…先生…」

今までこんな松陽先生の声は聞いたことがありませんでした。
いつもの丸く包み込むような優しい声ではなく、鋭く厳しい声。

「私があげたその刀、何の為に使えと言いましたか？」

松陽先生の声色が少し戻りました。

「……………」

しかし、彼は黙ったままです。

「その刀で自らだけを護り、他人を攻撃することは許しません。
それが出来ないなら刀は^{それ}何の意味も成さない。」

「……………」

それでもやはり、彼はだんまりでした。

「そうですね……………やはりお前には仲間というものが必要なようです。」

…小太郎、晋助、玄雅、八二。

驚かせてすみませんでした。

彼は、坂田銀時くんといいます。

小太郎と同じ年です。」

（銀…）

坂田銀時。

この恐ろしい出会いは、強烈な印象があつたためか本当にはつきりと覚えております。

「なんだなかまって」

「仲間、です銀時。」

仲間とは、心から護りたいと思える存在です」
松陽先生はにっこりと優しく微笑みました。

「心から護りたい…？」

「その内わかりますよ。」

それより銀時、彼らによろしく、とお願いの言葉を言いなさい。」

「…よろしく…」

「「「「「……」「」「」

私たちは、返事をする事がどうしてもできませんでした。

恐怖と、驚きです。

ろくに私たちに口をきかなかったのに、松陽先生とは言葉数が少ないながらも普通に話していたこと、そして何より、先ほどの恐ろしさ。

「…4人共、あなた達もよろしく、とお願いしなさい。」

「「「「「よろしく」「」「」

松陽先生に言われて何とか言葉を発しました。

「銀時、その刀は私が預かっておきます。

今のあなたには必要なものではありませんからね。」

松陽先生は銀時に手を差し出し、銀時はそれに従って刀を松陽先生に手渡しました。

「ではみなさん、早くお友達になるんですよ。」

「……はい……」

松陽先生は微笑を浮かべ、去っていきました。

「おい、お前」

不意に、晋助が銀時に話し掛けました。

「……………」

銀時は、やはり何も言いません。

「てめー、強いかな？」

晋助もこの状況で銀時に話しかけることができるのはさすががとしか
言いようがありませんね。

「……………知らない……………」

銀時は眉をしかめ、少し後ずさりしました。

「…怖いのか？俺たちが」

ヅラが不思議そうに銀時を見つめます。

確かに、そう見えました。何かに怯えているような。困惑している
ような。

そんな銀時を見て、段々恐怖心は薄れていきました。

「怖くない」

銀時は途端に無表情になり、感情が読めません。

「なあ銀時。もしお前が強いなら、俺と手合わせしろ」
晋助はズカズカと銀時に近寄り、そう言い寄りました。

「！！」

銀時は非常に驚いたらしく、ビクツと肩を震わせます。

「晋助！全くお前という奴は！強いかわらんと銀時は言っているだろう。それに急に近寄って驚かせるんじゃない！」

ヅラの順応性には凄まじいものがありました。既に銀時の性質を見抜いておったのです。

「うつせーよ小太郎！」

晋助はぶくつとむくれています。

「……銀時？」

私は銀時に話し掛けました。

銀時は本当に驚いているらしく、目を見開き、口をポカンと開けていたのです。

「ぎん、とき」

銀時はそう、ポツリと呟きました

「お前の名前なんだろう？」

ヅラが不思議そうに銀時に聞きます。

「名、前」

「あ、そうだ銀時。俺の名を言っていなかったな！俺は桂小太郎だ」
ヅラはにっこりと銀時に笑いかけました。

「ヅラ小太郎……」

「……………」。

少しの沈黙の後、

「ぶっ！」

「ぎやはははは！
ツラだって！ツラ小太郎だって！
ぎやはははは！」

晋助と八二の大爆笑によって、その場の雰囲気が一気に変わりました。

「…………貴様らっ！っ！！」

この和やかな空気をぶち壊しおって！！
どうしてくれるんだ阿呆どもが！！！！！」

もちろんヅラは顔を真っ赤にして怒っております。

「ヅラ…？ヅラ。ヅラ！」

銀時の表情が段々と柔らかくなっていくのを感じました。

「銀時貴様あゝっ！！」

ヅラじゃない桂だ！！！」

ヅラは銀時に詰め寄ります。

「何？ヅラ」

しかし銀時はもう肩を震わせることはありませんでした。

「ヅラじゃない桂だっ！！！」

この今では定番ともいえるヅラの口癖は、このひょんなことから生まれました。

グ
〜
…

「
！」

突然銀時のお腹から、切ない音がはつきりと聞こえました。

「
…フン、腹が減ったのか？」

ツラが口を尖らせて聞きます。

「……減った」

銀時もまた口を尖らせていました。

「これでも食べ。」

ヅラが懷から出したのは、甘い飴でした。

「ただし！絶対にヅラとは二度と呼ぶなよ。」

フンツと鼻をならし、銀時に飴を押し付けるように手渡しました。

「なんだ、これ」

銀時はきょとんとして聞きます。

「…お前、飴も知らないのか？」

「あめ…？」

「とても甘くて、口の中で嘗める食べ物だ。」

「……。」

銀時はさほど興味も無さそうに、飴を口の中に放り込みました。

「……………」

「?…どうした銀時」

銀時がすごい形相でうつむいているものだから、私たちは少し心配しました。

「…これ…」

「え？」

「なんだこれ…」

銀時は目をただ見開いていました。

「美味しくなかったのか？」

そう、ツラが心配そうに聞きます。

「甘い…」

銀時の目はキラキラと輝いておりました。

「…よっぽど甘い物が好きなのだな。」

そう、このツラがあげた飴から銀時の甘い物好きは始まったんです。

「ま…またくれ、ツラ。」

銀時は少し頬を赤らめて言いました。

「だからヅラじゃない桂だ！
貴様がヅラと呼ぶのをやめたらやろつ。」

「わかった、ヅラ」

「だからヅラじゃない桂だっ！！」

「銀時、だったよな。
俺の名は高杉晋助だ。」

今度の剣術の授業の時、必ず手合わせしてくれ」
晋助もまた銀時に近づき、まっすぐな目をして言いました。

「てあわせ？」

銀時はまた不思議そうな表情をしています。

「竹刀っていう竹の刀で戦うんだよ」

「それが手合わせ、といいます」

私と八二も銀時に近寄ります。

「…うん…わかった」

銀時はよくわかっていないようでしたが、ぶっきらぼうにそう答えました。

「それと、これ。」

晋助は、懷からヅラのものとは装飾や色が少し違う飴を取り出しました。

「！」

「いちごミルク味だ。」

友だちの証に、やる。絶対ヅラのよりうめーぞ。…あ。」
ヅラ、というあだ名はそれほど呼びやすかった、ということですね。

「晋助……！！お前までっ！！」
しかもなんだいちごミルク味って！」

「だってヅラの方が呼びやすいし。
いちごミルク味は俺の弟から奪ってきた。」

「またお前の母上にしかられるぞ。」

「知るかあんな女」

「つたく…」

母に愛情を注がれなかった晋助は、
度々このようなことがありました。

「晋、助のヅラのよりうめえ」

（（食べるの早っ））

私と八二は心の中でツッコミをいれておりました。

「ヅラじゃない桂だ！！何だと銀時っ！
さっき食ったのを今すぐ出せ！」

「まあまあッ… いったいや小太郎！

私は久坂玄雅と云います。

私も友だちの印の、飴。どうぞ銀時。」

「あ、みんな先駆けすんじゃねえよ！
俺は入江八二！俺の飴もやるよ。」

私と八二も銀時に飴を差し出しました。

「おう……」

銀時は目をキラキラさせて、私たちに何か言いたげにこちらを見て
おります。

「銀時、こういう時は、『ありがとう』と言っただぞ。」
ツラが銀時の心を読んだように、銀時に話し掛けました。

「ああ……、……ありがとう……」

銀時は、この時ほんの少しだけ笑います。
この笑顔が、銀時の初めて私たちに見せた笑顔でした。

これが、銀時との出会いです。

子どもとは順応性が高いのか、怖いもので、恐怖心など忘れてすぐ
に友だちになり、仲良くなりました。

銀時も松陽先生の元、社会の常識や、私たちと接することで、仲間
というものを知ります。

そして、銀時の真の才能が芽生えるのもそう遅くはありませんでし

た。

こうして、武神四侍のうち3人が出会ったのです。

彼らの剣の實力は均衡しており、村塾の中でもずば抜けておりました。

私と八二など、全く刃がたたない程にね。

では次は、いや、おまけのような話なんですが…

少しだけ、面白い出会いの話をして、村塾の出会いの話は終わりにしましょう。

それは松陽先生の唯一の、兄妹のお話です。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

第二十一訓 おまけとか言っという、結構重要だったりする（前書き）

タイトル通りです（笑）

第二十一訓 おまけとか言っというて、結構重要だったりする

さて、やっと最後の村塾での出会いですね。

…まあ、少々私的なことにはなりますが、聞いていただけると幸いです。

「あーあー…、授業疲れたあゝ」

「銀時、あんた寝ていただけでしょう…」

銀時が入塾して、早1年が経とうとしていた頃。

「今日勉強ばつかでほんとつまんねえや。
剣術の授業無い日はだりいなあ……」
八二も銀時同様、勉強が苦手でした。

この日の授業がすべて終わり、
私たちは門に向かっておりました。

「あ、あれ、松陽先生じゃねえか？」
松陽先生大好きな晋助が、パツと笑顔になります。

「うむ……。しかし、一緒にいる、あの人は一体誰だ？」

ヅラの言った通り、松陽先生と女の子が一緒にいます。
今思えば女の子ですが、当時はお姉さんに見えました。

女の子は松陽先生と同じ髪の色をしており、
髪をポニーテールに結ってありました。

私たちは自然に足を止め、
2人をジッと見つめていました。

しかし2人は私たちの存在に気が付いておらんようです。

「お前も、ここで学びなさい。

そうしなければ私はお前の面倒を見きれません。」

松陽先生の声は、いつもより少し低かったのを覚えております。

「私は1人で生きて行ける。

兄上に迷惑はおかけしません！

母上が亡くなった今、生活費は私のものだけでよくなったんだ。」

「文！^{あや}いい加減にきなさい。

お前にはこの村塾の後継者としてここで学び、運営を手伝ってほしいんです。

いいや、後継者になりたくないならいいんです。

ここで学び、夢を見つけるだけでもいい。」

「でも兄上…。」

ここにいる子たちはみんな私より年下だし…。」

「大丈夫、みんな良い子ばかりですよ。

しかもお前より剣術の腕がたつ子も数人いますしね。」

「嘘です！

私より腕のたつ子なんて…。」

「「「ここにいるぜ（ぞ）」」」

「「「！」」」

「あ…あなた達…

聞いていたのですか…。」

松陽先生は、大層驚いた様子でした。

そう、声を発したのは、銀時、ヅラ、晋助でした。

「も…申し訳ありません！」

盗み聞きするつもりはなかったんです、先生…」

「もっ申し訳ありません！」

私と八二は必死に謝ります。

「…いや、丁度良い。」

「「え？」」

ポツリ、と言った松陽先生の言葉に、ただポカンとするしかありませんでした。

「紹介しよう。」

…この子は、私の年の離れた妹です。

明日からこの村塾で共に学びます。

あなた達よりも少しお姉さんですが、

仲良くしてあげて下さいね。」

松陽先生はにっこり笑いました。

「あ…兄上!!」

勝手に決めつけるのは…」

「文。」

松陽先生はジッと、その、『文』を見つめます。

「っ!」

「ただ一人の兄に、気など遣わなくていい。
頼りなさい。」

「……………」

文は俯いたまま、唇を噛んでおりました。

「さあ文。この子たちに挨拶しなさい。」

「…名は吉田文。よしだあや
年は14だ…。」

松陽先生と一回り以上年が離れていたことにとても驚きました。

文が名を言った後、松陽先生が私たちにも挨拶をするように視線を向けます。

「あ…、えっと、坂田銀時。
年は9。」

「桂小太郎だ。年は同じく9歳。
よろしくな。」

「…高杉晋助、8歳。」

「久坂玄雅です。年は10歳になります。
仲良くしましょうね。」

「俺は入江八二、10歳だ。
よろしくな！」

そこから私たちは仲良くなっていき、

彼女が相当な男勝りな女の子だと知ることになります。

剣術に長けており、私や八二と十分にやり合えるほどでした。
それから色々お話したいのは山々なんですが…

これ以上話してしまうと、のろけになってしまいそうなので。

「は？」

黙って話を聞いていた山崎は、間の抜けた声を出した。

「そうですね…」

あなたにも紹介しましょう。

文！こっちに来なさい！」

玄雅がいきなり大声を出した。

『はい！ちょっと待ってねー』

すると奥の方から、女性の声が聞こえる。

「どうしたの？玄雅さん。」

すると扉がパツと開き、中から、背の高い灰色の長い髪をした女性が出てきた。

大層顔立ちが整っている。

「文、この方にご挨拶を。」

「?…は、はあ…」

私は久坂文。玄雅の妻です。」

文は、にっこりと笑った。

…さっき話に聞いた仏頂面とは全く話が違う。

「妻の……文さん？」

山崎は頭がこんがらがって、なんだかよくわからない。

「まあそういうことです。

…ところで、少し疲れたでしょう。

頭を整理する時間と、体力回復の時間を作りませんか？

文に今までのことと、

これから話すことについての

説明の時間をいただきたいんですよ。」

「…はあ。」山崎はよくわからないまま返事をする。

「少し外に出て来ます。

山崎さん、少しゆっくり休んでいてください。

…文、出ましょう。」

「え…ちょ、玄雅さん!？」

玄雅は文の腕を掴み、強引に外に連れ出した。

…それから数十分後。

「山崎さん。」

「！…お話は終わりましたか？」

玄雅と、先ほどとは一変して、神妙な面持ちの文が院内に戻って来た。

「真選組の、山崎さん…だったね。」
文が山崎の前に座った。

「は…はい…。」

「事情は全てわかった。
次からは私が話そう。」

「え…」

「文の方が詳しいんです。
…あの時の事についてはね。」

「あの時…？」

そう。

兄上が、お亡くなりになられた時のお話だよ。

…全てが変わってしまった、あの日さ。

文の眼光の鋭さに、ただ息を呑むしかない山崎だった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

第二十二訓 親のありがたみがわかるのは大抵がちゃんとした大人になってから

当時、幕府は攘夷を掲げる思想家を抑制するのに躍起^{やつき}になつておりました。

天人が襲来した初頭、幕府は強気な姿勢を見せておりましたが、それからそう時間も経たないうちに幕府は開国を余儀無くされたんです。

…それだけ天人の力は強大だった。

そんな天人が地球上に増え、やがて江戸にターミナルを作る計画が上げられます。

それに伴つて、思想家や攘夷志士たちの動きが急激に激しくなつていったんですよ。

そして攘夷戦争が始まり、戦乱の世が始まってしまったんです。

…そしてやはり、

松陽先生も、その思想家の一人だった。

よく私たちに、

「江戸の美しい街と、この自然と、
武士の魂は絶対に失ってはいけない」
と言っておられたものです。

先生は若く、頭もよく、強かった。

他の思想家や攘夷志士が教えを乞いにくることも少なくなかった
んですよ。

松陽先生はどんな人でも受け入れた。

…そんな先生は、
幕府に目を付けられてしまったんです。

先生がお亡くなりになる少し前から、
私たちは子供ながらに感じ取っておりました。

…先生が攘夷に関わり、
その身が危険に晒されておることを。

攘夷戦争が激しくなってきたこともあり、
ずっと緊張感が漂っている、
なんともそわそわした状態が続いておったのです。

…そして、ついにその日が来てしまったんです。

彼らには…

いや、私たちには兄上が、松陽先生が全てだったのさ。

兄上がお亡くなりになったあの日…

あれほど悲しみと怒りに

満ち溢れていた日は

それまでにも、

きつとこれからも無いだろうよ…。

*
*
*

私たちが出会ってから、
約4年が経っていた。

14歳だった私は18歳になって、
銀時は12歳になっていた。

…そして、あの日の夜。

あの日は、

いつにも増して静かな夜だったな…。

「銀時…まだ起きてたの？」

「お前こそ」

「兄上に叱られるよ」

「…お前こそ」

私は銀時に冷たく返事をされて、
少しイラついた。

…まあいつものことだったけど。

「あんたねえ、」

子どものクセに夜更かししてんじゃないよ。」

「…ああわかったわかった」

私たちは教室の廊下にある縁側にいた。
縁側は丁度兄上の部屋の前だったんだ。

何故かその夜は眠れなくて、
私も銀時もすでに眠る時間だというのに
まだ少しも眠くはなかった。

「胸がざわつくんだ…。
眠れねえんだよ、どうしても。」

「…ああ。
私も…眠れない。」

銀時はどうも、年下に見えなかった。
6歳も離れているくせに、
すごく大人びていたと思う。

「「……………」」

私たち2人とも、ずっと何も喋らなかった。

……しかし。

「おい文……」

「なんだ？」

「人の気配が……たくさん……」

「え……」

「文！銀時！」

兄上が突然部屋から飛び出してきた。

「先生！」

「兄上！」

この時は胸がざわついて、
不安で不安で仕方がなかったな…。

「…大変なことになりそうです。

…まさかここまで早く現れるとは…。」

私でさえ兄上のここまで追い詰められた顔を見たのは初めてだった。

「どうしたってんだ先生…。」

「銀時、これはあなたの教本です。

そしてこれは文の教本。

そして…この手紙…

これは文…あなたに任せよう…。

これをあなたに託す時が来てしまったようです。」

兄上は私に『手紙』を押し付けた。

「そ…そんな兄上…！」

「なんだよ…！どうしたってんだ！」

「静かにしなさい。」

銀時、お前なら気配を感じ取っているでしょう？

…裏口へ、行きなさい。」

この時は、私にでもわかった。

異様な空気感。

…人間的な感覚がほとんど感じられない。

「先生…あんだ…」

死ぬつもりか？

「死ぬつもりなんてありませんよ。
私は最後まで戦います。」

兄上は銀時の心を読んだかのように言った。

「最後までって…」

この時、はつきり言ってあまり状況把握ができていなかった。
しかし、何故か危険だということだけは理解できた。

「文…、あなたには、言いましたね。

先日伝えた私の言葉…覚えていますか？」

「覚えてるよ…！でも…兄上…！」

「文。」

「！」

「あなたに任せました。」

「！！……ちょっと……嫌だ兄……」

「銀時。」

兄上は、私の言葉を遮るように銀時に話しかけた。

「！！……なんだ」

あの銀時が、冷や汗をだらだらとかいている。

「これから、小太郎や晋助たちと仲良くすること。
毎日ちゃんと食べること。

そして、何としてでも生きること。」

「……せんせ……」

「この剣の使い道を決めるのは、銀時、君です。

これはあなたのものですからね。」

兄上は自分の部屋から刀を取り出し、
銀時に渡した。

「これは、殺めることも傷つけることも、護ることもできる。」

……銀時。何が何でも、生きるんですよ。」

「せ……んせい……!」

「早く! 行きなさい!」

気配は私にでもわかるくらいに近づいていた。

「せ……先生も一緒に行くんだ!」
「……そうだよ兄上!」

「私は絶対に君たちとは行けないんです。
…絶対に…。」

早く……早く行きなさい!!」

「それなら俺も戦う!」

「あなた達の叶うような相手ではありません!
言うことを聞きなさい!!」

兄上は、これまでにないほどの剣幕で叫んだ。

そして焦燥感と絶望感、哀愁感……
いろんなものがごちゃ混ぜになって、
涙がこみ上げてくる。
私も銀時も、だ。

「また…会えるだろ…？」

…兄上はただ、にっこりと微笑んだ。

「……っ」

その笑みを私たちは肯定だと無理やり受け止め、
兄上を見つめながら、裏口へ向かった。

そしてそれが、

吉田松陽の最後の姿だったのさ。

「うあ…ぎ…銀時い…」

「泣くな文っ…」

お前ほんとに18歳かよ!!」

泣きたいのはこっちだ、と言わんばかりに12歳の銀時に攻め立てられる。

「じめん…」

「……どうする…どうすればいい…！」

「銀時…」

「…先生を…先生を死なせる訳にはいかねえ」

「ヅラと晋助を呼ぼう！」

2人なら強いじゃないか！

あ…玄雅と八二の家も通るから2人も呼べば…」

「6人いりゃあ何とかなるか…？
行くぞ文…！」

そう言って私たちは走り出した。

ただ、無言で走った。

私も銀時も自分の無力さに悔しくて仕方がなかった。

…もっと、強かったら。

あそこに残って、

松陽先生と共に戦い、護ることができたかもしれない。

とにかくその時は必死で走った。

…その時村塾がどうなっているのかも知らずに、な。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

第二十三訓 卒業式に写真を撮るなら普段から撮っとけ（前書き）

ツラと高杉はエスパーか!!

…というツツコミは受け付けません（え

ご感想ありがとうございます^^

第二十三訓 卒業式に写真を撮るなら普段から撮っとけ

運命の夜。

何も知らない桂小太郎は、
広い自室にいた。

「……………」

（先生…）

最近、ずっと緊張状態が続いていることはもちろん、その原因が何
によるものか、彼にはよくわかっていた。

…恐らく、松下村塾内で一番認知していただろう。

緊張状態になり始めてから、嫌な妄想ばかりが頭をよぎり、そのた
びに必死にかき消した。

（それは…みんなも一緒だろう）

銀時も、高杉も、たまにそんな素振りを見せていた。
桂はそれを見逃しはしなかった。

しかし、そんな妄想がよぎっても、心のどこかしらでは『そんなことは有り得ない』と思っているのも事実。

何故なら、あの偉大な男に限って。

あの先生が、そんなことになるはずがないという確信が確かにある。

…桂は、彼にもらった教本を眺めた。

（…先生に教えてもらったことがすべてこれにある）

教本には使い込まれた跡がある。

少なくとも銀時や高杉よりは年季が入っているはずだ。

（俺がこれをもらったのは、確か…6年も前だったか）

（考えてみると、俺は人生の半分をあそこで過ごしたんだな…。
まあ…まだまだ短い人生だが）

そんな年相応ではないことを考えつつ、桂は村塾での6年間のことを思い返していた。

あそこは、俺の居場所だ。

松陽先生がみんなの居場所なんだ…。

だから、だから…

どうか俺たちから松陽先生を取らないでくれ…

何故か、そんな風に思った。

（眠れねえ）

やはり、高杉少年も起きていた。
目が冴えて眠れない。

「先生……」

高杉は最近しばしば眠れないことがあった。
やはり、心配事があるせいだろうか。

「そんなこと、あるはず無いのに」

（先生、先生がいなくなったら俺はまたひとりぼっちだ）

小さい頃から、養母父から高杉への扱いは未だ変わらない。
養父母はただただ、自分たちの実子を可愛がるばかりである。
自分がそんな状況になっても、実家は『戻ってこい』なんて言葉を
掛けてくれるはずも無く、寧ろ何の反応も見せず、見て見ぬ振りを
するばかりだ。

でも、村塾があつたから毎日が楽しかった。

親の愛情が無くても、先生と仲間がいれば平気だった。
いつしか、家の事も忘れられるほどにまでなった。

みんなの優しさが、身にしみて嬉しかった。

そんな境遇の高杉だからこそ、そこまで幸せに思えたのだ。

「先生は、負けないだろ？」

俺の居場所を、取らないでくれ……

そんな2人に残酷な宣告がなされるのは、そのすぐ後の話である。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

第二十四訓 親のありがたみがわかるのは大抵がちゃんとした大人になってから

なんか整理しきれなかった感と無理矢理感があります…（＜―＞）
まだまだ修行が足りないですね…；；

これから頑張りますっ

第二十四訓 親のありがたみがわかるのは大抵がちゃんとした大人になってから

「ツラー！！ツラー！！」

私と銀時は桂邸の前にいた。

さすが桂家、と言わんばかりの門構えだ。

なんせ、由緒正しい御殿医の家系だからな。

その大きな扉をガンガンと2人で必死に叩く。

この広いお屋敷に声が行き渡るとは到底思えなかったが、その時の私たちはそんなことを考える余裕さえなかった。

「ツラ！桂！早く出てきてよ！！」

兄上があ…っ…」

…私たちは必死でヅラを呼んだ。

『ギイイイ…』

そんな必死の思いが届いたのか、
その重厚な扉はゆっくりと開いた。

「なんだお前たちは!?

こんな夜遅くに何の用だ!!

どうやら使用人の男らしい。」

「ここの息子の桂小太郎の友だちだ!
奴に合わせる!!

「何?

お前みたいなのが御子息の友人だと!?
使用人の男は全く信用していない。」

「バカ、お前じゃ駄目だ銀時。」

…申し訳ありません。弟が無礼を働きました。しかし、私共は本当に小太郎君の友人なのです。

私は松下村塾の吉田松陽の妹、文と申します。今緊急事態なのです。どうか、小太郎君にお会いできないでしょうか…？」

「あの吉田先生の！」

わかった、すぐに連れてこよう。」

男は納得し、屋敷の中へ消えていった。

「…あんな堅つ苦しい言葉どこで覚えたんだ」

「黙りな。」

今はそんなことを行っている場合じゃなかった。

やがて、ヅラが屋敷から駆け足で出てきた。

「ッラ！」

「ッラじゃない桂だ！」

ッラは起きてすぐなのか、髪をおろしていた。

「松陽先生が…！危ないんだ…！」

「は…？」

私たちはざっくりと状況を説明した。

「きっと、幕府の連中だ…！」

松陽先生は…何も悪いことなんざしてねえのに…！」

「銀時！ッラ！泣いてる暇なんか無いんだ…！早く行くぞ…！」

「さっきまでビービー泣いてたお前が言っな！」

「行こう…！」

私たちは晋助、玄雅、八二の家にも押しかけ、
すぐに村塾へ走った。

「先生……
松陽先生……！！」

一番焦っていたのは晋助だった。

「泣くな…」

「うつせえー!!」

「…!!」

突然玄雅が、ビクリと体を振るわせた。

「どうした玄雅!？」

私が叫ぶように聞くと…

「火の…」

火の匂いが…します!」

「……」

全員の頭に悪い想像だけがよぎった。

「あつち…光ってる…」

八二が息切れ切れになりながら声を上げる。

見ると、村塾の方向が妙に明るかった。

「……っ」

「あつ…銀時!!」

銀時が、有り得ないくらいの速さで駆け出した。

銀時は私たちからどんどん遠ざかっていく。

「はあ……ああ……ああ……」

もはや言葉も出ない。

「俺達…場所が…家が…」

炎は轟々と、音を立てて、

まるで空に吸い込まれているかのように立ち上る。

「先生……」

…せんせええええ！！！！！！！！！！！！」

「……」

それはまるで怒り狂う獣のようだった。

「……………」

私たちがそこに着いても、誰も何も言わなかった。
というか、言えなかった。

子どもだった私たちには衝撃が強すぎたんだ。

…ただ、地面にへたって涙を流すだけ。

村塾が燃え尽きるまで、まるで時間が止まったみたいは何も起こらない、喋らない。

絶望感に、さいなまれるだけだった。

*
*
*

「……………」

山崎は、言葉が出なかった。

「そのちよつと後で先生は幕府の連中に殺されたことを知りました。火を放ったのも同じ連中だ。どうも書物と自分たちの痕跡を残したくなかったようですね。」

「その後、私は玄雅さんの家に20歳になるまで居候させてもらったの。」

ただ銀時は…一人きりで生活していた。桂家から誘いはあったんだけど、あいつ断ったのさ。

ヅラはヅラで昔っから真面目で勤勉だったけど、それからは人が狂ったように剣術の修行を始めた。

晋助もヅラとそう大差なかったね。

みんな、目の色が変わったんだ。

それは恐ろしかった…。」

文は無表情で言うが、その瞳の奥は悲しみに満ち溢れていた。

「それから6年経ったある日、攘夷戦争での攘夷軍が萩を通って、萩で休んでおったことがあるんです。そこで私たちはある男に出会った。」

「！……まさかそれが貿易会社の社長の……」
山崎はすぐに察した。

「ええ、そう。
彼と出会ったことで私たちは攘夷戦争に参加することになったんですよ。」

（伯仲の二神…龍虎…）

坂本との出会い。

それは山崎の想像を遥かに超えるほど、
運命的なものだったのである。

T o b e c o n t i n u e . . .

第二十四訓 親のありがたみがわかるのは大抵がちゃんとした大人になってから

次はまた場面変わります。

話が停滞気味で申し訳ありません（；|；）
これからどんどん進んでいけると思います。

第二十五訓 性格を見た目で判断するな（前書き）

放置しすぎて本当に

申し訳ありません（；|；）

事情があり、

更新が難しい状況ですが、

できる限り続けていくつもりです。

たくさんのお気に入り登録、

本当にありがとうございます！

これからも精進致しますので、

どうぞよろしく願います。

では本編へどうぞ！

第二十五訓 性格を見た目で判断するな

一方、京では
：

「それからわしとおまんが出会ったのは：確かおまんが17、わしが19の時やったが。」

「：忘れたな」

未だに坂本と高杉、という何とも異様な組み合わせが酒を飲み交わしていた。

「いや確かにそうじゃ。あの時はまっこと驚いたき、よう覚えとる。おまんらの目と、闘争心にわしや大層興味を持ったんじゃ。」

坂本は少し火照った顔でにこりと笑う。

「……………」

一方高杉は顔色すら崩さない。

「まだまだ若かったが、目だけは違ったわ。一言で言えば恐ろしかった…といったところかのう。」

「…あの時の俺たちとはとにかく復讐することしか頭になかったのさ」
高杉は微かに笑う。
無表情とも取れるほどに微かな笑みだ。

「あの時の出会いは
まっこと衝撃だったのー。」

（まるで、恐ろしい獣のような、あの目…）

わずか、16、7歳の子ども目には見えなかったことをよく覚えていた。

坂本と彼らの出会い。

（今から、10年も前になるんか）

「おい、ツラあ」

「ツラじゃない桂だ」

松陽先生が亡くなって、はや6年が経とうとしていた。

暑さが厳しい夏。

蝉がうるさいくらいに鳴いている。

銀時と桂は腰に木刀を差し、

松下村塾の門に腰掛けていた。

無論、松下村塾は片付けられることもなく、灰と炭の山である。

「おめえ、知ってるか？ 今日、来るらしいぜ」

「…？」

「攘夷軍、だろ」

「「！」「」」

声のした方を振り向くと、高杉がいた。

「お前もその話聞いたのかよ、低杉」

「殺されてえのか天パ」

この会話は銀時と高杉お決まりの挨拶のようになってきている。

… 虚しい挨拶だ。

「二人ともやめろ、背が低いのも天パも個性だ!」

「背が低くないでめーに何がわかる」

「天パじゃないでめーに何がわかる」

ほぼ同時だった。

「空気読めやツラア

てめーの骨削ってやろうかあゝ あん!？」

「そのサラサラヘアー、ヘアアイロンでくるくるにしてやろうかあゝ
あん!？」

何だかんだ息ぴったりな2人である。

「フっ、武士たるもの、僻んでどうする。貴様らもまだまだまだ半人前
だな、ばっかじゃねーの（笑）」

プチッ

何かが切れたような音が2つ。

「何が（笑）じゃボケエエエ！！！！！！」

「ふーおおおっ！！！！！！」

ぶっ飛ばされた。

「ちょっとシリアスに始まったじゃんかっこいいいじゃんって思った矢先がこれだよ死ねよ」

「話戻すぞ銀時」

「待てお願いだから俺も仲間に入れてくれ
そのくらい俺だって知ってる」

桂は何事もなかったかのように立ち上がった。

「今もう近くまで来てるみてーだな」

「聞くところによると、1日萩で休暇を取ってからまた戦地に出向くらしい」

「あゝ、すみません！」

「「「！」「」」」

いきなり聞こえた声。

3人は同時に振り向いた。

（全く気配がしなかったぞ…）

「おまんらあ、ここいらに住んどるもんかえ？」

その男は、コテコテの土佐訛りであった。深めに傘を被った、大柄な男だ。

歳は相当若く見えた。成人しているかしていないか、といったところか。

長刀を1本帯刀している所を見ると、正規の侍ではないらしい。

「そうだが…」

桂が怪訝な顔をして答える。

「ちいと道に迷ってしもうたんじゃ、萩ゆう村はどこにあるがか？」

「……」

3人は突拍子もない質問に一瞬ポカンとしてしまった。

「ん？この辺じゃろ？萩ゆう村は。おまんら知らんのか？」
そう言って屈託のない笑顔を見せた。

「知ってるもなにも…ここは萩だぜ」
高杉が呆れたように言う。

「え？今ここが萩？」

「そうだ。」

「…なんじゃーそうゆうことやったがか！アッハッハッハ！先に着いてしもうた！アッハッハ」

なんだよこいつ。

…と3人が同時に思った。

「すまないが、お前はいつたい誰だ？」

3人共がずっと思っていたことを、桂がやつと質問した。

「風貌見てわからんがか？わしや攘夷志士じゃ。前の戦場いくさばで軍隊とはぐれてしもうてのー、1人で萩まで来たんじゃ。」

（（（攘夷志士…！）））

3人は憧れさえ抱いていたその響きに、ゴクリと息を呑む。

「ちいと暴れすぎて周りが見えんかったみたいじゃな。アッハッハ！」

「あんた名は？」

男の愉快的笑い声とは裏腹に、高杉が冷たく彼を睨んだ。

「ん？…坂本辰馬…ちゅうもんじゃが。」

ニコリ、と笑い返す坂本。

「攘夷志士つつたな」

「ああ。」

「歳は？」

「18。…おまんらはいくつじゃ？」

「俺は16。後ろのこいつ等は17だ。」

「ほー。わしと変わらんじやないか。おまんら、わしも名乗ったんじゃ、名を覚えてくれんかのー」

「高杉晋助。」

「桂小太郎だ。」

「坂田銀時。」

3人は順々に答えた。

「そうか！良い名じゃ！よろしく！」

…何をよろしくするのか分からないが、3人の彼に対する警戒心が少し弱まる。

「ところで…攘夷志士ってさ、強いんだろ？」

すると高杉が自分の腰にさしていた木刀に手をかける。

「！」

坂本はただただきょんとしている。

「お前と勝負がしたい。」

「…ん？」

唐突な高杉からの挑戦に、坂本は戸惑いを隠せない。

「おいヅラ、それを奴に貸せ。」

高杉は桂の腰にささっている木刀を指差した。

「ヅラじゃない桂だ。…お前喧嘩をする気か？お前の悪い所は喧嘩
っ早いところだぞ！」

桂はまるでお母さんみたいに小言を言う。

「うつせえ！さつさと貸しやがれ！それに喧嘩じゃねえよ、お前ら
だつて攘夷志士がどんなもんか知りてえだろうが」

「攘夷志士にだつて色んな人がいるんだ。…この男がどうであろう
がわからん。しかも出会っていきなり手合わせを願うなど無礼…」

「いんや。」

「！」

桂の小言を遮ったのは、言わんでもなく坂本だった。

「晋助、言つたのう。…いいぜよ。一本勝負じゃ！」
坂本は相変わらずニコニコと笑っている。

「そこなくつちな…」

高杉は桂から木刀を奪い取り、坂本に渡した。

「まったく…」

桂は呆れた様子でハア、とため息を吐く。

「……。」

一方銀時は先ほどから押し黙ったままだ。ジッと様子を伺っている。

「早速始めようじゃねえか。」

高杉と坂本は互いに木刀を向けた。

緊迫した空気が張り詰める。

そして…

ザッ！！

先手を打ったのは高杉だった。

バチィィッ！！

木が激しくぶつかり合う鈍い音。

（（こいつ…））

お互いに思った。

（（ただ者じゃない））

ガキッ！

バチ！

バチイッ！！

目にも止まらぬスピードで繰り出される剣戟。

（…マジで…強え！！）

がたいの良さからして強そうだとは思ったが、実際は高杉の予想を遥かに越えていた。

（目も異常じゃったが…こいつあ剣の腕も異常じゃな）
坂本も同様に予想以上だったらしい。

（そろそろ決着をつけんと）

（バテてきやがるな）

（（この一撃で…決める！））

ガキイイインッ！！！！！

2人の渾身の一撃は、お互いの木刀を宙に回せた。…バキッという嫌な音と共に。

「あああああ！！何をしてくれるんだ貴様らああ！！俺の木刀！！」
桂が2人を怒鳴りつける。

「あーあ、折っちゃったー。」

銀時が冷やかすように呟いた。

隣の草むらには、無惨に折れてしまった木刀が2つ。

「おー…、すまんのー、ツラ。」

「ツラじゃない桂だ！てか貴様初対面でツラとか言う？（泣）」

「わりー、お前金持ちだからすぐ買えんだろ」

高杉は全く悪気もなく言った。

「貴様に言われたくないわ！」

「ぶふっ……アッハッハッハ！アッハッハッハッハッハッハ！」

「！？」

いきなり爆笑しだした坂本に3人は驚いた。

「おまん、まっこと強いのー。まるで獣のようぜよ。」
「お前も正直予想以上だったぜ」

（面白いのー、この3人）

坂本は今まで何処の誰が見ても自分の剣戟を驚かない者はなかった。性格上、自尊心などというものはさほど持ち合わせてはいないが、ある程度の自信はあったし、自らの強さも自負していた。

しかし、この3人は自分の剣戟を見て、顔色1つ変えやしない。

坂本が推測するには、それだけ彼らが強いということ。

実際高杉の強さは体感したわけであるから、あとの2人の強さも想像に難くなかった。

「その2人はどうなんじゃ？強いんか？」

坂本はあえて銀時と桂に問うた。

「俺が3人の中で一番強い」
すかさず銀時が言う。

「はあ！？俺だろ馬鹿」

そしてすかさず高杉が反論する。

「何を言っている。剣の強さの程度など、余程大きな差が無い限りは一概に言えるものではないだろう。日に日に調子や気分が変わるものであつて…」

「ヅラあ、お前の魂胆は見え見えなんだよ！大人ぶりやがつて、そうやって一番強い大人なキャラになれるとでも思つてんですかコノヤロー」

銀時が桂の言葉を遮った。

「そうだ！一番強いのは俺だから！」
高杉も必死である。

「アッハッハッハッハ！やはりおまんらあ、おもしろいのー！」

「……！」
もう3人は坂本の存在も忘れてしまふほどに必死で、急に喋り出した坂本に少し驚いているらしい。

「恐ろしい目になったち思つちよつたら、いきなり子どものような

目になる」

この言葉に3人とも、きょとんと目を丸くする。

「おまんらの事は忘れんき、おまんらもわしの事、覚えとってくれ。そろそろ仲間が萩に到着する頃合じゃ。またいつか会えるといいの
ー」

坂本は軽く3人に手を降り、歩き出した。

坂本は、どんどん遠ざかっていく。

((((.....))))

しかし、坂本が遠ざかれば遠ざかるほど、3人の胸はざわざわとした焦燥感のようなものに支配されていく。

何故だか、何となくはわかった。

今が、自らの待ち焦がれていた時なのだと。

「待て坂本！」

…最初に叫んだのは銀時だった。

「俺たちも一緒に行く！！」

「共に戦わせてくれ！」

その瞬間、彼らの胸にあった焦燥感のようなものは、スッと消えていった。

「！…何じゃと？」

坂本はただ驚いている。

「だから！俺たちも一緒に行く！！」

高杉が目一杯に叫んだ。

「お前のような奴がいる攘夷軍なら…俺たちも共に戦いたい！」
桂も同様に叫んだ。

「おまんら、やはり面白いのー。しかし…」

そう言いかけた坂本の表情が急に無機質になった。

「攘夷戦争は、軽い気持ちで入れるような戦争じゃないき、相当な覚悟じゃないと無理ぜよ。しかも攘夷軍側に付くんならなおさらじや。…おまんら、今の青春全部潰す覚悟はできとるんか？」

「青春なんざ、とっくの昔に捨てちまったぜ。…俺たちは…戦わなきゃならねえ。」

銀時の目が、ギリりと光る。

「まだ子どもだと云うことも分かっている。だが俺たちには戦わねばならん理由がある。」

桂も銀時とさして変わらない様子だ。

「先生の…先生のために…」
もちろん高杉も同様である。

坂本から見た3人の目は、一端の大人…いや、そんな簡単な物ではなく…

（何かを秘めた…）

この時の坂本には何かはわからなかったが。

（……………）

おかしい気分になった。
しかし、その気分を決意させられる。

…連れて行くべきだと思ってしまったのだ。

「わかった。…おまんら、わしについて来い」

運命の、瞬間だった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
…

第二十六訓 言い訳だつて一応理由（前書き）

だらだらと話が続いてしまい、申し訳ないです……
次話からまた新たに物語が動き出します！

第二十六訓 言い訳だって一応理由

「そして私と八二は…銀時とツラと晋助に誘われ、攘夷戦争に参加することになりました」

久坂は少し遠くを見据えているような面持ちだった。

「坂本辰馬がきっかけだったんですね…」

山崎はかなり体力も回復したようで、ベッドに腰掛けている。

「私は反対したんだよ。私には復讐のためにあいつらが戦争に行くような気がしてならなかったのさ…。でも、あいつら…一歩も引かなかった」

文はただ悲しそうに笑う。

「やはり私も八二も、松陽先生を殺した幕府を恨んでおりました…。そして、なおさらあの3人はその気持ちが強かったように思います」
山崎の目には、久坂が激しく後悔しているようにも見えた。

「…結局は…復讐行為だったと？」
山崎は先ほどより心が重くなった。

「今思えば、そうでしょうな。私たちはたった一人のかけがえのない師を殺され、何も出来ない自らにもどかしさを覚える日々を送っておりましてから」

「私から見れば玄雅さんも、八二も、銀時たち3人について行った風だった。私はあいつらに何故戦争に行くのか問いただよ。…攘夷戦争に攘夷軍側で参加するなんて命を捨てるようなもんだからね」

久坂も文も、ただつらつらと昔を語る。

しかしそこに見え隠れする哀愁漂う表情から、その過去の重さを思わずにはいられなくなるのだ。

「銀時の奴…私にね、志を…仲間を…護るためだって言っただ」

「戦争に行くのに…ですか？」

「そうさ。戦争に行くってことは、殺すことだ。でも、銀時はきっと、本当に誰も死なせなくなかったんだと思う。それでもやっぱり殺すことに変わりはないのに…私も若かったんだ。5人を止めることができなかった」

「言い訳するつもりはありません。ただ私たちは…武士を…侍を、殺したくなかったんです。先生の教えでした…。侍の魂を失ってはいけない。護らなくてはならない。あの頃の私たちは、それを殺し合いによって体现することしかできなかったのです」

「…そうですか…」

山崎には何も言えなかった。

「まあ、あまり暗い話ばかりでは疲れますし。すみませんね、辛気くさい話ばかりして」

先ほどとは一転して久坂は、ははっと笑って白い歯を見せる。

「あいつら、面白いんだよ。個性的、っていうか」

文もニコリと微笑む。

「まあそれは…俺も重々承知してますけど」

（あれは面白いとか個性的なんて言葉で片付けられるもんじゃないと思うけどなあ）

山崎は苦笑した。

「あいつらと一緒にいると、本当に楽しかった。みんなすごく仲が

良かったんだよ。…懐かしいなあ」

「そうなんですか」

（本当に楽しかったんだな…。文さん、顔が輝いてる）

「戦争中、彼らは余りの強さに周りから避けられておりましたが…実際は良い奴ばかりなんです。それは私と八二が一番よくわかっておりました。」

「へえ…」

この夫婦の、武神四侍としてではなく、純粋な知己として彼らを想う気持ちが身に滲みて伝わってくる。

「…ですから」

「……」

「彼らを悪いようにはせずにやって下さい。山崎さん」
少し鋭く、また哀愁を帯びたような久坂の視線。

「…それは、局長と副長が決めることですから」
山崎も同じように見つめ返した。

「そうですか」

「うちの局長も副長も、まあ、多少…いや異常にクセがありますけど、良い人です、基本的には」
山崎の、本音である。

「そうですか」

先ほどとは違う、声のトーンであるように思えた。

「じゃあ、そろそろお暇させてもらいます。体調もすっかりよくなりました」

そう言つて山崎は立ち上がった。

「ええ。もう雨も止んだようですし。道中気をつけてくださいね」
久坂はニコリと笑う。

「本当に…本当にありがとうございました。あの、旦那にはこのこと…」

「ええ、言わなくても結構です。それに、銀時のいる場所も教えて頂かなくて結構ですよ。」
久坂は、やはり鋭い男だった。

「久坂さん……」

山崎は申し訳なさそうな表情だ。

（長い間お互いに生死も分からなかった友人が生きていることがわかって、自分が生きている事を知らせて欲しくないはずがないのに……）

「監察の仕事ですからね。」

監察とは本来、味方であろうと欺き、秘密裏に諜報を行うものである。

今、この場合は仕方がないのかもしれないが、山崎はあろうことが正体をばらし、諜報内容まで明かしてしまった。

それを、銀時本人に聞かれる事は、何があってもならない。

別に久坂や文を信じていないのではないが、念には念を、監察として、銀時の居場所を教える訳にはいかなかった。

そして、玄関先。

「では、ありがとうございました」

山崎は深々と頭を下げた。

「ええ、また、会えるといいですね、山崎さん」

「安心しなよ、情報とか、漏らすような事はしないからさ」
久坂と文は微笑んで、山崎を見送った。

「はい。失礼します」

山崎は自らの判断で、屯所に戻ることに決めた。

（ここまで情報が手に入れば、十分すぎるくらいだ）

「あつ」

山崎は、ポケットに手をつ込む。

「録音したままだったよ……」

録音機をオフにして、もったいなかったなあ、と独り言ちた。

（ああ…土方副長にこっぴどくどやされるだろうなあ）

諜報内容に正体がバレるなど、監察としての失態も甚だしいのだ。
仕方ないとは言え、ボッコボコにされる。

そんな恐怖に怯えつつ、病み上がりなせいか、土方のせいかは分からないが、重い足取りで真選組屯所へと歩を進めた。

t o b e c o n t i n u e . . .

第二十七訓 お互いに頼りお互いに手を差し伸べるのが本当の友だちと誰かさん

「のう、高杉」

京の、居酒屋。

坂本辰馬と高杉晋助は飽きる事なく酒を飲み続けた。
延々と坂本が喋り、高杉が軽く頷く。

…そんなやり取りが続いていた。
2人とも丁度酒が回ってきたところであり、気分がすこぶる良かった。

「ああ」

やはり高杉は無愛想な男である。

「銀時はあん頃…」

“あん頃”とは、坂本と3人が出会い、攘夷戦争へ参加した頃である。

「……。」

「あん頃、ほんに戦争をしたかったんやろつか」
坂本の目は、サングラスでよく見えない。

「……………」

高杉の表情が微かに動いた気がした。

「銀時はほんまは、ほんまのほんまめに、仲間を守る為だけに戦争に参加したんやないんかと、今になって思うんは、ワシだけか？」
少し、笑った。

「……お前は、何も考えていないように見えて、えらく鋭い」
高杉が、つらつらと喋り出した。

「……褒めても何も出ないぜよー！アッハッハ」
坂本はいつもの調子で笑う。

「褒めてねえよバカ本」
この時なんと高杉の表情が、どこか緩んでいるように見えた。

「褒めてるぜよ。高杉がからかおうとする時は普段より更に素直じゃない時ぶほええっ！……！」
ガッシャーン！という音と共に、坂本の額が高杉によってカウンタ―に打ちつけられる。

「……そういう奴が、俺は嫌いだ」
あの高杉が、よく喋った。

「高杉？」

若干涙目になりながら、坂本は訝しむように高杉を見た。

「お前らはみんな、そうだった」

高杉は酒を飲み干した。

「お前ら、言うんは…」

「俺は曲げねえ。いや、曲げられねえ」

坂本の言葉を、遮った。

「……。」

「特に銀時…あれは理解できねえ。ただ、俺の目的に反しているのは分かる。そして奴は俺にとって忌まわしい過去でしかねえ。だから消す」

酒が回っているからだろうか。

（昔のように、よう喋るのう。内容はともかく）

「おまんは、真っ直ぐ過ぎるぜよ。しかも1人で突っ走る癖があるきいな。ま、わしも人のこと言ってられんが…。目的は時に人を盲目にするっちゅうもんじゃ」

一瞬、坂本の表情が曇ったのを、高杉は見逃さなかった。

「…ちょっと待て辰馬」

「ん？」

「お前まさか、まだ探してやがんのかあ…？」

稀に見る、高杉の切迫感のある表情である。

「…まあ、諦められる訳はないぜよ」

（こいつは）

こんなに悲しそうに笑うことができる男だったろうか。

「ククツ……思えば…お前も俺と同じ人種だったなあ」

「ま、同じ人種同士もつと酒を飲む！うん、これに限るぜよ！」

「意味のわからねえことをほざくな馬鹿」

2人とも、それから特に込み入った話をするでもなく、また酒を飲み続けた。

（こうしていると昔に戻ったように思えるのう）

まだ探しているのか、と、
そう高杉は言った。

（自分を騙し、探し続けるわしと、自分を重ねるとはずいぶん滑稽
というもんぜよ）

2人は明け方まで飲んだくれ、高杉は、じゃあな、と寝こけている
坂本に一言残して足早に去って行ったという。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第二十八訓 遅いんじゃない、マイペースです（前書き）

更新が遅くて申し訳ありません；；；

それにも関わらず、

こんなに多くのお気に入り登録

本当にありがとうございます！

もっと文章力・構成力を

上げられるように努力します（＜|＞）

話は陸奥・銀時・桂sideに戻ります。

桂と坂本のお話です。

第二十八訓 遅いんじゃない、マイペースです

時間は少しだけ遡り、坂本と高杉が話し込んでいた頃。

陸奥と銀時と桂は桂の隠れ家にいた。

「頭の父親が亡くなったんは、頭が二十歳の頃じゃったな」
そう呟くように言って、陸奥は静かに目を閉じた。

「俺たちが19の時か」
銀時は無表情だった。

「ああ」
その時、そう短く返事をした桂の瞳が微かに揺れたのを銀時は見逃さなかった。

「……………」

（辰馬の親父が死んだ時…辰馬は普段と何一つ変わらねえ素振りだった。あの時ヅラと辰馬が一緒にいることが多かったように思っているのは気のせいじゃねえはずだ）

当時はさほど気にしていなかった事を、銀時は思った。

「それから一年後…頭は土佐に戻ってきたわけじゃが」

陸奥は静かに目を開く。

「そんな時、わしらが住んどった町は消えておった」

「「！！」」

途端、銀時は眉間にシワを寄せ、少しだけ目を見開いた。

一方、桂は…

「…！あの時土佐で起こっていた戦か…？」

歯をぎしり、と噛み締め、額に汗を滲ませている。

「おまん、知つちよるんか」

あくまでも陸奥は冷静である。

「まさか本当に…辰馬の故郷で…」

「……？」

銀時は声を荒げる桂を訝しむように見た。

「そうじゃ。桂は少し知っているようじゃな」

「今更俺たちにそれを話してどうする」

「そこじゃが」

陸奥は少し眉をしかめた。

「おまんら、桂に姉がいるのを知つちよるか」

「そりゃあ、知ってるけどよ…。それが何だってんだ」
銀時はただ困惑している風である。

「率直に言つと、今、頭の姉は行方不明ぜよ」

「まさかその戦で…！」
桂の顔が更に歪んだ。

「ああ」

陸奥はただ遠い目をするのみである。

「ちょっと待て、俺が分かるように説明しろ俺だけハブにしないで」
至極真面目な表情をした銀時が桂と陸奥の間に割り込んだ。

「お前も土佐で戦があつたのを知っていただろう。覚えておらんのか」

桂がはあ、とため息を吐いて、

「あの日…。あれは大きな戦を翌日に控えていた時だ…」

「…そんな日、いくらでもあつただろうが」

銀時はまだ思い出せないらしい。

桂はあの時の事を思い出す。

何故だか鮮明に覚えている、あの夜のことを。

「…星が、綺麗な夜だった」

ふらふらっと、陣営になっている寺から抜け出した。

明るい夜だった。

（少し酒を飲み過ぎた…。俺としたことが）

明日は天人軍との戦になる可能性が非常に高かった。

見込み通りなら、明日の昼頃には味方の攘夷軍の3倍の兵にもなる天人軍との戦になるだろう。

皆、最後の晚餐とでも云うように宴会で馬鹿騒ぎしている。

（俺は奴らが生きている限り…死ねない。絶対に、死なん）

彼らの“師”が既にいなくなっていたこの時、そう桂が思ったのは、道理なのかもしれない。

「お、ツラか？」

突然、背後から聞き慣れた声がした。

「ヅラじゃない桂だ、辰馬」

振り返るまでもなく、誰なのか分かった。

「お前は宴会に出ておかなくていいのか？」

「んにゃ、ちよいとなぁ…そういう気分じゃないっちゅうか」

坂本は珍しく、気まずそうに言いよどんでいる。

「どうした？宴会大好きなお前が」

「よし！ヅラ、驚かんで聞いちよくね。おまんに言うことに決めた」
坂本は眉じりを垂れて笑う。

「？」

桂は何のことかと、眉をしかめた。

「さっき、父上が亡くなったたち姉上から手紙が来よったぜよ」

「！！」

事も無げに告げる坂本を、驚きと困惑の混じった表情で桂は見つめ

た。

「父上は近頃病で弱っちよったからな…。覚悟はしとったが、なかなか辛いもんじゃ」

パツと、坂本が背を向けて空を仰いだから、桂にその表情は見えなかった。

「今すぐ、帰れ…！」

「帰れるワケが無いぜよ。分かっとなるじやろ、ツラも」

坂本の声色が、今まで聞いたことがないほどに寂しさを帯びている気がした。

「いや帰れ！今すぐ土佐に帰れ！……い、いや、ちよつと待て…土佐…は今、」

「ああ戦場になつとるらしいな」

坂本がそう言つて振り向いた時、彼は弱く笑っていた。

「…！！そんな顔をするな！親が死んでそんな顔をする奴は嫌いだ！お前は馬鹿か！？」

桂はいつもの冷静さを失い、ものすごい剣幕で坂本をまくし立てた。

（ああ…そうじゃった）

ふと、桂も母と姉を若くして亡くしていた事を思い出す。

「わしは、勘当されたも同然でこんなところまで来たんじゃ。それに、情報によればわしの故郷の町とは外れたところで戦が起きていると聞く。心配はいらん。それに文には帰って来るなち、書いてあったぜよ」

桂に諫められ、笑顔は引つ込めた。
声音は全く変わらなかったが。

「そんな情報あてになるわけがなかるう…。勘当されたやら何やらは知らんが、親だろう！？貴様の姉上も土佐におられるのだろ…」
桂は、母や姉が亡くなったあの悲しみを思い出していた。

…心が締め付けられるように痛かった。

「乙姉はそう簡単には死なん！なんせ、あのごーっつい姉様じゃ！死なん！わしは一生父上にも、乙姉にも会わんつもりで戦に出てきた。こん国を変えたいなんぞと偉そうな事を言うて来た…。」

乙姉とは、坂本の姉、乙子おつこの事である。

「そうゆう事やき、なんちゃあない」
そしてやはり微かに笑う。

「辰馬…しかし」

桂はギリ、と奥歯を噛み締めた。

「それに！」

坂本は不意に大声を上げる。

「おまんらを残して1人土佐に帰ることなど、ぜーったいにできん
！！」

そう言つて、いつものように笑つてみせる彼は、弱くも、また強くも見えた。

「……。」

ただ黙つて、坂本を見つめた。

「わしがおまんにこん事を話したんは、こうやって誰かに宣言したかつたからじゃ。誰かには知つていて欲しかつたからじゃ。まあ不幸にもおまんが選ばれてしもつたワケじゃが」

やはり、「冗談みたいに軽く言つてのける。

「いや… 光栄だ。俺に話してくれて、ありがとう」

…こう言ってくれるこの心地よさが、坂本が桂に打ち明けた理由かもしれない。

「わしも、おまんらが生きている限り、死ぬつもりはないぜよ」

「！」

この剽軽な男は、読心術でも習得しているのかと思った。

「わしは、おまんらとは幼なじみでも何でも無い、やっと知り合って2年くらいの友人にすぎん…しかし」

桂は、この男にはいくつの笑顔があるのだろうかと思議になった。

彼は、優しい、優しい笑いを浮かべていた。

「何故じゃろうなあ、わしもまるでおまんらと幼なじみやったかのような気がしてならんぜよ。いや、幼なじみっちゅうか、兄弟みたいなもんかにああ」

そしてニッと白い歯を見せた。

「…辰馬」

桂は困ったように笑う。

「それは俺たちとて同じだ。そう思っているのは別にお前だけじゃない。勘違いするなよ」

「あつはつは！おまんは、まっこと優しいのー！」

「！」

そう言った坂本を見て桂はギョツとした。

何故って…

坂本が爆笑しながら、ボロボロと涙をこぼしているのだ。

坂本は桂の背中を思いつきりバンバン叩いた。

「あつはつはつは！おまんは優しい！おまんも無理はするな！銀時も晋助もなんちゃあない！もういっぱしの侍ぜよ」

「いゝっ痛い！痛いぞ辰馬ああー！」

そう桂が叫ぶと、坂本はもう2、3回バシバシと叩いてから、やっ
と手を止めた。

「おまんはそのう、松陽先生じゃあないき。おまんは桂小太郎じゃ！」

坂本は涙を拭いながら、また空を見上げる。

「桂じゃないヅラだ！…あ、間違えた、桂小太郎だ！」

桂は腕を組んで、辰馬と同じように空を見上げる。

「あつはっは！そうそう。桂小太郎じゃき、無理はするな」

「？」

坂本は依然としてニコニコと笑うが、桂にはよくわからなかった。

「松陽先生つちゅう御仁がどないな人やったかがは知らん。しかし、ヅラが松陽先生の代わりをしようち無理しちゅうのは何とのー分かる」

「！…無理はしとらん」

この男、やはり侮れない。

何も考えていないようで何かしら考えているのだ。

「しかも俺が先生の代わりになれるハズがなかつ」

なれるものなら、なりたい。

なりたくて、努力はしているが。

「ん、まあそうじゃが…とにかく無理はするなち、ゆうことじゃ！
難しいことは分からん！」

あつはつは！

と、豪快な笑い声は辺りに響き渡った。

(……しかし、この髪だけは)

こうやって伸ばし続けた長い髪は、確かに松陽先生のようにしたかったためである。

松陽先生をいつ何時も忘れまいと云う願掛けのようなものだった。

確かに銀時と高杉は攘夷戦争のストレスからか、荒れていた。

たまに八つ当たりもされたが、それも受け止めた。

でも自分は松陽先生ではない。

心のどこかで、松陽先生に会いたがっている、縋りたいと思っている自分もいる。

まだまだ、彼らは20歳にも満たない青年だった。

桂は、3人の中でただ1人、家族の温かみを知っていた。

だからこそ、八つ当たりされようと、耐えられたのかもしれない。
だって、今はその“温かみ”だった松陽先生がいなくなってしまう

たから。

（でも別に、俺1人が頑張っている訳ではない）

桂だって、辛くなるときもある。戦争の最中、身に危険が及ぶのは日常茶飯事だ。

そんなとき、助けしてくれるのは銀時と高杉だし、また坂本だ。

お互いに、補い合っているのかもしれない。

…松陽先生がない寂しさを。

「……………」

「ん？何じゃ、泣いとるんか？」

「泣くか。今はお前が泣け。」

「わしはもう泣いた。乙姉は、大丈夫じゃ、きっと」

「ああ、大丈夫だ」

こうやって励まし合える坂本は、もう3人の兄弟とも云えるほどに大きな存在なのである。

：ただ、この時の坂本と桂は、
情報に誤差があったことなど、知る由もなかった。

T o b e c o n t i n u e . . .

第二十八訓 遅いんじゃない、マイペースです（後書き）

最後までお読みいただき、
ありがとうございました！

次も陸奥・銀時・桂sideです（＾Ｏ＾）

第二十九訓 言わなきゃいけないこと早めに言っとけ（前書き）

一気に更新します。

坂本の過去編、ちょっと

長いですがお付き合い願います！

そして、私事で申し訳ありませんが、
当分の間、感想を書けないように
設定する事にいたしました；；

色々理由はありますが…（＜|＞）
本当に申し訳ありません。

感想を頂かない分、

納得していただける小説になるよう、
今後努力していきます！

…それでも、どうしても感想を書きたい！なんて思ってた
方は（いるかは分かりませんが；）、追々私のHPのリンクを貼
りますので、そちらへどうぞ。

ではお楽しみ下さい！

第二十九訓 言わなきゃいけないこと早めに言っとけ

「そう。おまんが心配していた通り、わしらの故郷はちょうど攘夷戦争の戦地となっちゃった。」

陸奥は表情一つ変えない。

「まさか…本当にそんなことになっていたとは…」
桂は額に汗を滲ませて、顔を少ししかめた。

「…でもよ…聞いたことねえぞ、辰馬からそんな話は…。親父が亡くなつた話は聞いたけど」
銀時は頭をボリボリとかいている。

（…？何だこの違和感）
銀時は何故かこの時、可笑しな違和感みたいなものを感じた。
（何か、思い出さないといけねえ事を思い出せないみたいだな…）

「頭のことじゃ…言う必要なし、と思つたんじゃろっ」

「あ、ああ……」

銀時は少し困惑していた。

「まったくアイツは……」

そんな銀時に気づかない桂はため息をつき、また別の意味で困惑していた。

「あの戦争が起こったんは……わしが15の時じゃ」

陸奥は、淡々と喋り出す。

ドオオオオン！！

パンッパンッパンッ！！！！

ガキイイイン！！！！！！

（もう…死ぬんか…）

爆発音や金属音が絶えない。

寧ろ、先ほどよりも激しくなっている気がした。

陸奥は、虚ろな目をして戦場をさまよっていた。

田舎に向かって歩いているものの、どこに行けば安全なのかわからない。

（父上と母上は…無事じゃろうか）

陸奥の家は由緒正しき武士の家だった。しかし彼女が8歳の折、陸奥の父は仕えていた大名家中の政争で敗北してからというもの、家は貧窮を極めていた。

土佐でも大田舎に住んでいる両親の口減らしに、遠く離れたこの一番の都会の街に出稼ぎに来たのが5年程前。

出稼ぎ先の店主とははぐれてしまった。

それほど店主に良くしてもらっていたワケではないし、別に良いのだけれど。

（あ……）

うろつろとしているうちに、見覚えのある非常に大きな店があった。

……いや、店だったもの、と言った方が良かったろう。

陸奥の出稼ぎ先の店の主人が鼻屑にしており、陸奥も出稼ぎに来た頃からおつかいに出されたりしていた、立派な面構えの酒店である。

…それが。

「…あ…あ…」

壊され、荒らされていた。

戦乱で壊されてしまった拳げ句、酒が持ち去られた形跡がある。

（『才谷屋』が…）

その店を才谷屋と云った。陸奥はこの主人と、そしてその娘と息子が好きだった。

息子は2、3年程前に土佐を出て行った。

主人が先日亡くなり、悲しみに暮れる暇も無く、今日に至る。

…そして、息子は帰って来なかった。

主人はずっとずっと待っていたのに。

そして、店の切り盛りは、息子の姉がすると聞いていたが…。

（奴も…こんな戦をしとるんか…？）

そう思うと、絶望的な気分はもっと深くなる。

才谷屋の息子は、国を変えたいなどと言って出て行ったつきり、一度も帰ってこなかった。

「辰馬…違う…おまんは間違っちよる。こんなんで国が変わるワケないろ…。」

辰馬。

そう、坂本辰馬である。
才谷屋の、息子。

彼は、国を変えたいと言って土佐を出て行った。

しかし、何だ、これは。

才谷屋は潰れ、荒らされ…

（乙子さんは…！？）

辰馬の姉、乙子である。

陸奥はハツとして、まだ壊されていない隙間に身を滑り込ませた。

「乙子さん…！」

しかし、返事はない。

「あ…」

陸奥は、店の陳列用に置いてある荷台車が1つ無くなっているのに気がついた。

（逃げたんじゃな…乙子さんは…）

心の底からホッとした。

「逃げないかん…」

ホッとすれば、また自分の身の危うさを認識した。

（田舎に逃げるしかない）

もう才谷屋にいるわけにはいかなかった。

陸奥は実家の方向へ、ただ走った。

近くや遠くで爆発音、悲鳴、そして夥しい数の金属音。

才谷屋の息子…辰馬の事を思うと、目の前がぼやけた。

「こんな…こんな戦場で…」

こんな恐ろしい所で。

彼は天人を斬っているのか。

とにかく走って、走って、走って。

早くこんなに恐ろしい所から出ていきたかった。

そして。

「はあっ…はあ…はあ…」

どれくらい走っただろうか。

もう、近くで爆発音も金属音も聞こえなくなった。

ここからは歩いて実家までの道を急いだ。

「そしてわしは生き延びた。頭が帰ってきたのは、それから1年程経ってからじゃったな」

「陸奥殿は…大変な思いをしたのだな…」
沈痛な面持ちで桂は言った。

「別に…頭やおまんらに比べれば何のこっちゃないぜよ」

「…辰馬や俺たちの部隊は特に激しい戦地に行かされた。若くてより抜きの部隊だったのだな。陸奥殿が経験したその戦の数倍の激戦地で奴は小隊を率いていたのだ」
坂本のすごさ、みたいなのを語る桂に、銀時は少し笑った。

「そげか」

それを聞いた陸奥は少しだけ視線を落とした。

「とにかく…頭が帰って来た時、才谷屋は潰れて無くなっちゃった、ゆうわけじゃ」

「あいつが戦争を途中で抜けた時」
銀時が陸奥をジッと見た。

「あいつはすぐに商売を始めたはずだ。あいつは俺との別れ際、そう言ってたぜ。」

「ああ。帰って来た時、わしと共に起業したんじゃ。」
陸奥は無表情に答える。

「あの時…俺とあいつが別れた時…か。懐かしいねえ」

…銀時は何となく、あの時の事を思い出していた。

攘夷戦争が終わる直前だった。
体も、心もボロボロだった、あの頃。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

第三十訓 漫画で伏線消化しきれずに終わる奴アレめっちゃ気持ち悪い

「銀時。ほんまのほんまに、一緒に来てはくれんか？」

「残念だが…俺はまだここにいなきゃならねえ理由がたくさんあるんでな」

攘夷戦争時代、末期。

…この頃は、本当に戦争が終わる直前と言えよう。

攘夷軍の負けは、火を見るより明らかだった。

20年程も続いた攘夷戦争が終わるのを誰もが予感していた。

「…ほかか。まあ、おまんがおれば、わしも安心してここを離れられるというもんじゃ」

この時期にはもう攘夷軍側の勢いもなく、戦いを投げ出し逃げる兵士も少なくはなかった。

しかし。ここに、違う理由で戦線離脱をする変わった若者がいる。

「辰馬…まあ、元気でな」

「おまんこそ」

坂本辰馬。

そしてまた、戦線離脱を誘われて断る変わった若者もいる。

「絶対に、死ぬな」

「あたりめえだ」

坂田銀時。

2人は陣営の出入り口付近にある岩に腰掛けていた。
最後の別れを楽しんでいるようにも見える。

「わしは土佐に帰ったらすぐに起業しようと思うちよる。従業員は追々集めていくつもりじゃ。世界を平和にするんは、戦争でもない。攘夷志士でも幕府でも天人でもない。人と人の繋がりがりじゃ。商売じゃ。わしはそれに気がついた」
坂本はあはは、と笑う。

「ああ。お前らしいやり方じゃねえか」
銀時もつられて笑った。

「気づくのが遅かったが…気づかないよりは良い。そして、気づいたからにやあわしは実行するぜよ。」

「ああ。」

坂本の夢みたいな話を、銀時だけは笑わずに真面目に聞いてくれた。それがとても心地よかった。

「銀時。正直に言うとな…情けない事に、おまんやツラや晋助、玄雅や八二と別れるのは辛いぜよ。まあ、何じゃ…心配しちやるんじや」

「ああ？こちらからお前えの事がよっぽど一番心配だよ。みんなで言っただよ？あのバカ本が会社立ち上げるとか（笑）、みたいな」
「ただの悪口じゃねーか！」

…と突っ込みたいところだが、残念ながら突っ込み要員がいない。

「うおおおお！！まさかおまんらがそんなに心配してくれちよるとは…！！」
全身全霊で喜ぶ坂本。

「いやそこまで心配してないんですけど分かるだろバカ本」

…と、おぶざけは置いておいて。

「とにかくじゃ！みんなをよろしく頼む！」

「まあ俺がよろしくなくてもアイツらは大丈夫だろ。ってか何も言わなくてもツラがよろしくするってーの」

銀時は面倒臭そうに鼻をほじった。

「言われてみれば、そうじゃな」

坂本は頭を掻きながら笑った。

「みんなきつと死なねえよ。アイツらはこんなくだらねえ戦争でくたばるようなタマじゃねえ」

くだらない戦争、と銀時は言った。

（銀時は、仲間を守るためだけにここに残るんじゃな）

銀時にも、こんな戦争に意味がないことはわかっていた。

或いは坂本よりももっと早くに気づいていたかもしれない。いつからなのか、坂本には分からなかったが。

「じゃあ…そろそろ行くかの」

「おう」

坂本と銀時は立ち上がり、門まで歩いた。

「じゃあな、銀時。息災でな」

「ああ、おまえも」

そう短く言って、笑い合う。

坂本は行く方向を向いた。

「銀時…、晋助と、八二を…ちよいと気にしておいてほしい」
「ぼそり、と呟くように聞こえた言葉。」

「…？」

「じゃあな！」

坂本はそれ以降特に何も言わず、去っていった。

「じゃあな」

銀時もう少し寂しいような、清々しいような気分だった。

…しかし。

（晋助と…八二…？）

坂本の最後のあの言葉。

銀時が聞き逃すはずがなかった。

銀時は桂や高杉に比べて、ずっと鋭い。

坂本よりも鋭いかもしれない。

しかし、そんな銀時にもこの時はよく分からなかった。

（いや、高杉はわかる。高杉は分かるけどよ…）

高杉が最近おかしかったのは見ていてわかった。

しかし、八二がわからない。

（…いずれ…何か分かるのか？…なんでえ、辰馬の奴勿体ぶりやが
って）

とりあえず気に掛けておこうと心に留め、銀時は桂や高杉の待つ陣
営へ戻った。

高杉の異変、八二の異変。

この本当の意味がわかるのは、まだまだ先の事である。

T o b e c o n t i n u e . . .

第三十一訓 だらだらするな、しっかり歩け

(…土佐…)

坂本は銀時たちと別れ、商売人となるため、一旦土佐に帰ってきた。故郷に帰ってきたのは何年ぶりだろうか。

しかし。

「何じゃ…これは」

自分が知っている故郷とは大きく違っていることに気がつく。

坂本は実家への道のりを急いだ。
大きく胸騒ぎがした。

「こつちで…あつとるんか？」

変わりすぎて、道に迷う始末である。

走って、走って、…

見覚えのある山。

方向は間違っていないはずだ。

（あ……！あれは……）

見覚えのある店を見つけた。

この裏通りに自分の実家はあったはずである。

全速力で道を駆け抜けた。そして角を曲がり、裏の通りまで来た。

（……！？）

ない。

そこに、あるはずのものが無い。

ぽっかりと穴が開いたように、そこだけ空き地になっている。

「乙姉……？」

手紙で姉は、婚約者と店を継ぐと言っていた。辰馬はその婚約者と会ったことすらなかったが。

しかし、どうしても、ない。

手紙は父親がなくなったという手紙で途絶えていた。

……いや、途絶えていたというよりは、届けることができなかった。

坂本が攘夷戦争に参加していた最後の1年ほどは各地を転々としていたため、手紙などを受け取れる状態ではなかったのだ。

「乙姉：！何で：おらんのじゃ！？」
少し坂本は混乱していた。

帰ってきてから、坂本は姉にたくさん謝って、これからは姉孝行をするのだと宣言するつもりでいたのに。

父親の墓参りに行かなくてはいけないのに。

姉の婚約者：もとい、夫にだって挨拶しなければならぬ。
攘夷戦争の最中で出会った仲間の話もしなくてはならない。

姉に伝えねばならないこと、しなければいけないことなど山のようにあるのに。

「…乙姉！」

どこにもいない姉に向かって叫んでいた。

「おまんは、帰ってくるのが遅い」

「！」

突然後ろから聞こえた、低めの女の声。

「乙子さんと旦那さんは、行方知れずになっちよるが。弟の癖に、なあんも知らんのか」

そのキリツとした目に、薄茶色の髪。

…昔はあんなに小さい子どもだったのに。

「……陸奥……」

「久しぶりじゃな、辰馬」

身なりは女子になっていたが、陸奥は変わっていないようだった。相変わらずの無表情である。

「辰馬…もう5年も会つとらんかったか…。おまんはどうやら、変わってしもつたようじゃな。そりゃあんな酷い戦の最前線で戦ったんじゃ…変わりもするんかのう？」

（こんな顔は、初めて見た）

いつも、どんなときでも…悲しみさえ笑い飛ばしていた辰馬が、帰ってきた途端、こんなに悲しい顔をする。

しかも陸奥の先入観からかはわからないが、辰馬からは血の臭いがした。

腰に差しているその刀はいくつもの命を奪い、大量の血を吸ってき

たのдарう。

「血生臭い。それに何じゃ、その不幸な顔は」

「……。あつはつは！酷い言われようじゃ。まあそれ程の事をした自覚はある。……ただ、情けないことに、まさか家が無くなつちよるとは思わんき。驚いてしまつての」

坂本は無理をして笑っているようにしか見えなかった。

「……今から１年ほど前かのう。ちょうどこの街は攘夷戦争の戦場になった。乙子さんは行方知れずじゃ。どこで生きとるのかも、もしくは……わからん。わしが気付いた時には、荷台ごといなくなつちよつた」

そんな風に弱っている坂本にお構いなく辛辣とも云える情報を浴びせかける。

しかし、陸奥は辰馬を責めて責めて、追い詰めてやりたい気分だったのだ。

５年も家を空けて。何をしていたというのだ、この男は。

「……………」

坂本の口元は微かに笑っていた。

そして、ゆっくりと俯く。

「辰馬？」

坂本はおもむろに風呂敷から何かを取り出した。

それはメガネのような形をしているが、レンズが茶色かった。

(……?)

当時の陸奥にはそれがなにかわからない。

坂本はそれをかけた。

「なんじゃ、その変てこなメガネは」

「サングラス、ゆうもんじゃ。ここに来る道中を買った。異国のものらしい。日光を遮るのに使っんじゃと」

坂本は穏やかに喋る。

「……涙を遮ってどうする」

何故か陸奥の胸にもじんわりと熱いものがこみ上げてきた。

自分は辰馬を責めたくて仕方なかったはずなのに。

「あつはっは！今のわしにはその用途の方がいい」
目はサングラスに隠れて見えない。

「おまん、何故帰ってきた？」

ふと、思ったことを聞く。

思えば、不思議なのである。まだ攘夷戦争が終わったという話は聞いていない。

「お、忘れる所じゃった」

急に腑抜けた声に変わる。

「よし、ここまで何となく、自分の思うままにやってきたんじゃ。
起業も、わし方式で行く！」

「は？」

「陸奥、おまんを一人目の従業員にするぜよ！」

パアツと明るい笑顔を向ける坂本。どうやってそこまで露骨に切り替えられるのか、陸奥には……いや、恐らく誰も理解できまい。

「……は？」

いくら陸奥でも理解できるはずがなかった。

「ワシはこれから貿易会社を立ち上げる。おまん、共に宇宙^{そら}へ飛ばんか？」

「……………」

呆氣にとられるしかなかった。

「おまんはもしかすると、銀時より向いとするかもしれん」

陸奥は全く理解できない。というか、全くついて行けない。
聞きたいことや言いたいことが多すぎて、何から喋るのか迷った。

「いや…あの、辰馬。ワシは、今も奉公中じゃき…」

こんなくだらない事しか思い浮かばなかった。

陸奥は戦渦の中辛うじて消失しなかった奉公先で、未だ奉公中だった。

「楽しゅうないんじやろ？昔から変わらずのう。陸奥ももう店に奉公する年でもないろ、辞めればいいぜよ」

「なっ…」

「最初は苦労するじやろが、絶対に楽しいぜよ。」

「……………」

拍子抜けだ。かつてないほど、拍子抜けだ。ここまで戸惑うことが今までにあっただろうかと思うほどである。

「それで、全国を…宇宙中を駆け回れる会社にするぜよ。そしたら、乙姉も探せる。あの姉様が簡単に死ぬはずがないんじゃない。それに、何ちゅうたかな…旦那さんもおるはずじゃ」

「……。」

軽口には聞こえるが、そんなことはない。絶対にない。

（この男は…こんな男だったか？）

こんなにも人を惹きつけることのできる人間が、この世に何人いようか。

「ワシは、銀時の所にも、ヅラの所にも、晋助の所にもすぐにいける船がほしい。そして、商売で国を変えるんじゃない」

この時の陸奥に、『銀時』『ヅラ』『晋助』が誰なのか全くわからなかったが、後々坂本にとってどれほど大切な人間なのかを知ることになる。

「まあ、ワシは頭に流されて快援隊を結成してしもうた訳じゃ」
陸奥はふう、と満足したようにため息を吐いた。

「……うっ……ひっく……まさがあ……辰馬がぞんな……境遇だっだとは……ひっく」

「いや、ええ、分かつてくれたらええんじや」

なんか若干頬を染めてるように見えるのは気のせいだろうか。

「いやいやいや何なんkachよつと喜んでんの！？何なのつまり！！
ナニが言いたいのか全くわからないんだけど！」

「ああ…まあ、一番重要なことを言つとらんからな」

「は？あんだけながーい話して何言つてないつつんだよ」
銀時は疲れたらしく、がつくりと肩を落とした。

「その辰馬の姉の旦那は、天人なんじゃ」

「……。」
「！」

その事実には、銀時は何の反応も見せなかった。
しかし、桂が少し反応を見せたのは、彼が攘夷志士だからだろうか。

「だから何だというのだ…」
桂が少しむっとして聞いた。

「わかるじやろう。なんとなくは…ワシとて高杉の性格はしつち
よる。超過激派攘夷志士…。天人が嫌い…どころではない、憎んど
る。憎みきつとる」

「つまりあんたが言いたいの、高杉の『計画』のことか？」
まだよくわからない、と言ったように銀時は頭を掻く。

「まあ…そうじゃ。何にせよ…理由は後からついてくるぜよ。高杉がどんな計画を練っているかもわからん。何か大きな事を起こすのなら、頭は止めに入るじやろうが…」

銀時や桂にも、陸奥の言いたいことは何となく分かった。

「しかし…心配し過ぎじゃねーの？」

「ふつ、まあ確かにそう言われるとそうなんじゃが。ただ、さっきも言ったように、理由は後からついてくる。今は何となく覚えていてくれればそれでええき」

（ワシの胸騒ぎは…当たるんじゃない）

陸奥は不意に胸に手を当てた。

「うむ…。まあ、わかった。心には留めておく」

「それにまあ…あれじゃ、頭の、その…ことを、まあ…知って貰えれば…ええ、き」

陸奥はしどろもどろ話す上に、語尾がどんどん小さくなる。

（つたく…。辰馬もつらやましい部下持ったもんだ）

銀時はあ、とため息をついてげんなりする。

「ふぁゝぁ…もう夜も遅いしお開きにしようぜゝ…」
本当に眠そうである。

「貴様ここで寝るなよ！というか家でリーダーが待ってるのではないのか。早く帰ってやれ」
打って変わって桂は非常に元気だ。

「あー、はいはい」

そして銀時は万事屋に、陸奥は快援隊へ帰っていった。

その夜は、月がとても美しかった。
これから動き出す運命とは反比例しているかのように。
。

To be continue...

第三十二訓 離れていても家族……って元ネタわかるよね（笑）（前書き）

場面変わります。

銀さんのイメージが原作と

少し変わってしまったらごめんなさい……

脳内補正でよろしく

お願いしますっ（<―>）

第三十二訓 離れていても家族…って元ネタわかるよね（笑）

「はあ…全く何だっつうんだみんなしてよお…」
銀時は非常に疲れていた。

色んな事がありすぎて頭がごっちゃになるし、動き回り体力も削られた気がする。

やっと万事屋に着いた。

「金ももらえないのに深夜労働だよ…」
はあ、とため息を吐いて鍵を開けた。

「ただいま…って、寝てるか」
もう日付が変わりそうな頃である。新八は帰っただろうし、神楽は今ごろ押し入れの中で寝ているだろう。

銀時はまたため息を吐いて、奥へ入った。

「あ…銀さん…」

「…え、新八！？…と神楽…」

なんと、まだ新八が万事屋にいた。

そしてその側には神楽がソファで寝ている。

「おかえりなさい」

「何でいんの新八くん」

銀時は少々焦っているらしい。

「いや何でって待ってたんですけどあんたを！ってかどんだけ心配したと思ってるんですか！！」

新八はすごい剣幕で銀時をまくし立てた。

しかし、神楽を起こさないように小声にすることは忘れない。

「いやいやいや出掛けるって言っただろ！アレ言っただけ」

「銀さん、買い物に行くって朝に出てったじゃないですか！買い物長すぎでしょ。ってか何も買ってすらないし…。神楽ちゃんも寝るの我慢して待ってたんですからね。寝ちゃいましたけど」

だからこの状況か。と理解する。

（あーあ…やっちゃったなあ）

「どこ行ってたんですか全く」

「いやー…まあ、その、なんだ。色んなところに行ってたの！」

銀時ももうヤケだった。こんな失態、子ども達の前ではしたことが無かったのに。

不覚だった。

「また誤魔化すんですか」

新八が拗ねたように口を尖らせる。

「…は？」

新八の意外な態度に銀時はポカンとしている。

もつとまくし立ててどこに行っていたのか聞いてくると思ったのに。

「桂さんが来たりした時点でなんとなーく、本当になんとなーくですけど！わかりますよ。別に話したくないんなら良いですけどね！」

「…ツラ？がどうしたの？」

「い、いやまあ良いんですそれは。とにかく！…ええと。僕は帰ります！」

「え」

そういうと新八はさっさと荷造りし始めた。

銀時には何がなんだかよくわからない。

「あ、そうだ。…銀さんに隠し事なんて後ろめたいから言っておきますけど。…僕と神楽ちゃん、見ちゃったんですよ。…その、陣羽織やら胸甲やら籠手やらを…」

新八は本当に後ろめたそうに話す。

「陣羽織？胸甲？」

（懐かしい響きだな）

なんて思ってしまう自分に悲しくなる。

「銀さんが攘夷戦争時代に使ってたヤツですよ。あの棚の奥にしま
ってありました。たまたま、見ちゃって…」

新八が気まずそうに銀時を見た。

（なるほどね、そーゆーこと）

「…いーよ別に。見られて困るもんでもねえし。…ただまあ、アレ
だ。怖かっただろ。悪かったな」

銀時は銀時で気まずそうに答えた。

（何せ血まみれだからなあ…アレ）

「…銀さん」

瞬間、新八はホツとしたように笑う。

「新八、お前は早く帰れ。そしてお妙が俺に暴力しないように言っ
といてね100円あげるから」

「いや知りませんよあんたが悪いんでしょ僕が帰るの遅くなったの」

ああーゴリラ女に殺されるー、なんて呻きながら頭を抱える銀時に、
新八は心から安心した。

（良かった…いつもの銀さんだ）

何故だか、新八は不安だった。銀時がここに帰って来た時…いつも
の銀時じゃ無かったら、と心のどこかで思っていた。

「じゃ、帰りますね」

「おう、またな」

「はい、また明日」

新八は帰っていった。

「ふう……」

（いらねえ心配を掛けちまったな……）

銀時はすやすやと気持ちよさそうに眠る神楽を見つめた。

こんな日常がずっと続くのだろうか、ふと考える。

遠い昔、小さいながらに思ったことと同じ事を考えた。

あの頃の、小さかった銀時のそんな囁かな願いは儚く砕け散り、酷く傷ついた。

そして攘夷戦争が終わり、もっともつと傷ついた。

親……いや、それ以上とも云える人を奪われ、仲間を失い、そして……

仲間を傷つけ、……捨てた。

「……うん、……銀、ちゃん……」

「……」

ハッとした。

神楽が身を擦らせ、寝返りを打った。
ドサツ、と床に落ちる。

しかしさすがと云おうか、全く起きる気配はない。

（何考えてんだ俺は）

今更だ。

そんな事、ずっと昔に考えて考えて、辛くなって考えるのは止めた。

それに坂本の話だって。辰馬は話したくなかったから話さなかった
のである。

鋭い銀時ですら気づかなかったのだから、仕方ないのだ。

そして、戦争が終わった時、もう今後一切人との繋がりを深くは持
たないと誓った。

誓ったはずだった。

「…悪かったな」

新八への詫び同様、神楽への詫びなのか、…それとも他の誰かが、いやもしくはその両方か。

「あいつらは捨てられたなんてこれっぽっちも思ってたねえ。それに俺は、間違いなく命がけで守って来たはずだ。…結局は、守れなかったけどな…」

銀時は神楽を抱き起こして、彼女の寝室とも云える押し入れに向かった。

「お前らは…失いやしねえよ。」

そして押し入れを開け、神楽をそっと寝かせる。

「銀、ちゃん」

「！」

…寝言らしい。

「…行かない…で…銀、ちゃん」
神楽は魘されていた。

「………」
「…ったくよ」

銀時は頭をガシガシと掻いて、ゆっくりと襖を閉めた。

もう、どこにも行かない。

子ども達の前から、絶対に消えない。

先生は自分の前から消えてしまった。

自分も………2人の幼なじみの前から消えた。

「寝るか」

銀時ははあく、と長いため息を吐き、苦笑いしてそのまま眠りにつ

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

い
た。
。

第三十二訓 離れていても家族……って元ネタわかるよね（笑）（後書き）

次からまた少し物語が動きます。

第三十三訓 悲しいことも嬉しいことも普通はいきなりやってくるもんだ（前書

今回、舞台は吉原です。

初登場のあの2人。

そして今回、これからの話に繋がるヒントがたくさん出てきます。

伏線 on 伏線（笑）

第三十三訓 悲しいことも嬉しいことも普通はいきなりやってくるもんだ

「……と、云うことらしい」

薄い金髪の女は、煙官の煙を一気に吐き出した。

「…何なの…それ」

その後ろでは車椅子に乗った女がいる。

夜。吉原は月明かりに照らされていた。

しかし、月明かり以上に店の明かりが眩しい。

「今までほったらかしだったのを…何でそんな急に忠告なんて」
はあ、と、形の整った眉を寄せ、女、もとい、日輪はため息を吐いた。

「自分の領地で面倒を起こしたくないのかもしれん。何にせよ…神威の気まぐれじゃろう。」
これまた形の整った唇から煙を吐き出して、月詠は静かに目を閉じる。

二人は日輪の店の軒先にいた。

先日、吉原桃源郷の楼主である、宇宙海賊春雨第七師団隊長の神威……というか、その部下から吉原に連絡があった。

「でも近々世が乱れる……なんて……意味が分からないわ。せつかく平和になった吉原がまたそんな……」

日輪は沈痛な面もちで空を見上げる。

「ああ……。しかし、念には念を……百華には喚起しておく。もうすぐ百華の者が来るでありんす。先ほど呼んでおいたのでな。」
月詠は表情を崩さない。

「そう……。でも、不思議な事が一つあるわ」

「なんじゃ？」

「その、春雨は『天人』の者は特に気をつけよ……って言っていたんでしょ？」

「ああ。わつちにも真意は全くわかりんせん。しかし、あつちは吉原の楼主じゃ。無碍にする訳にもいかんし、気を張っておかねばならん」

はあ、と月詠もため息を吐く。

「だから、先ほど呼んだ百華も天人の者を呼んでおいたんじゃない」と、月詠が言った瞬間。

「頭」

黒い陰が月詠と日輪の前に現れた。

「来たか保波^{ほなみ}」

「まあ、この子が」

「これは、日輪様」

保波、と呼ばれた彼女は日輪にも軽くお辞儀をした。

日輪は保波の姿を見て、少し驚いている。

…何故って、その容貌がほとんど人間のそれと変わらないのだ。

黒い布で顔の半分を覆ってはいるが、見目には分らない。

（まあでも神楽ちゃんも姿は人間なものね）

しかし、強いて言うなら違いはあった。

保波の目と、髪である。

何より目立つのは、目の下の隅。寝不足でできるようなうつすらとしたものではなく、化粧をしたように黒い。

そして瞳もこれまた黒々としており、大きい。更に髪まで、異常に黒い。普通、人間も髪は黒いが、透明感が全く無いほどに黒いのだ。

保波はその真つ黒な髪を下の方で一つに束ね、団子にしていた。

「天人の百華を集め、伝えておいてほしい事がありんす。…これを」
月詠は保波に手紙のような物を渡した。

「はい」

保波は綺麗に折り畳んであるそれを素早く開け、目を通す。

「…天人に対して気をつけよとは…。攘夷志士ですか」
保波は目を伏せる。

「その可能性は高いが…わっちも詳しくは聞かされておりんせん。
とにかく、気をつけてほしい、とのことじゃ。」
月詠は少し眉をしかめた。

「わかりました。皆に伝えておきます」

「ねえあなた」

突然日輪が保波に話しかける。

「はい」

「その右手…どうしたの？怪我でもしたのかしら…」
日輪は心配そうに保波の右手を見つめる。保波は右手に包帯をぐるぐると巻いていた。

「ああ…これは」

保波は包帯を解いていく。

すると、手の甲に入れ墨のような黒い印が現れた。

何か複雑な文字のようにも見える。

「入れ墨？かしら」

「はい、そのようなものです。これは、私たち黒曜族に伝わる印です。黒曜族はみんなこの印を右手の甲に持っています。生まれてすぐ一族に伝わる特別な入れ墨を彫るんです」

保波は愛おしむようにその印を撫でた。

「そうだったの。天人にもそれぞれの一族の風習があるのね」
日輪は穏やかに笑う。

「はい」

日輪のその名の通り太陽のような笑顔につられて、保波も笑った。

保波は思った。

（私は、幸せだ）

地球で生きた黒曜族の仲できっと一番に、幸せだ。

（ただあの子だけが心残りだけねど）

「保波？どうした？」

ボーっとしているように見えた保波に、月詠が話し掛ける。

「あ！いえ！申し訳ありません。では私はこれで失礼します」
保波はハツとして、焦ったように去って行った。

「なんじゃ、あいつは…」

月詠は不思議そうに保波の後ろ姿を見つめた。

「ねえ月詠…」

日輪は呟くように月詠を呼ぶ。

「なんじゃ？」

「私、銀さんにも伝えておいた方が良い気がするの…」

「銀時に？」

月詠は首を傾げた。

「頼りっぱなしのようでない気もするんだけど。…春雨は、吉原だけじゃなくて、『世が乱れる』って言っていたわ」
日輪は静かに俯く。

「銀時一人に伝えた所で…と言いたい所じゃが、わっちも何故か伝えておいた方が良いのではないかと思っていた所でありんす」
月詠は苦笑した。

「銀さんだもの。誰だってそう思っちゃうわ。…じゃ、決まりね！

月詠、明日銀さんの所に行つてきなさい」

先ほどと一転、日輪はニコニコとして月詠の背中をポンと叩いた。

「別にわっちが行かんでも電話か使者を出せば…」

「何言つてるの！こういう大切な事は直接言いにいかないとダメよ」

「そうか？」

「とにかく行つてくるの！」

「は、はあ…」

月詠は日輪の剣幕に推され、思わず頷いてしまった。

そして次の日。

「いーなあ、月詠姉だけ銀さんの所に行くなんて。僕も行きたいよ」

朝の吉原は、静まり返っている。
そんな吉原の大通りに、3つの陰があつた。

無論、日輪と月詠、そして晴太である。

「別にわっちは良いのじゃが…」

駄々をこねる晴太を見て、月詠は日輪を見た。

「いいのよ。晴太はまた今度私と一緒に行きましょうね」

「ちえ」

日輪は晴太の頭に手をポンと乗せて、月詠に笑いかける。

「？そうか。では、行ってくる。」

月詠は不思議そうにしながらも、吉原を出発した。

「銀さん達によろしくね！」

「あっ！僕もよろしく！」

「ああ。わかった」

振り返り、手を振る。

こんな平和が、やっと手に入れた平和が、一体どうやって崩れる

と云うのだろうか。

月詠は小さくため息を吐いて、歩を速めた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第三十三訓 悲しいことも嬉しいことも普通はいきなりやってくるもんだ（後書

もやもやした方は、

前の話を読み返していただけると

分かると思います＞＜

次の話はすぐに更新いたします。

第三十四訓 世の中何でも上手くいくと思ったら大間違いだコノヤロー（前書き）

万事屋＋。

長いです。

色々説明されていきます。

銀さんのキャラがまたもや原作と違うような…（＜―＞）
努力します…；；

第三十四訓 世の中何でも上手くいくと思ったら大間違いだコノヤロー

「おはよう神楽ちゃん」

「新八。おはようアル」

翌朝。何とも清々しい朝である。

新八が万事屋に出勤してきた時、神楽はまだ寝間着のままだった。

「さつき起きたの？」

「おうネ」

（昨日遅かったからなあ）

「銀ちゃん、帰ってきたアルよ」

神楽は目を擦りながら微笑んだ。

「ああ。神楽ちゃん寝ちゃったもんね」

「銀ちゃん、まだメツチャ寝てるアル」

神楽は銀時が寝ているであろう寝室を指差した。

「まあ…銀さんも相当寝るの遅かったしね」
新八はまったくなあ、と呟いて苦笑いする。

「銀ちゃんの奴いつからあんな不良になっちまったアルか！そんな風に育てた覚えはないネ！！」

「またお母さんかよ」

チツ、と舌打ちをする神楽に、新八のツッコミ。
…いつもの万事屋である。

《ピンポーン》

「えっ嘘、お客さん！？」

新八は大層驚いている。

こんなに朝早くから依頼が来るなんて、かなり珍しいのだ。
しかも店主たる銀時は夢の中だ。

「早く出るアル新八。私は着替えてくるネ。お客さん待たせんじやねーぞ！！」

神楽はそう言うともものすごい早さで奥に消えていった。

「全く銀さんも神楽ちゃんも…」

はあ、とため息を吐いた後、新八は駆け足で玄関に向かった。

「はい」

ガチャリ、と鍵を開け、戸を開ける。

「あ…え！？月詠さん！？」

「あ、ああ…いや、うん…どうも…」

「あ…どうも」

（何この気まずい空気iiiiii）

「あ、上がって下さい！あ、えっと、何かの依頼ですか？」

新八は何故かギクシャクしながら月詠を案内した。

「い、いや、今日は少々銀時に用事がありんす。銀時はいますか」

そして月詠は何故か敬語になりながら万事屋のソファに座った。

「あーっ！ツッキー！」

…と、急に奥から出てきたのはもちろん神楽である。

「あ、お邪魔している」

「どうしたアルか！」

「いや、えっと、銀時はいますか」

「イエッサアア！ぎーんちゃーんっっ」

月詠に言われるなり、神楽は襖をパンツと勢い良く開けた。

そしてそのまま、銀時の上にダイブする。

「ぐえええええ！何！？何！？」

どうやら銀時は目を覚ましたらしい。

「起きるアル不良息子おおお！！女の子が来てるわよいつから彼女なんて出来たの不良息子おおお！！」

「うつせーよ！！何だよ！？」

銀時はガバツと布団と神樂をはねのけ、そのまま勢い良く立ち上がった。

「あ、銀時」

「…あ？」

そして、目の前の月詠と目が合った。

「お前は全くだらしない！早く着替えてきなんし」

「いやいやいや何で月詠がいんの」

「良いから早く着替えてきなんし」

「銀さん」

「銀ちゃん」

「……。」

ジー、と見つめられる。

「はいはいわかりました。着替えてきますよ、てか俺キャラがくね？なんかさあ、もつとどっしり構えてる感じじゃん余裕な銀さんが好きってファンは多いんだよマジで」

ブツブツと愚痴りながら銀時は奥の部屋へ消えた。

そして数分後、銀時はピシッと…いや、いつものようにだらーんとして現れた。

いつもの着物である。

「はいお待たせ。で？どうしたんだア月詠」

銀時はドカッとソファに座る。

「今日は依頼でも何でもありません。ぬしに話をしにきたんじゃ」
月詠は銀時と対照的に、凜とした雰囲気を保っている。

「話？」

銀時はいつもの気だるさを纏いながらも、話は真剣に聞いているようだ。

「ああ。…まあ、率直に言つとだ。先日、宇宙海賊春雨から吉原に連絡が入った。」

「春雨…？」

銀時達にとって、全く良い響きではない。

「ッ、ツツキー、ちよつと待つアル…。吉原につて事は…」

銀時の隣で月詠の話聞いていた神楽が不安気な表情をする。
新八もまた然りであつた。

「ああ。連絡して来たのは、春雨と云うより、神威だと言つた方が
良いじやろう」

月詠は小さくため息を吐いた。

「それで？神威が何て？」

銀時は別段驚きもせず、問い返す。

「近々世が乱れる、と。吉原だけではありんせん。世が乱れるから
気をつけろと言つてきよつた。しかも、天人を氣にかけておけと言
つておつたんじゃ。」

「世が…乱れる？」

新八は少し青ざめているように見える。

「…わつちも詳しい事はわかりんせん。何せ神威の氣紛れじゃ」

「意味分かんないアル！！あんのバカ兄貴が…」

毒をはきながらも、神楽は複雑そうな表情だつた。

「しかし。こんな事は初めてなんじゃ…。鳳仙が亡くなつて楼主が
神威に変わつてからと云うもの、神威は全く吉原に手出しはしてき
なんだ。それが初めて、ほんの少しじゃが関与してきたんじゃ」

月詠は鋭く目を光らせた。

「春雨…か」

ふと、銀時は高杉の顔を思い浮かべてしまった。

「ねえ銀さん…それ、前桂さんが言ってた事に関係あるんですかね…」

新八も銀時とそう考えは変わらないらしい。

「ヅラが言ってた事って、高杉がどうとかってやつアルか？」

「うん…」

「まあ、可能性はあるんじゃない？あいつら全体的に過激だし。」
銀時は見目には何の興味もなさそうだった。

「まあ、何じゃ…。何となくぬしらには話しておいた方が良かったと思っただけだ」

「他には何も聞いてないアルか？その…神威から」
神楽はやはり気になるらしい。

「ああ。他には何も。その、高杉…の事は何も言っておらんかった」
月詠は少し目を伏せた。

彼女も、高杉晋助の名は知っているようだ。

「そうか」

銀時は上を向いた。

彼は天井を見つめたまま、動かない。

「銀さん？どうしたんですか」

新八は心配そうに銀時を見やる。

（やっぱり…何か気になるのかな）

「いや」

銀時は短く答え…

腰の木刀を抜いた。

「えゝ！？」

新八と神楽と月詠はギョツとした。

「てめえは何勝手に人ん家の屋根裏に上がり込んでやがんだボケエ
エエエ！！！！」

ドシューウウ！！

と激しい音をたてながら銀時の木刀が天井に刺さった。

「銀さああああんっ！」

紫色の髪。赤い眼鏡。

「チッ、俺としたことが…」
（気づくのが遅れた）

「…さっちゃんさん」

新八は非常に脱力した。

だるそうにしている銀時は、周りにハートを振り撒くさっちゃんに
まわりつかれている。

「またストーカーかよメス豚があ」

神楽も冷めた目でさっちゃんを見た。

「…な、何じゃぬし…」

初めての経験に、月詠はタジタジである。

「ちょっとツツキー。何あなた抜け駆けしてるのよ。空気読みなさ
いよ銀時くんはあなたのものじゃないの！みんなのものなの！暗黙
の了解ってヤツを知らないわけえ！？」

「いや別にそういうつもりは…」

「てめえは女子高生かああ！！」

銀時は纏わりつくさっちゃんを振り落とした。

「うふふふ！そんなことして私が喜ぶと思つてえ！銀さんたら
っ」

「何なのコイツいつもに増してウザいんですけど。捨ててきて良い
？」

銀時は調子の良いさっちゃんに対してげっそりとしている。

「私をいじめたい気持ちは分かるけれど……ちょっと良いのかしら？」

「！」

急に、さっちゃんの声色が変わる。

そして、目にも留まらぬスピードで銀時との距離を詰めた。

「何なんだてめえは……」

銀時はさすがと言おうか、全く驚いていない。

新八や神楽は少し表情を固くする。

月詠はいつものさっちゃんと違う雰囲気に見えているように見えた。

「銀さん。分かっているかもしれないけれど……、気をつけた方が良いわ」

さっちゃんは少しずれた眼鏡をスツと上げる。

「……ったくよあ、みんなしてそれだよ。気をつけるつつたてなあ、何に気をつけりゃ良いのかもわからねえのに気をつけようが無いつつの」

銀時は面倒くさそうに頭をポリポリ掻いている。

「最近忍の動きが本当に異常なのよ。こんなことは今までなかった

わ」

「異常って…何なんですか」
新八は眉をひそめた。

「依頼件数が尋常じゃないの。しかも、依頼主はその殆どが攘夷志士。潜入先は幕府。…少し前まではね」

「少し前…？」

確かに、数が極端に増えたことを除けば、攘夷志士から幕府への隠密自体は珍しくないはずである。

「最近、また急激に依頼が増えた。その依頼っていうのが、攘夷志士からの依頼で、潜入先も攘夷志士、というものよ。」
さっちゃんの目が鋭くなる。

「攘夷志士から…攘夷志士だと？」

月詠も攘夷志士の事は一般知識程度には知っていた。

「意味分かんないアル！」

「そう、意味が分からないの。だから、私自身で色々調べてみたのよ。そうしたら…、依頼主は過激派攘夷志士、潜入先は穏健派攘夷志士ばかりであることが分かったわ。それに、潜入だけじゃなくて情報伝達の仕事も結構あったのよ」
さっちゃんは軽いため息を吐く。

「過激派攘夷志士と…穏健派攘夷志士…？」
そう聞いて新八や神楽の頭に浮かんだのは、2人の人物。

「……………」

銀時の瞳が微かに揺れた。

（いや、まだあいつら2人が絡んでいるかはわからねえ）

もちろん、銀時の頭に浮かぶのも攘夷志士の2大頭と呼ばれる幼なじみ2人である。

「そして。その情報量もハンパじゃないわ。まあ私も忍だし、あんまり詳しいことは言えないけれど…。ねえ銀さん…」
さっちゃんは珍しく深刻そうな表情をしていた。

「あんだよ」

銀時はそんなさっちゃんの表情に、しかめっ面をしている。

「私も銀さんの詳しい過去まで知らなかったから驚いたんだけど…
…あなたの昔の二つ名と、最近は本名まで…攘夷志士たちの間で出
回り始めてるみたいよ」

「………!!」「………」

一同は耳を疑った。

「何だつつうんだ一体…。つつかヅラと高杉は何してやがる」
初めて銀時が感情らしい感情を表に出した。

「貴公子、修羅、龍虎、そして夜叉…」

「!」

銀時の目が一瞬、ギラリと光った。

「…何じゃそれは」

はつきり言って、月詠はあまり状況を認識仕切れていない。しかし、さすが月詠である。何とか話についてきていた。

（銀時が、攘夷に関係がある、ということか…？）

「銀さんなら、わかるでしょう？この4つの単語、隠密や情報交換の際の隠語として使われているの」

眼鏡を光らせるさっちゃんの表情はよく見えない。

「……。」

銀時の表情からも、何を考えているのかはわからなかった。

「貴公子…とは。狂乱の貴公子、桂小太郎か？」

高杉と桂は攘夷志士の中でも有名どころなのだ。

「正解よツツキー」

「もしかして修羅は高杉さん？」

（ただのイメージだけど）

新八は思いついたように言った。

「正解よメガネ」

「いやあんたに言われたくないんですけど」

「修羅に生ける獣。そんな風に言われていたそうね」

新八のツツコミは全く無視である。

「りゅう」…？って何アルか？」

「辰馬だ、辰馬」

銀時が面倒くさそうに答える。

「伯仲の二神。ね」

この二神、とは龍虎のことである。

「え…あの馬鹿が何でそんな格好いい感じで呼ばれてるアルか…」
神楽は胡散臭そうに眉を寄せる。

「じゃあ夜叉って」

新八は銀時を見た。

「そういうこと。4人合わせて武神四侍！…だっ たかしら」

「5人合わせてゴ ンジャー！みたいなノリで言っ のやめてくんない！？ ったく…何でそんな昔の中2な辛気くせえ名前を今更聞かされなきゃなんねえんだ…」

銀時はあーああ、と深いため息を吐く。

「とにかく！私がここまで知っていること自体がもう異常なのよ！
銀さんに何か起こるのは明白でしょ。後は銀さんに任せるわ。まあ
銀さんの隠れた人間関係なんて知らないけどねっ」
さっちゃんは何故か頬を染めている。

「何で赤くなってるんですか」
そんなさっちゃんを見て新八は半笑いである。

「だって格好いいじゃない！！そんな銀さんも素敵あゝ うっ！！」
さっちゃんはさっちゃんて半笑いになりながら銀時にぶっ飛ばされる。

「てめえは今さっき役目が終わった。ギャグパートっぽくなる前に今すぐ帰れ」

銀時イライラしながらさっちゃんに木刀の切っ先を向けた。

「もう銀さん！！あなたがそうやって冷たくすればするほど私が燃え上がるとわかっての所業ね！？」

身悶えるさっちゃんに対し、銀時はどんどん彼女を玄関の方へ追いやっていく。

「うっぜえええー！！」

そして、最後の一発。

ピシャンッ

と扉を閉め、さっちゃんを外に追い出した。

カラカラカラ…

それから銀時は扉を少しだけ開けて、顔だけを覗かせる。

「銀さん？」

外に追いやられたさっちゃんは不思議そうに首を傾げた。

「礼は言つとかねえとな。ありがとよ。まあ不本意じゃねえけど！超悔しいんだけど！あ、後一生くんなよ」

ピシャンッ

と扉が閉められた後、さっちゃんが身悶えに悶えたのは言うまでもない。

「わっちも、もう帰るよ」

さっちゃんを見送った月詠はフツと笑った。

「月詠さん？」

新八は月詠の方を振り返った。

「話を深追いする気も、これ以上長居する気もありんせん」

「…おう。早くけえれ、けえれ」

銀時は耳をほじくりながら手をひらひらと降る。

「ツッキー…」

神楽は眉じりを垂れて月詠を見上げた。

「何じゃ？」

「気にならないアルか？」

「……。」

銀時にも、神楽の言葉ははっきりと聞こえた。銀時に聞こえないように小さな声で言ったつもりだったらしいが、確かに聞こえたのだ。

月詠は、何について“気にならない”のか、すぐに察した。

月詠も神楽同様、小さな声で神楽に言う。

「全く気にならないと言えば嘘になるのう。しかし、銀時が聞かれたくないと思っているのはわかる。人には踏み込んではいけない一線というものがあるんす」

月詠は優しく微笑んだ。

「…私はツツキーみたいに大人にはなれないネ」

神楽はムスツと膨れる。

「まあ、ぬしらと銀時は家族のようなものじゃ。確かに知りたいと思うじやろう。しかしな、銀時はきつとぬしら2人の事をよく考えてくれていると思うぞ。」

「そうアルか？銀ちゃん、話してくれるアルか？」

神楽の目が少し輝いた。

「ああ。銀時はぬしらを大切に思っているからな。話すべき時に、話してくれるじやろう」

月詠は神楽の頭にポン、と手を置いた。

「わかったアル！ありがとツツキー！」

神楽は満面の笑みである。

「ああ。じゃあな3人とも」

月詠はブーツを履いた。

「お前えにも礼を言わねえとなア。ありがとよ」

「別に礼などいらん。ただ、わっちらは今までぬしらに助けてもらってばかりじゃ。ぬしに何があったのか詳しくは知りんせんが、何かあったらいつでも頼ることの出来る存在があると云うことは忘れんでくれ」

月詠は穏やかに笑う。

「頼もしいじゃねえか」

銀時少し笑った。

「ありがとうございます、月詠さん。あ、日輪さんや晴太くんにもよろしくお伝え下さいね」

新八もにっこりと笑い返した。

「あ、忘れておった、日輪と晴太にもぬしらによろしく伝えてくれと言われておったんじゃ」

「あはは。了解です」

しっかりしているようで、少し天然な月詠らしかった。

そして、月詠も万事屋を出て行った。

「はああ…朝っぱらから騒がしすぎて頭が痛えよ…」

銀時はドカツと社長席に座る。

「……………」

そして、新八と神楽は静かにソファに座った。

……………

気まずい沈黙が続く。

そりゃあ、あれだけ情報を貰えば、2人が戸惑うのも当たり前だろう。

（そろそろ、限界か）

自分の綺麗とはとても言い難い過去を、子ども達に話すことに全く躊躇いが無い訳ではない。

しかし今まで話さなかったのは、話す必要が無かったから、という理由のみである。

今は、果たしてどうだろう？

さっちゃんが、自分の過去を知っている。月詠も何となくは理解しただろう。

さっちゃんの話からして、攘夷志士が不穏な動きを見せているのは明白。

更に自分たち4人の名前が隠語で出回っている。

しかも、穏健派と過激派の間で何かしらの交流があるのだ。異常も異常。

（さすがに…高杉とヅラに交流があるってのは、ナイ。それはナイ！）
あつたら困る。

そんなこと、あの桂に限ってあるはずが無いと自分にただ言い聞かす。

（さっちゃんの情報ってヅラに知らせた方がいいのか、悪いのか）
何だかワケが分からなくなってくる。

（つか、ヅラと高杉が密通するんなら、まだ俺と高杉が密通する方が自然だっつうの）

桂と高杉は仲が悪い。小さい頃から、ずっと喧嘩しかしていなかったし、それに攘夷戦争が終わりに近づくにつれ、本格的に仲違いし始めたのを強く覚えている。

（…あれ、でも村塾にいた頃は何だかんだ仲良かったような）
ポン、と浮かぶ、楽しそうに笑い合う小さい2人の子ども。二人とも上質な着物を着ていたなあ、と思い出す。

（わっかんねえ。なんかドツボにハマっちゃった…）

銀時ははあ、とため息を吐く。

「あの一…銀さん？」

「！あ、悪い、珍しく考えごとしちゃった」

「銀ちゃん…」

神楽がブスツとして銀時を横目で見ろ。

「……。」

それを見た新八も、銀時を複雑そうな顔で見ろ。

「…まあ、お前えらも俺の昔話が綺麗なもんじゃねえ事くらいはわかってるだろ」

銀時は、吹っ切れたような表情をしている。

「そんなの屁でもないネ！」

「何だって受け止める覚悟、とつくの昔からできてますよ！」
2人は必死だった。

「話さなきゃならねえみたいだな。状況が状況だし？」

銀時はただ面倒くさそうに頭を掻いた。

「銀さん…」

「銀ちゃん…」

2人は安心したように笑った。

「まあ、良いだろ。ヅラも、辰馬も、お前らになら何とも適当である。」

が、確かに桂と坂本なら問題あるまい。

これから何かが起こるのは確からしい。
話す必要性も銀時には感じられた。

（後で…ヅラの所にも行った方が良いな）

「…とりあえず。出かけるぞ」

「え？どこに！？」

新八と神楽はいきなりの事に驚いた。

「良いから。ついて来い」

まさか2日連続であの場所に行く事になるなんて。

あの人は、喜んでくれるだろうか。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第三十四訓 世の中何でも上手くいくと思ったら大間違いだコノヤロー（後書き

ありがとうございました！

ツッキーもさっちゃんも銀さんが心配なんですよね（笑）

しかしさっちゃんを書くのは

苦勞します……

次からは、遂に、という感じです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4101i/>

銀魂 攘夷篇

2011年11月17日21時03分発行